

●培養土に油
粕・米糠・灰
などを混じ
て調製せる
もの。

●鉢植せる苗
の根は鉢の
内面に沿ふ
て蔓延する
の性あるが
ゆゑに、漸
次大形の鉢
に移すとき
は、根はよ
く鉢内に充
満するも、
盆初より大
鉢に移植す
るときは、
鉢の中央に
根の蔓延す
ること少き
不利あり。

(三) 古鉢は、使用前よく洗滌して、清潔ならしむべし。是れ、古鉢には、蘚苔泥土など附着し居りて、外觀不可なるのみならず、蘚苔などの存在するときは、鉢内の養分及び水分を横奪するの害あるによる。而して、古鉢を洗滌するには、數時間水中に浸し置きたる後、タハシなどを用ひて行ふべし。洗濯曹達灰などを塗抹して、よく摩擦するときは、容易に附着物を除き去るを得べし。

(四) 鉢植に用ふる培養土は、植付くる花卉の種類によりて多少異なるも、概して腐植に富む砂質壤土又は壤土にして、之に養分に富めるもの(肥土)を加ふるを可とし、何れも豫め調製し置くを要す。

(五) 鉢植は、最初より大鉢を用ふることなく、先づ、苗に相應したる小鉢に植ゑ、漸次大鉢に移すを可とす。而して大鉢に移植する際には、小鉢の土の崩れざるやう注意すること肝要なりとす。

(六) 鉢植せる花卉にして、未だ開花期に達せざるもの又は既に開花を了りたるものは、夏の間、灌水の勞を軽減せんがため、鉢の儘、土中に埋むることあり。此際、鉢の上端は、地上に露出せしむるを常とす。又開花中の鉢植などにおいて、水盤な

どに水を汲み入れ、其中に鉢の下端を浸し置き、灌水の勞を省くことあり

(七) 鉢植せる花木は、毎年又は隔年に、秋落葉後又は春發芽前に於て植換を行ふ。此際、適宜根を剪定すべく、枝も亦適宜剪定するを可とす。尙ほ、植換せざる場合には、鉢の上方の土を除きて、之に代ふるに、養分に富める培養土を以てするを可とす。

(八) 鉢植せる花卉は、臺の上に載せ置くを可とす。蓋し地上に永く鉢を靜置するときは、鉢底の孔より根を下して地中に入るの弊あるによる。

第九章 花卉の施肥

施肥 (Manuring) は、花卉の栽培上甚だ肝要なる手入なり。蓋し、美大の花を開くべき花卉も、之に施す肥料少きに過ぎ、爲めに土中養分の不足を訴ふる場合には、到底固有の美花を開くこと能はざるものなり。是れ、花卉には肥料を施すの肝要なる所以なり。

肥料の三要素

凡そ作物の土壤より吸収する養分中、作物の發育上缺くべからざるものは、窒素・磷酸・加里・石灰・苦土・硫酸及び鐵の七成分にして、是等は、其一を缺くも、七成分の悉く缺けたる場合と等しく、作物毫も發育すること能はず。されば、以上の七成分は、何れも肥料として土壤に加ふべきこと一應の理なり。然るに、特に窒素・磷酸・加里の三成分を肥料の三要素と稱し、特に之等の三成分を施すを肝要とする所以は他なし、是等の三成分は、作物に需要せらるゝこと多きにも拘はらず、可給態となりて土中に存在する量甚だ少きがため、肥料として施すの要大なるも、之に反して、他の四成分は、或は土中に存在する量多きか、又は作物の需

●肥料の四要素と稱し、三要素の外に石灰を加ふる、ことあり。

要する量少きがため、特に肥料として施すの要なきを常とするによるものなりとす。

●花卉に對する施肥は、花草と花木とによりて、其趣を異にする所あるのみならず、花草・花木も亦、其種類の異なるによりて、施肥上多少の相異なるものとす。されど何れの花卉も、皆三要素を要するものにして、唯、其要する三要素の割合は、花卉の種類によりて異なるに過ぎず。尙ほ、三要素の割合分量等は、花卉の種類の外、土地・氣候などの影響を受くること大なるものとす。今先づ本邦に於て施用する主なる肥料の分析表を示せば、大約次の如し。

肥料名	肥料百分中の主成分			
	水	有機物	窒素	磷酸 加里
下肥	九五.〇	三.四〇	〇.五七	〇.一三
馬糞	七六.〇	—	〇.四五	〇.三〇
牛糞	八四.〇	—	〇.一七	〇.一五
豚糞	八〇.〇	—	〇.六〇	〇.一五

●肥料の花弁は肥料として窒素を施すの要甚だ少し。

紫雲英(生草)	八二〇	一七〇	〇四八	〇〇九	一七三	〇三七
米糠	一一三	七六二	二〇八	三七八	一四〇	一四〇
大豆粕	一一五	八三四	六六〇	一三〇	二五〇	二五〇
油粕(菜種粕)	一一三	八三〇	五〇五	二〇〇	一三〇	一三〇
藁灰	三一	五八	—	二一〇	四五〇	四五〇
木灰	四一	一一	—	三九〇	一一七〇	一一七〇
硫酸加里(良質の)	—	—	—	—	五〇〇〇	五〇〇〇
硫酸アムモニア	—	—	二〇五六	—	—	—
重過磷酸石灰	—	—	—	四〇〇〇(有効)	—	—
過磷酸石灰	—	—	—	一五〇〇(有効)	—	—
蒸製骨粉	—	—	三五〇	二三〇〇	—	—
智利硝石	—	—	一五五〇	—	—	—
粹粕	一二、九二	—	九七五	四〇四	—	—
粹鱈	一一〇三	—	九九〇	三九五	—	—

乾魚	一七九	六一五	六六〇	二二三〇	〇六〇	〇六〇
鱈	七〇	六七一	七五〇	三七〇	〇七〇	〇七〇
蠶蛹	七八九	—	一九〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
蠶沙	六〇〇	—	一四〇	〇三〇	〇一〇	〇一〇
鵝糞	七七一	一三四	〇五五	〇五四	〇九五	〇九五
鳩糞	五一九	三〇八	一七六	一七八	一〇〇	一〇〇
家鴨糞	五六六	二六二	一〇〇	一四〇	〇六一	〇六一
家雞糞	五六〇	二五五	一六三	一五四	〇八五	〇八五
雞糞	七九〇	一四五	〇五八	〇三〇	〇五〇	〇五〇
厩肥(新)	七五〇	一九二	〇五〇	〇二六	〇六三	〇六三
厩肥(稍腐熟)	七五〇	二一二	〇三九	〇一八	〇四五	〇四五
豚尿	九八〇	—	〇三〇	〇一三	〇七五	〇七五
牛尿	九四〇	—	〇六〇	痕跡	一三〇	一三〇
馬尿	九〇〇	—	一五〇	痕跡	一六〇	一六〇

菜種粕。

前記の肥料中、古來、我邦に於て用ひたるものは、下肥、厩肥、油粕、魚肥、米糠、鶏糞、草木灰等にして、近年特に多く用ひらるゝに至れるは、大豆粕、過磷酸石灰、硫酸アムモニア等なりとす。而して之等の中、下肥、厩肥、油粕、魚肥、大豆粕、米糠、鶏糞等は、所謂有機肥料に屬し、其儘にては花卉の養分となることなく、腐熟したる後、始めて花卉に吸収せらるゝものなり。又硫酸アムモニア、過磷酸石灰、草木灰等は、無機肥料に屬し、其儘花卉に吸収せらるゝも、之れが吸収の多少は、水に溶解する量の多少によりて相異なるものとす(水に溶けること多きものほど多く吸収せらる)。

下肥、鶏糞等の糞尿類

下肥、鶏糞等の糞尿類は、新鮮のままにて使用するも、其効なきのみならず、往々花卉に有害なるが故に、腐熟せしめて、尿素(下肥にあり)又は尿酸(鳥糞にあり)の炭酸アムモニアに變じたる後に使用するをよしとす。下肥を腐熟せしむるには、瓶又は漆喰せる穴などの中に之を入れ、二三倍の水を混じて蓋をなし、且つ屋根を設け、東西南の三方を圍ひて、兩日光などの直射せざるやうになし置くときは、數日乃至十數日を経て、下肥の色は暗綠色又は暗褐色に變

⑤ 尿素がアムモニアに變化するはウレアーゼと稱する酵素の作用による。此酵素は大豆の種子中に存在するが故に早く腐熟せしめんとす。鮮下肥一石に對し大豆粉五合乃至一升を加へて攪拌すべし。尙ほ、下肥中のアムモニアの揮發を防ぐため夏季に永く貯ふる際などは、下肥の割合を内外の割合にて過燐酸を加ふるを

すべし。此徵候は、尿素の變じて炭酸アムモニアとなれることを示すものなれば、最早使用して可なり。又鶏糞其他の鳥糞は、土壤に混じ、雨のかゝらざる處に堆積して、腐熟せしむるも可なりと雖も、瓶などに水を入れ、其中に鳥糞を投じ、置くときは、數日乃至十數日の後、尿酸は十分に分解して炭酸アムモニアとなるが故に、其上水を汲み取りて使用するを便とす。而して下肥、鳥糞の液肥などは、之を補肥として用ふる場合には、適宜稀釋して用ふべく、其濃厚なるものを施して葉に觸れしむるが如きは、葉を損傷するの虞あれば、注意すべし。

油粕、魚肥の類

魚肥、油粕類は、通例、粉末となして使用する。是れ、撒布に便なるのみならず、腐熟を早むるの効あるによる。而して、之等の肥料には、往々多少の草木灰を混じて施用することあり。然るときは、魚肥、油粕中の油分は、草木灰中の加里により、鹼化せられて加里石鹼となるがため、容易に土中の水にとけ去るがゆゑに、魚肥、油粕等の腐熟を促進するの効あるのみならず、兼ねて加里を補足するの効あり。尙ほ、魚肥、油粕の類(米糠も亦同じ)は、蓋のある瓶などに入れたる水中に投じ、腐熟せしめて、其上澄を利用するときは、其効甚だ速なるものなり。特に晩秋に

可とす。但し此際炭酸の發生するがため沸騰するがゆゑに注意すべし。

●壁の高さを五尺餘とし、其上に開閉の出来る窓を設くべし。

於て、此方法を施し、永く貯藏せるものは、花卉栽培家の間に賞用せらる。其肥料と水との混合割合は、別に一定せるものにあらざるも、肥料一に對して十倍内外の水を加へて貯ふべく、尙ほ施用の際、適宜稀釋すべし。

厩肥 厩肥は、家畜の糞尿と敷藁との混合せるものにして、通例、堆肥場に堆積して腐熟せしめたる後に使用す。堆肥場に於ける厩肥の取扱宜しきを得ば、二三ヶ月間堆積するも、肥料分の損失すること甚だ少くして、却て可給態に變ずるの利あり。堆肥場は、厩肥の出入に便なる處を選んで設くべく、其床は三和土などを透さざるものにて造り、且つ之に少許の傾斜を附し、其最低の位置に溝を設けて溜槽に導き、以て厩肥中より流出する汁液を此溜槽中に蒐集すべし。尙ほ、堆肥場には屋根を設け、三方を壁とし、一方の出入口をば板戸となすべし。此くて厩肥を堆積するには、十分に壓迫すべく、且つ常に適度の濕氣を保たしむべし。蓋し、厩肥は、其堆積中、有機物の分解によりて、熱を生ずるものにして、發熱盛なれば、乾燥甚しく、乾燥甚しければ、アムモニアの發散すること大なるの損あり。されば、時々溜槽の汚汁を汲みて厩肥に澆ぐべし。尙ほ、堆積せる厩肥は、時々切り返しを行ひ、

全部一様に腐熟せしむべし。切返しの際には、外部のものをば、内部のもの、内部のものをば、外部に移し、適度の濕氣を與へつゝ、壓迫すべし。堆積の高さは、厩肥の種類、氣候の寒暖等によりて加減すべきも、約四五尺とす。之を要するに、厩肥堆積中は、空氣の流通を塞ぎ、濕氣及び溫熱を適度ならしむることに注意すべし。厩肥は、各種の養分を含み、徐々に分解して可給態養分を生ずるが故に、基肥として各種の作物に施用せらる。特に、此肥料は有機物に富むを以て、之を土壤に施すときは、土中の腐植を補ふの効あるのみならず、粘重なる埴土を改良して膨軟ならしめ、砂土を改良して保水力、吸收力(肥料中の養分を保つ力)を増すの効あり。

厩肥に似たるものに、混合肥料(Compost) 即ち堆肥と稱するものあり。藁稈、落葉、草など種々の物質を集めて堆積し、腐敗せしめたるものにして、厩肥と異なるは、主要なる原料の家畜糞尿ならざるにありとす。堆肥の原料に魚屑、其他の動物質、有機物を加ふるときは、腐敗を速かならしむるの効あり。尙ほ、腐敗せる尿又は下水などを撒布するときは、腐敗バクテリアを輸入して、堆肥の分解を盛ならしむるの効あるものとす。

過磷酸石灰

過磷酸石灰は、近年廣く用ひらるゝ所の磷酸肥料にして、磷酸に硫酸を加へて製すものなり。過磷酸石灰中の磷酸は、主として水に溶解する磷酸一石灰より成るも、枸橼酸アムモニア液に溶解する磷酸二石灰并に少許の磷酸三石灰(原料中の磷酸の化合態)を含有す。磷酸一石灰及び磷酸二石灰中の磷酸は、之を總稱して有効磷酸と稱することあり。過磷酸石灰の含有する水溶磷酸の量は、原料の種類并に製法の巧拙によりて一ならざるも、通例、一割五分乃至二割とす。

過磷酸石灰は、主として水に溶解する所の磷酸一石灰を含むが故に、其効驗甚だ迅速にして、所謂速効肥料に屬す。之を施用するには、種子又は作物根に接觸せしむることなかるべく、又石灰木灰などと混すべからず。其理由は、該肥料は酸性の反應を有するが故に、之を種子に觸れしむるときは、其發芽を害し、根に觸れしむるときは、之を損傷せしむるの虞あり。又石灰木灰等と混するときは、可溶磷酸は變じて不溶磷酸となるの不利あるによるなり。

此外、硫酸アムモニア、智利硝石、硝酸曹達、硫酸加里等も亦、近年花卉の肥料とし

て施用せらる。何れも水に可溶性の肥料にして、甚だ速効なるものなり。但し、是等肥料を用ふる場合には、其用量に注意すべく、過多なるときは、却て作物を枯死せしむるの虞あり。

肥料の配合

凡そ、花卉に施肥するには、三要素の割合宜しきを得ざるべからず。三要素の割合に過不足あるときは、ヤーピッヒ氏の所謂最少養分率に支配せられて、過剰の養分は、徒に流失するか、又は土中に殘留するを免れず。而して、一種の肥料を以て、作物の要する割合に三要素を供給することは、到底不可能のことなるが故に、此に於てか、數種の肥料を配合するの必要生ずるものとす。而して、肥料の配合をなすに當り、混合すべき肥料の種類適當ならざるときは、爲めに肥料中の三要素をして、往々無効ならしめ、又は其効果を減すること少からざるものなり。されば、肥料の配合を行はんとするには、先づ某肥料には、奈何なる肥料を混すべからざるかを知るの要あり。今左に混合の不可なる肥料中主要なるものを擧げん。

(一) 下肥と石灰木灰等。下肥のアムモニアを揮發せしむる害あるによる。

(二) 硫酸アムモニアと石灰・木灰等。硫酸アムモニア中のアムモニアを揮發せしむる害あるによる。

(三) 過磷酸石灰と石灰・木灰等。過磷酸石灰中の可溶磷酸を不溶性となすの害あるによる。

又施用に臨みて混合すること不可なきも、豫め混合し置くべからざる肥料あり例へば硝利硝石と過磷酸石灰の如し。(是れ主として智利硝石の潮解性に富みて、空中の濕氣を吸ふこと多く、爲めに固結するの虞あるによる)。

尙ほ、肥料中には混合の有利なるものも亦少からず、今其主なるものを擧ぐれば、次の如し。

(一) 下肥と過磷酸石灰。下肥よりアムモニアの揮發するを防ぐの効あるによる。

(二) 厩肥と過磷酸石灰。厩肥よりアムモニアの揮發するを防ぐの効あるによる。

(三) 下肥とカイニット。下肥よりアムモニアの揮發するを防ぐの効あるによる。

る。

(四) 厩肥とカイニット。厩肥よりアムモニアの揮發するを防ぐの効あるによる。

(五) 魚肥と草木灰。魚肥の油分鹼化せられて分解し易くのみならず、加里を補ふの効あるによる。

(六) 油粕類と草木灰。油粕類の油分鹼化せられて分解し易くなるのみならず、加里を補ふの効あるによる。

尙ほ、肥料の配合を行ふに當りては、肥料の反應にも注意するの要あり。過磷酸石灰などの如く、水溶液の酸性反應を呈する肥料は、之を酸性肥料と名づけ、草木灰などの如く、水溶液の鹽基性反應を呈するものを鹽基性肥料と稱す。又硫酸アムモニアは、元來中性の反應を有するも、土中に施して作物の吸収を受くる際には、アムモニアの方、硫酸よりも遙に多く吸収せらるゝがため、結局、硫酸は多く土中に殘存して、茲に酸性の反應を顯はすに至る。此の如きを生理的酸性肥料と名づく。又智利硝石(硝酸曹達)の如きも、元來中性なるに拘らず、硝酸の方多く作物に

吸収せられ、曹達の方多く土中に残留するを以て、鹽基性反應を呈するに至るが故に、之を生理的鹽基性肥料と稱す。此の如く、肥料には酸性、鹽基性等の別ありて、等しく可溶性の速効肥料なるも、其反應の奈何によりて、作物の發育に、相異を生ずるものなり。されば、種々の肥料を配合する場合には、豫め其配合肥料の總體の反應が、奈何なるべきかに注意し、普通の土壤にありては、成るべく中性又は之に近からしむること肝要なり。但し、酸性反應を有する土壤にありては、配合肥料の總體の反應が、稍、鹽基性を呈し、土壤の酸性反應を中和するに足るものなるをよしとす。要するに、土壤固有の反應と肥料の反應と相俟つて、最後の反應、中性なるを可とするなり。

花草類の施肥

先づ草花の苗を植ゑ付くるに際し、基肥として、良く腐熟せる堆肥に、油粕、灰などを混じたるものを植穴の中に施し、よく土壤と混和したる後、少しく土を被ふて、苗を植ゑ付くべし。かくて、爾後花の開く頃までに、適宜稀薄なる液肥例へば、油粕、魚肥、米糠などを水に入れて、腐熟せしめ、其上水を適宜稀釋して用ふを補肥として、數回施すものとす。又開花期間の長き花草にありては、開花

●回数花草發育の状況によりて異なり。

し始めたる後も、猶ほ稀薄なる液肥を施して、勢力の衰ふるを防ぐの要あり。但し、茲に注意すべきは、餘り多く施肥して、莖葉の繁茂に過ぐる虞なからしむべきことと是なり。尙ほ、花草植付の際に用ふる基肥は、成るべく豫め土壤に混じ、雨のかゝらざる場處に堆積し、以て十分腐熟せしむべく、液肥に用ふる油粕等も、亦前年の秋末頃より水中に投じ、越年せしめて、十分腐熟溶解せしむるを可とす。又球根類（チューリップ、ヒヤシンス、アネモネ、ランキユラス、ダーリア、カンナ等）植付の際、未熟の有機肥料を多量に用ひ、之れが球根に接觸せるがため、球根の腐敗を招くことあり。されば、よく注意して、腐熟せる肥料を用ふべく、且つ其肥料の上には、少しく土を被ふて、球根と接觸せざるやうにするをよしとす。尙ほ、硫酸アムモニア、智利硝石、硫酸加里なども、多量の水に溶解せしめ、補肥として用ふることあり。其割合は、花草の種類及び其發育の程度によりて異なりと雖も、水一升に對して約三四匁とし、鉢植の場合には特に較、薄くするを安全なりとす。

花木類の施肥

花木類の施肥は、一定せざるも、一年に二三回行ふを可とす。就中、晚秋落葉後より早春發芽前迄は、施肥の第一期にして、最も普通に行はるゝ施

肥期なり。此期間に用ふる肥料は、花木一年中の基肥とも云ふべきものにして、厩肥・堆肥・米糠・油粕・魚肥・骨粉・過磷酸石灰・下肥・草木灰等適宜のものを數種配合して施すべく、之につきては、三要素の配合を宜しくし、且つ配合せる肥料の反應にも注意するを肝要とす。而して、奈何なる割合にて三要素を配合すべきかは、花木の種類によりて異なるのみならず、同一花木にありても、土地・氣候等の關係によりて亦、頗る相異なるがゆゑに、具體的に記述すること能はずと雖も、要は、枝葉繁茂の狀況に注意し、枝葉の甚しく繁茂して花芽の生ずること少きものには、窒素の分量を少くして、磷酸及び加里の分量を多くすべく、之に反する場合には、其反對に、窒素を較多く施すやうにするを可とす。

花木の施肥は、右の如く、休眠期間に於てするのみならず、花木の成長中、尙ほ一、二回施すものとす。即ち梅雨の候は施肥の第二期にして、此際の肥料は、下肥又は之に米糠・油粕などを混じたるものなど、すべて速効なる肥料を用ふ。而して施肥の第三期は、秋彼岸頃にして、第二期の施肥に用ひたるが如き速効の肥料を用ふるを可とす。此の如く年三回に施肥するときは、花木の發育甚だ佳良にして、よく

美大の花を開くと雖も、施肥の量多きに過ぐるときは亦、却て枝葉を徒長せしむるの虞あれば、通例、第一期の施肥を十分に行ひ、第二期又は第三期の施肥は、樹勢に顧みて適宜行ふべきものとす。

凡そ、花木の根元には、養分を吸収すべき細根多く存せざるがため、茲に施肥するも其効少きがゆゑに、根元より稍離れて、花木の周圍をば數寸の深さに輪狀に掘り、其中に肥料を施して土を被ふを通例とす。之を輪肥と云ふ。但し花木の成長中に施す液肥(第二期及び第三期の施肥)は、樹下全面の土を僅に掻き除きて一圓に施し、再び元の如くに土を被ひ置くものとす。第一期の施肥と雖も、春季發芽前に液肥を用ふる場合には亦、之と同様にして可なりとす。

第十章 花卉の剪定及び整枝

第一節 花卉の剪定

剪定 (Pruning) とは、廣義に於ては、摘心・摘芽・剪枝・剪根・縱傷・自傷・枝曲げ等の總稱なり。凡そ剪定は、之を適當に行ふときは、有用なる部分のよく發育するを助け、又過度の成長を抑制して成熟に向はしめ、以て花芽を多く生せしむる等、其効頗る大なるものとす。

(一) 摘心及び摘芽 (Pinching and Disbudding) 摘心とは、新梢の先端を摘除するを云ひ、摘芽とは腋芽を摘除するを云ふ。兩者共に花卉の手入として往々行はるゝものとす。

花草類中、菊の如きは、往々枝數を増加せんがために、摘心するものにして、特に中菊の如きは、多くの枝を發生せしむるがために摘心を反覆するものなり。之に反して大菊の如きは、三枝を得ば足るを以て、挿芽によりて蕃殖せるものは、一回

摘心するに過ぎず。而して、何れも所要の枝數を得ば、爾後は摘芽に注意し、各枝の頂に一輪づゝ開花せしむ。又牽牛花の如きは、徒長して、花蕾の發生遅きものには、往々摘心を行ふ。特に大輪咲などにありては、屢、摘心・摘芽を行ふものとす。其他、種々の花草にありても、之を自然に放任して發育せしむるときは、草丈徒に伸長し、遂に倒るゝが如きことあるがゆゑに、之等も亦往々摘心して、側枝を發生せしめ、其強勢なるものは、適宜曲げたりなどして、草姿を整へ、以て各枝に美大の花を開かしむることあり。

花木類中、藤の如きは、往々鉢植として觀賞せらるゝものにして、之に多くの花を開かしめんとせば、落花後新梢發生の際、注意して摘心を行ふこと肝要なりとす。

(二) 剪枝 剪枝とは、不用の枝并に枯枝などを剪除し、且つ之れと同時に、有用の枝梢をも適宜切り縮むる等の手入を云ふものにして、主ら花木に行はれ、花草にも亦之を行ふことあり。すべて枝を剪る際には、鋭利なる鋏・小刀・鋸等を以てし、其切斷面は、成るべく之を平滑にして、傷口の速に癒合するやうにすべし。且つ枝梢

圖四十三第



一 剪枝
二 合理的に剪枝したるもの
三 不合理的に剪枝したるもの

が如く、主ら花を着けたる枝を刈込みて、結實のために樹勢の衰弱するを防ぎ、且つ樹姿を整ふるものにして、ダーリアなどには、第一期の花(六七月の花)終れる後に刈込みて強勢なる新梢を發生せしめ、以て第二期の花(九十月の花)を美大ならしめんとするものとす。

(三) 剪根 (Root Pruning) 剪根とは、其名の如く根の一部を剪除するを云ひ、地植せる藤などの徒長して開花せざる場合に之を行ふことあり、剪根を適當に行ふときは、水及び養分の吸収漸く減少するがため、枝葉の徒長抑制せられて、花蕾の形成多くなるの利あり、剪根は、通例、休眠期間に行へども、徒長甚しきものに對しては、夏期にも之を行ふことあり、但し、其程度は大に注意を要す。

(四) 縦傷 (Girdling) とは、深き木質部に達する縦の傷を枝上に作るを云ふ。凡そ、花木

の成長盛んにして、而かも皮壓大なる時は、枝の肥大成長を遂ぐるに難し。然るに、之に縦傷を附して皮壓を減ずるときは、其枝は容易に肥大するを得べし。されば、盆栽の花木などに於て、細枝を肥大ならしめんがために、縦傷を行ふことあり。

圖五十三第



目傷

(五) 目傷 (Notching) とは、芽又は枝の上部或は下部に於て、深き木質に達するほど、小刀にて切傷を附くるを云ふ。芽又は枝の上部に目傷を施すときは、根より上昇する水分は、此傷のために其上昇を妨げられて、芽又は枝に多く集まるがゆゑに、芽は伸びて枝となるべく、又枝は其勢力旺盛となるものとす。又枝の下部に目傷を施すときは、上昇し來る水分は、目傷によりて遮ぎられ、枝に入ること少きがため、其枝は發育を抑制せられて、伸長力を減ずるに至るものとす。目傷は、整枝上、吾人の望む所に枝を發生せしめんがため、芽の上に行ひ、又は強枝と弱枝との勢力を平均せんがため、強枝の下に行ふを常とし、春早く行ふこと多し。

(六) 枝曲げ (Bending) とは、枝を適宜彎曲するにありて、之を適當に行ふときは、強勢なる枝條の徒長を抑制し、又は勢力の弱き枝を適度に強勢ならしめ、以て花蕾

の形成を促すの効あり。

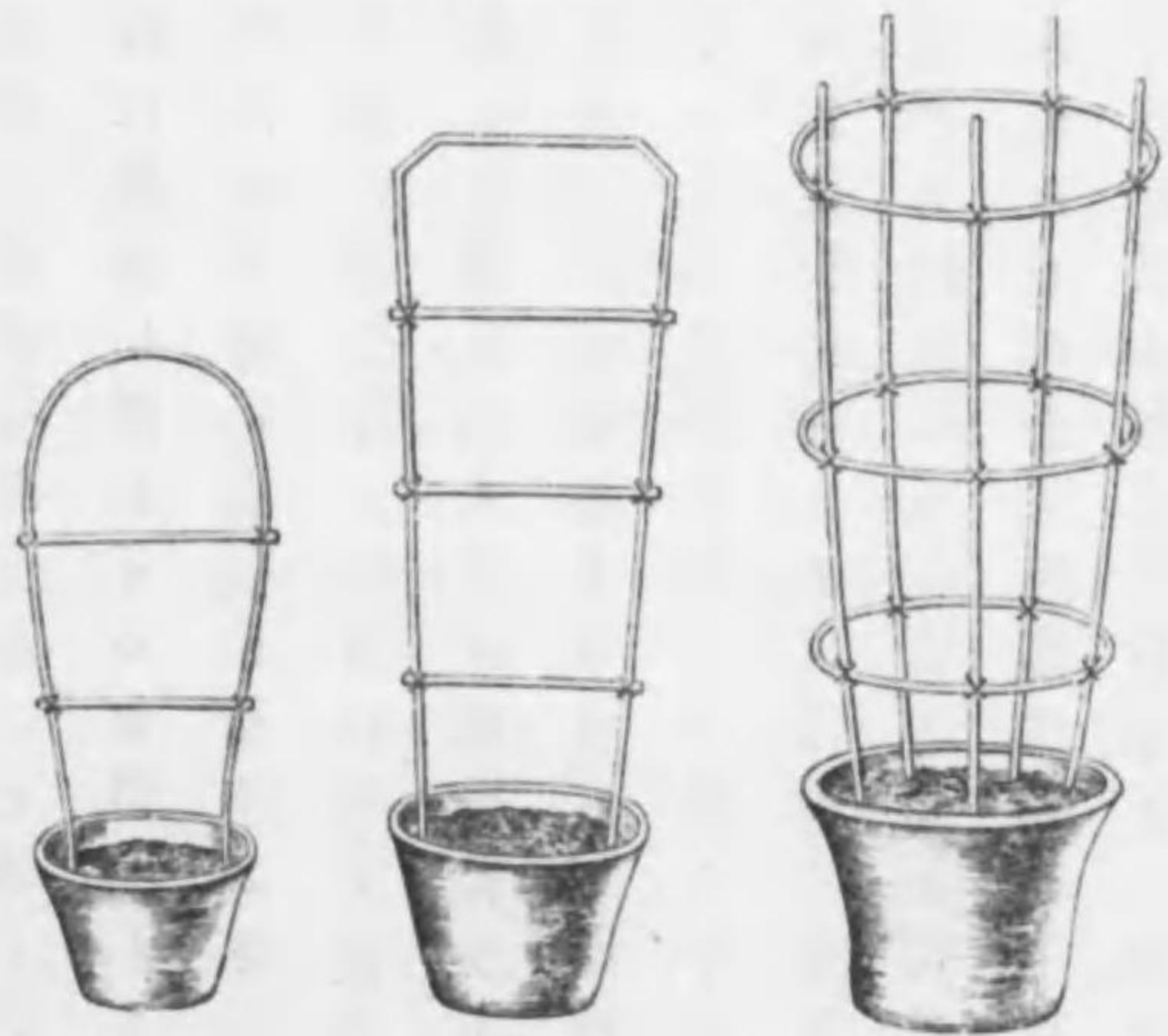
凡そ、枝は直立するものほど勢力強きが故に、此の如き枝を自然に放任して、徒長せしむるときは、他枝の發育大に妨げらるゝの不利あるのみならず、かゝる徒長枝には、開花すること少きの損あり。されば、直立する徒長枝は、水平に近く彎曲すべく、之に反して、勢力の弱き枝は、成るべく之を上方に向はしむべし。

第二節 花卉の整枝

花卉の整枝 (Training) とは、花卉の姿勢を整ふるを云ひ、薔薇・躑躅・藤類の花木は勿論、菊・牽牛花・ダリア等の花草にも亦行はるゝものなり。

花卉に於ける整枝の様式は、種々あり

圖六十三第



帽子形

行燈形

て一定せず、其牽牛花に行はるゝものには、行燈形・帽子形等あり、菊に行はるゝものには、篠作・丸鬢差・角鬢差等あり、ダリアには、扇形整枝法を用ふること往々見る所にして、藤に棚形の行はるゝは人の能く知る所なり。又薔薇には、立木作・垣作・アーチ形など行はれ、躑躅には傘作などを行ふことあり。

圖七十三第



傘作

凡そ害蟲の防除には、天然的防除と人工的防除との二種あり。天然的防除とは、氣象の影響又は益蟲・益鳥等の蕃殖などによりて、害蟲の蕃殖、自然に滅殺せらるるを謂ひ、人工的防除とは、天然力の制裁を免れたる害蟲を、人力によりて驅除するを云ふ。以下主ら人工的防除法につきて述べん。

人工的に害蟲を防除するの法は、害蟲の種類によりて等しからず。今左に其主なるものを掲げん。

(一) 點火誘殺法 此法は、火を慕ふて、之に飛來するの習性ある害蟲を殺すに効あり。其法、誘蟲燈 (Trap lamp) をば、水を盛れる盥の上に於て、適度の高さに装置して、點火し、盥内の水には、石油其他の殺蟲劑を入れ置くにあり。然るときは、害蟲は、誘蟲燈に衝突して、盥の内に落ち死するものとす。

(二) 食物誘殺法 此法は、害蟲の嗜好する食物 (Trap food) を以て誘殺する法にして、害蟲によりて、之に用ふる食物の多少異なるべきは勿論とす。鉢植せる植物の

根元に、輪切せる甘藷などを伏せ置くは、之に害蟲を誘ひ集めて殺さんがためなり。

(三) 潜處誘殺法 此法は、害蟲の潜伏し得べき場所を設け、之に害蟲の集來するを待つて捕殺するなり。針金蟲、地蠶等を捕殺せんがために、處々に藁稈、落葉、草等を撒布し、是等害蟲の潜處を設くるが如きは、其一例なりとす。

(四) 掬殺法 此法は、捕蟲網を用ひて、害蟲を掬ひ取り、之を石油などの中に投入して、殺すにあり。捕蟲網は、其底を紐にて縛し、害蟲を取り出すに便ならしむるを可とす。

(五) 陷穽捕殺法 此法は、陷穽を設け、其中に害蟲を墜落せしめて捕殺するなり。地蠶、蝓、蛄等の驅除に用ひらる。

(六) 遮斷法 尺蠖、蛄、蝓等の枝幹に上昇するを防ぐがため、幹に綿を纏ひ、又は鳥黏を塗抹し置くが如きは、此法に屬す。

(七) 燒殺法 棒の先端に纏結せる藁稈、藁稈等の束に、石油を注ぎ、之に點火して、害蟲の巢窟を燒くが如きは、此法に屬し、蛄、蝓などの驅除に用ひらる。

(八) 藥劑的驅除法 害蟲を驅除するに用ひらるゝ藥劑 (Insecticides) には、毒劑 (Stomachic poisons)、觸接劑 (Contact insecticides)、燻蒸劑 (Gaseous insecticides) の別あり。毒劑とは害蟲に食せらるゝや、其胃の内に入り、毒力を逞ふして、之を斃すものを謂ひ、觸接劑とは、氣門より害蟲の體內に侵入し、或は氣門を閉塞して、之を斃すものを云ふ。以上の兩劑は、液體又は粉狀にて撒布し、之れがために、噴霧器 (液體用) 又は撒粉器 (粉末用) を用ふ。而して、燻蒸劑とは、有毒なる瓦斯の發生によりて、害蟲を斃すものを云ふ。凡そ害蟲には、直接に作物體を喰害する所の害蟲 (Mandibulata) と、作物の養液を吸收して害をなす所の害蟲 (Haustellata) との二種あり。咀嚼口を有する所の害蟲は前者に屬し、吸入口を有する所の害蟲は後者に屬す。而して、作物體を喰害する所の害蟲には、三劑

圖八十三第

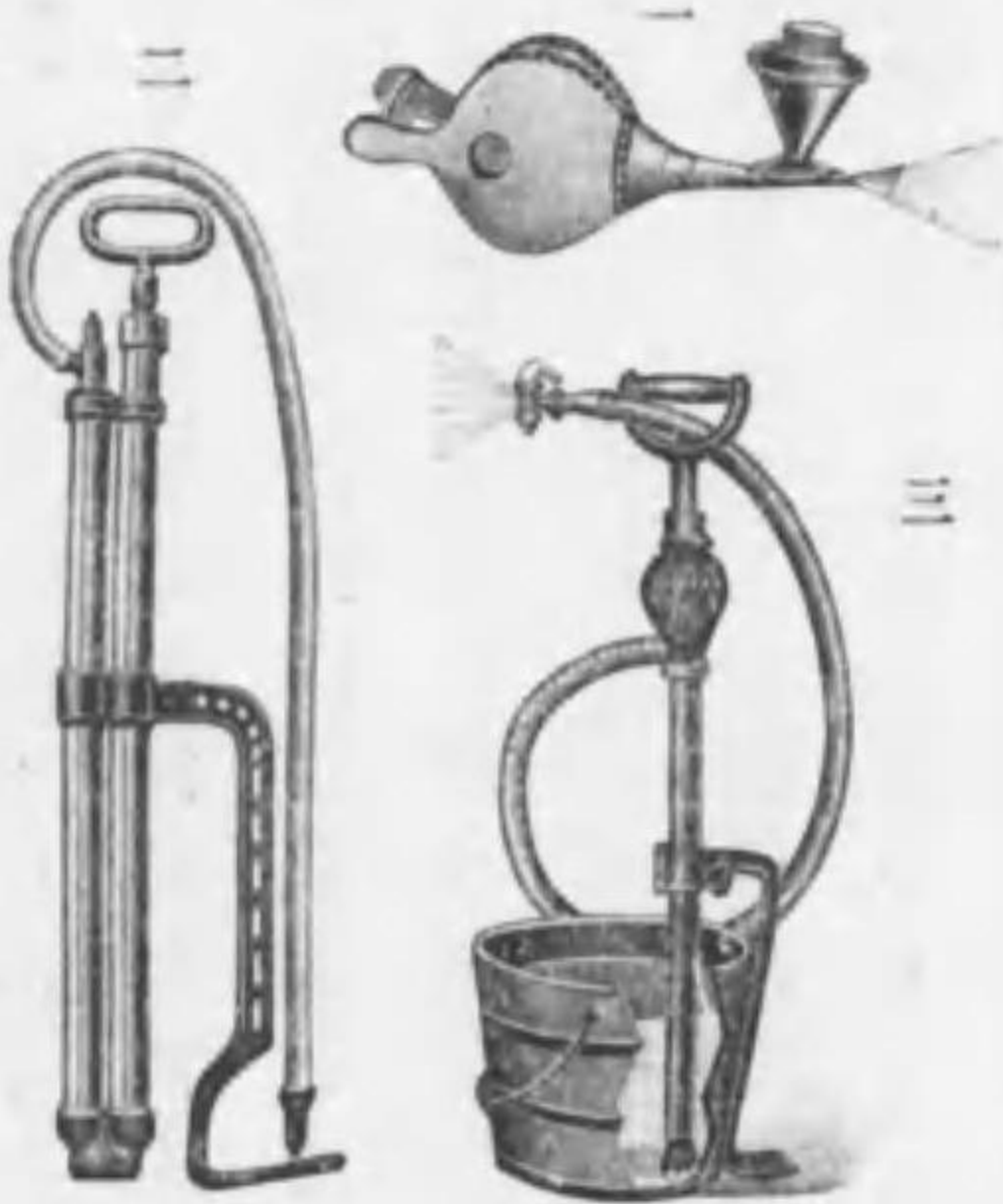


圖 驅蟲劑撒布器の
一、撒粉器 (驅蟲劑の粉末を撒布するもの)
二、噴霧器 (驅蟲液を撒布するもの)

共には有効なるも、養液を吸收する所の害蟲には、觸接劑・燻蒸劑の二種よく其効を奏するものとす。

第一節 觸接劑

觸接劑 (Contact Insecticides) には種々あるも、今其主要なるものを擧ぐれば、大約次の如し。

(一) 石油乳劑 (Kerosene emulsion) とは、種々の害蟲を驅除するに効驗ある藥劑にして、石油一升到、水五合、上等の洗濯石鹼十五匁許の割合を以て、調製するものなり。其調製法は、先づ二箇の空罐、石油罐の空虚となれるものに、吊り下ぐる装置を施したるものなどよしを準備し、石鹼は豫め細く刻みて、其十五匁を、五合の水と共に、一方の罐に入れ、煮沸して溶解せしめ、之と同時に、他の罐にて石油一升を暖む (石油の加熱は、攝氏七十度以下に止むべし) べし。此くて、石鹼は全く溶解し、石油の少しくあたゝまれる頃、右の兩液を混合し、手唧筒 (水鐵砲) などにて、手早く、其混合液を幾回も出入せしめて、十分に混和せしむるときは、粘氣ある乳白色の液を得

べし。此液は、石油乳剤の母液と稱し、暫く放置するも、石油と水との分離せざるを要す。之を使用するには、害虫の種類に應じ、被害部の状態に顧みて、適宜稀釋して用ふべく、通例、蚜蟲には、母液を二三十倍に稀釋したるものを用ひ、介殼蟲には、冬に於て五倍乃至七倍、夏に於て十倍乃至十五倍に稀釋したるものを用ふ。而して稀釋の際、最初二三倍は温湯を用ふべく、爾後は水にて可なり。尙ほ、稀釋し終れば、手唧筒にて液を反覆出入せしめ、十分に混和すべし。尙ほ、石油乳剤は、成るべく新鮮なるものを用ふべく、調製後多くの日數を経過し、爲めに液面に石油の分離し居るが如きものを用ふるときは、花卉を害するの虞あれば、注意すべし。又此乳剤を撒布するには、噴霧器を用ふるを常とし、就中、組織の軟弱なる花草には、強力のものを選ばず。之に反して、冬季花木などに用ふる場合には、最も強力のものを用ふべし。又石油乳剤の一種に、除蟲菊を加へたるものあり。普通の石油乳剤よりも更に一層害虫を驅除するの効大なり。即ち、蚜蟲の如きは、六七十倍に稀釋して用ふるも、猶ほ有効なりと云ふ。此除蟲菊加用石油乳剤を調製するには、石油一升に除蟲菊の粉末二十匁を投じ、能く振盪して二晝夜許密閉し、其間、一日數回宛、振

盪す)置き、以て除蟲菊の有効成分をば、成るべくよく石油中に浸出せしめたる後、布片にて濾して殘滓を除き、石鹼十五匁を五合の水に溶解したるものと、よく混和(手唧筒にて混和すること前に同じ)するものとす。

(二) 石灰硫黃合劑 (Lime-sulphur solution) 此驅蟲劑は、生石灰百二十匁、硫黃華百二十匁、水一斗の割合を以て調製するものにして、西曆一千八百八十六年、北米カリフォルニアに於て始めてサンホーゼ介殼蟲を驅除するがために用ひたるものなり。當時に於ては、此合劑をば石灰硫黃食鹽合劑 (Lime-sulphur and salt wash) と稱し、石灰、硫黃の外に食鹽をも含有せしが、其存否は、別に効力の上に大差なきを以て、之を省くに至れり。爾來、此合劑は、介殼蟲の驅除劑として、廣く各地に用ひらるるに至れり。

此合劑を調製するには、一斗二三升を入るゝに足る鍋二箇を準備し、其一箇(湯鍋)には水を充たして煮沸し置き、他の一箇(煮鍋)には、生石灰を溶解せしものを入れ、之に湯鍋の熱湯三升許を加へて加熱し、次に硫黃華を飛散せぬやう、少量の湯にて捏ねたるものを混じ、十分に攪拌しつゝ煮沸するときは、硫黃の石灰と化合

●其間時々湯鍋の湯を加へて煮鍋中の湯を補ふべし。

●本剤をボーメー比重一〇・三(一)度(一)に稀釋せるものに、硫酸鉛、ニコタン劑等を混和せば夏季種々の害虫の外部除するに可なるものなり。

するに従ひ、黄色より褐色に變じ、終に赤褐色となり、沈澱物も亦漸次溶解するに至る。此間約四五十分を要すべし。此に於て、湯鍋より熱湯を汲みて赤褐色の液に加へ、以て其全量を一斗となし、更に十分乃至二十分許煮沸したる後、布片にて濾過し、噴霧器を用ひて撒布すべし。此合剤は、ボーメー四度内外の比重を有し、各種の介殼蟲、特にサンホーゼ介殼蟲の驅除に著しく有効なるのみならず、越年中の各種害虫を殺すに可なり。但し、此合剤は、冬季に於て落葉樹にのみ施用すべく、發芽後のもの又は常綠樹に施す場合には、適度に稀釋するを要す。尙ほ、此合剤は石油乳劑又はボルドー液と連用すべからず。本合剤につきて、北米ニューヨークの農事試験場に於て行はれたる化學的研究の概要を擧ぐれば、次の如し。

(i) 本合剤の主成分は、五硫化石灰(CaS₅)、四硫化石灰(CaS₄)及び少量のチオ硫酸石灰(即ち次亞硫酸石灰(CaS₂O₃))より成る。

(ii) 石灰の用量多ければ、四硫化石灰を生ずること多く、其用量少ければ、五硫化石灰を生ずること多し。

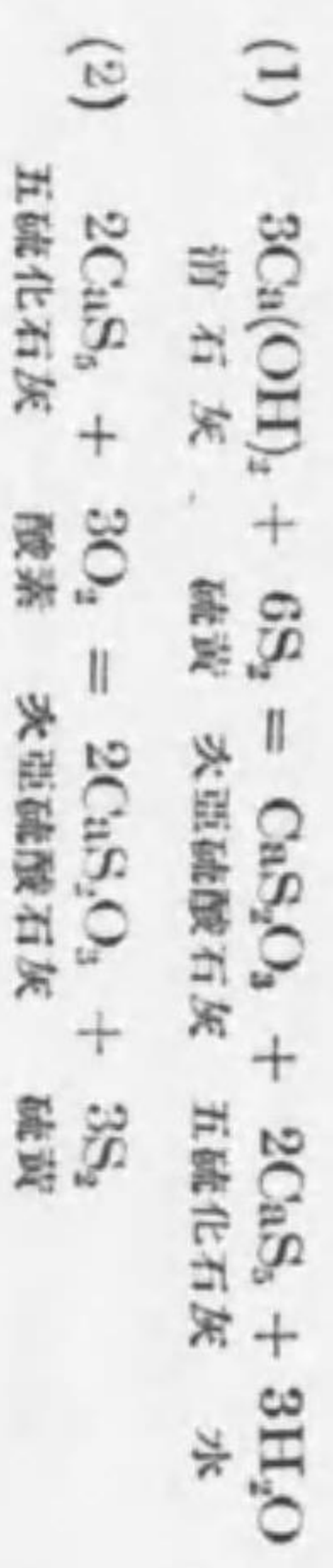
(iii) 本合剤の含有する可溶硫化物の量は、良質の生石灰を用ひて、一時間煮沸する場合に多し。

(iv) 本合剤調製の際、煮沸長きに過ぐれば、次の如き變化起りて、沈澱物の量増加す。



即ち、煮沸過度なれば、次亞硫酸石灰は、分解して亞硫酸石灰と硫黃とに變ずるものにして、其亞硫酸石灰は、空氣に觸るゝや、酸化して硫酸石灰に變ずるものなり。

(v) 本合剤調製中の化學變化(1)并に之れが撒布後に於ける化學變化(2)は、次の式に示すが如し。



要するに、石灰硫黃合剤中の五硫化石灰は、撒布後徐々に酸化して次亞硫酸石

灰となり、更に亞硫酸石灰に變じ、終に硫酸石灰となる(之と同時に、遊離硫黄も殘存す)。ヘーウッド(Haywood)氏の説によれば、過量の生石灰は、介殼蟲の枝幹に固着せるを柔ぐるの効あるものにして、眞に殺蟲の効あるは、細微の硫黄粉末并に次亞硫酸石灰・亞硫酸石灰等なりと云ふ。

(三) 除蟲菊及びピレトロン劑 除蟲菊は、其花特に子房の部にピレトロン(Pyrethron)と稱する淡赤黄色舍利別狀の極微酸性物質を含有するものにして、此物質は昆蟲其他の下部動物に極めて有害なるも、人畜には無害なるを以て、除蟲菊の花部を乾燥粉末となせるものは、驅蟲劑として甚だ適當なるものなり。尙ほ、除蟲菊の莖葉にも少許のピレトロン存在するがゆゑに、之を煙煙するときは害蟲驅除の効あるものとす。既に述べたる除蟲菊加用石油乳劑の外、除蟲菊を用ひたる驅蟲劑、尙ほ頗る多し。今其主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

(イ) 除蟲菊木灰合劑 之は除蟲菊粉一匁に木灰●の粉末十匁乃至二十匁を混和し、二晝夜許密閉したる後に用ふるものにして、朝露の乾かざる間に撒布するを可とし、蚜蟲・食葉甲蟲・螟蛉・夜盜蟲・根切蟲等種々の害蟲を驅除するに有効なり。

●木灰の代りに石灰又は小麥粉を用ふるものあり。前者は之を除蟲菊石灰合劑、後者は之を除蟲菊小麥粉合劑と稱す。

(ろ) 除蟲菊石鹼合劑 此合劑は除蟲菊粉二匁、上等の洗濯石鹼二匁、水一升の割合にて調製するものにして、其製法は先づ水を煮沸して石鹼を溶解し、之に除蟲菊粉を混じて、よく攪拌したる後、一二晝夜密閉し置き、施用の際、粗布にて濾過するにあり。蚜蟲・螟蛉・喰葉甲蟲類の幼蟲等を驅除するに用ひらる。

(は) 除蟲菊揮發油乳劑 之は石油の代りに揮發油を用ひて、除蟲菊を浸出して調製せる乳劑なり。蓋し、除蟲菊の有効成分たるピレトロンは、水又は湯には溶解難く、酒精・エーテル・揮發油等に溶解し易きものにして、揮發油は石油よりも更に大なる溶解力を有するものとす。本劑を調製するには、揮發油五匁、除蟲菊粉六匁、石鹼十匁乃至二十匁、湯三四合の割合を以てするものにして、其調製法は、先づ揮發油に除蟲菊粉を入れ、密閉してよく振盪し、二晝夜浸漬の後、之をば石油罐内の石鹼溶液(攝氏七十度)に加へ、攪拌すること石油乳劑調製の場合と等しくすべし。尙ほ、本劑使用の際には、約一斗の水にて稀釋するものとす。

(に) 除蟲菊丁幾 之は除蟲菊粉二十匁、酒精一合、水一合の割合を以て調製するものにして、之等は混合して一二晝夜間密閉し(其間一日數回振盪す)置きたる後、

濃過して用ふ。尚ほ、此濃液は、使用の際稀釋して用ふるものにして、蚜蟲類は二十
五倍許に稀釋して撒布す。

近年ウエノトロンと稱して販賣せらるゝ驅蟲劑も亦、除蟲菊の有効成分たる
ピレトロンを浸出せるものにして、多量の水に溶解して使用するものなり。但し
此稀釋液を製するには、先づ石鹼の水溶液を製し、之にウエノトロンを入れ、よく
攪拌したる後、水を加へて所要の程度に稀釋し、更によく攪拌して使用するを可
とす。

(四) 煙草及びニコチン劑 煙草はニコチンを含有し、驅蟲の効大なるものなり。
專賣局の製造販賣にかゝる驅蟲劑に、煙草粉及び煙草エキスあり。前者は煙草屑
の粉末に石灰と硫黄とを混合せるものにして、蚜蟲其他の害蟲を驅除するがた
めに撒布するに可なり。又煙草エキスは暗褐色の濃厚なる液體にして、三十倍乃
至六十倍の水に稀釋して使用するに宜しく、其稀釋液一升に對し、石鹼一匁を加
ふるときは、其効更に大なりとす。尚ほ、現今販賣せらるゝニコチン劑には、次の如
きものあり。

●米國品は五
倍。百倍乃至千

(五) 硫酸ニコチン (Nicotine Sulphate) 劑 主として米國の製品なるも、近年本邦に
ても製せらる。其主成分はニコチンにして、米國産のブラック、リーフ四〇 (Black
Leaf 40) の如きは、四割のニコチンを含有し、煙草製造の副産物とす。本劑は、水にて
適當に稀釋し、石鹼を加へて使用するものなり。蚜蟲及び軟質の害蟲に對して効
力大なりとす。

(六) エックスル、オイル (XIII) 之は英國ロンドンのリチャード會社の製品に
して、液體のものゝと固體のものゝあり。其液體のもの (Liquid Insecticide) は、二十倍に
稀釋して用ふるときは、菊其他の花卉の蚜蟲、スリップ (Thrip) 等を驅除するの効
顯著にして、花卉には毫も害を與ふることなきものとす。

第二節 毒劑

毒劑は大抵砒素を含有するを以て、人畜にも亦害を及ぼすがゆゑに、之が使用
には大なる注意を要するものとす。米國にては、咀嚼口を有する害蟲の驅除に際
して、此毒劑を用ふること多く、主として粉末のまゝ撒布するも、本邦の如き雨多

き國にありては、粘着性ある液剤に混和して撒布し、作物體上に永く附着せしめ置くを可とす。而して毒剤は、接觸劑を撒布する場合の如く、直接に藥劑を害蟲に附着せしむる要なきも、植物體上に普ねく撒布するにあらざれば、藥劑の附着せざる部分を食害せらるゝ虞あるがゆゑに、噴霧器を以て十分に撒布すること肝要なり。今毒剤の主なるもの一二を擧ぐれば、次の如し。

(一) 砒酸鉛 (Arsenate of Lead) 之は亞砒酸曹達と醋酸鉛とによりて製造せらるゝものにして、粉狀のものゝ糊狀のものゝあり。前者は半封度、後者は一封度を二斗五升乃至六斗の水又は藥液に混じて撒布すべく、其間沈澱を防ぐがため、液を攪拌するを可とす。現今多く用ひらるゝは粉狀のものにして、三〇乃至三三%の無水砒酸を含有す。尙ほ、本劑を溶解するには、先づ少量の水を徐々に加へ、木片などにてよく練り合せて泥狀となせる後、水又は液を加へて適度に稀釋すべく、特に粉狀のものは、初より多くの水を加ふるときは、溶解を妨ぐるゝこと大なるものとす。本劑はボルドー液などゝ混じて用ふるときは、害蟲の外、害菌をも驅除するの効あり。又本劑中、中性砒酸鉛を含むものは、酸性砒酸鉛を含むものよりも一層無

害なるも、殺蟲力は後者に劣るものとす。

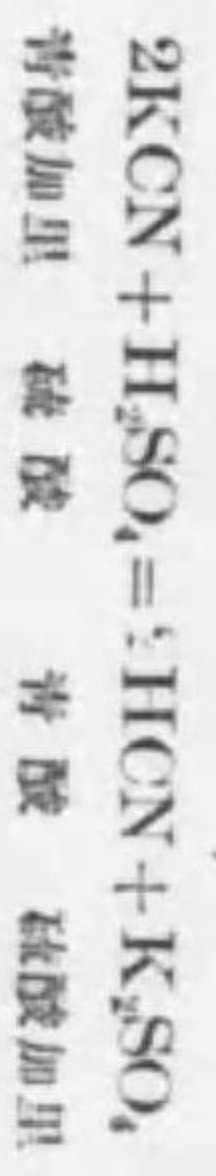
(二) 札幌合劑 之は亞砒酸曹達とボルドー液との混合劑にして、之を調製するには、先づ鐵鍋に二升一合の水と、四百八十匁の洗濯曹達とを入れて煮沸しつゝ、百二十匁の亞砒酸を少許づゝ加へて攪拌し、二十分許も煮沸するときは、亞砒酸曹達液を得るがゆゑに、其三勺を三斗式ボルドー液一斗に混入すれば可なり。

第三章 燻蒸劑

燻蒸劑としては、從來、煙草除蟲菊等の粉末を燻蒸せしが、近年に至り、青酸瓦斯、二硫化炭素、クロール・ピクリン等の有毒瓦斯を用ふること漸く行はるゝに至れり。

(一) 青酸瓦斯 青酸瓦斯は、樹木に寄生する害蟲、特に介殼蟲、綿蟲等を驅除するに最も有効なるものなり。而して、苗木に寄生する害蟲を驅除するには、密閉せる室内又は箱内に苗木を入れて青酸瓦斯を發生せしむべく、畑地の立木に對しては、瓦斯の漏洩なきやう特に注意して造れる厚き天幕などにて被包したる後、青

酸瓦斯を發生せしむべし。青酸瓦斯を發生せしむるには、先づ深き瀬戸燒甕の如きものを燻蒸室、燻蒸箱又は燻蒸用天幕内に安置して、水を入れ、次に硫酸を注ぎたる後、青酸加里を投入して手早く密閉し、以て次の化學變化によりて生ずる青酸瓦斯を吸入せざるやう注意すべし。(青酸加里は劇毒にして、硫酸は亦劇烈なる腐蝕性あるがゆゑに、取扱上能く注意すべし。)



尙ほ、右の化學變化を完ふせしめんがために要する青酸加里、硫酸及び水の分量は、密閉せる室(箱又は天幕)の大きさによりて異なるべきものにして、其の千立方尺の容積に對する前記藥品の用量は、大約次の如し。

青酸加里九八%	二〇〇—二五〇瓦
硫酸	二〇〇—二五〇 c.c.
水	六〇〇—七五〇 c.c.

而して燻蒸時間は、四十五分乃至一時間とす。此くて燻蒸後、青酸瓦斯を放出す

る際にも、亦能く注意して之を吸入することなきやうにすべし。其他、青酸瓦斯燻蒸を行ふに當りて注意すべき事項の主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

- (イ) 苗木及び立木共に、濕氣ある際に、燻蒸すべからず。是れ、青酸瓦斯の水に溶解して、植物の組織内に侵入し、以て害をなすを避けんがためなり。
- (ロ) 常緑樹(落葉樹にても夏季葉のある時は同様)を天幕内にて燻蒸するには、日照の強き時を避くべし。(即ち、曇天又は朝夕に於てするをよしとす。是れ、日光天幕内に透射して、同化作用の行はるゝを避けんがためなり。
- (ハ) 發芽後の苗木は燻蒸すべからず。
- (ニ) ボルドー液撒布後は直に燻蒸すべからず。
- (ホ) 立木の燻蒸を行ふには、先づ一本を試みて、其害なきを確めたる後、多數のものに施すべし。
- (ヘ) 硫酸と水とを混するには、必ず水の中に硫酸を以てすべく、硫酸の中に水を混すべからず。
- (ト) 瓦斯發生甕の殘液は、豫ねて設け置きたる深き穴の中に棄つべく、妄りに畑

地に放棄すべからず。

青酸加里は、樹木の髓蟲を驅除するがために用ひらるゝことあり。其法、青酸加里をば小豆粒ほどの大きに碎き、其二三粒を取りて、害蟲の蝕入せる穴の中に入れ、接蠟又は粘土などにて、其蟲孔を杜塞するなり。然るときは、青酸加里は、徐々に分解して青酸を發生するが故に、殺蟲の効あるものとす。

●二硫化炭素の注入は晴天の日中氣温高く濕氣とす。

●五封度まで増すことあり。

●容器内に水分あれば二硫化炭素の揮發を妨ぐるものとす。

(二) 二硫化炭素 二硫化炭素(CS₂)は、主として倉庫内の害蟲を驅除するがために多く用ひらるゝ液體にして、通例、金盞又は陶器の皿などに注ぎ入れたるまゝ、倉庫(密閉したるもの)内の高處に安置するものとす。然るときは、自然に揮發して瓦斯となり、空氣より重きがため、下降して細微の間隙内にも透入して、よく害蟲を殺すの効あり。此藥液の用量は、内容一千立方尺につき三封度を適當とし、之を數箇の容器に分注して、適宜の箇處に夫々配置したる後、一二晝夜密閉燻蒸して、開放するなり。但し、此瓦斯は、人畜に有害なるのみならず、引火し易きがゆゑに、火を近づくることなきを要す。通例、開放後三十分乃至一時間を経過するにあらずんば、室内に入らざるを安全とす。

二硫化炭素は、又土中の害蟲を驅除するがために用ひて、有効なるものなり。其法、根の周圍處々に穴を穿ち、之に二硫化炭素の少量を滴下して、土を被ひ置くにあり。

(三) クロール、ビクリン クロール、ビクリン(COCl₂)は、一名コクゾールと稱し、二硫化炭素の如く引火するの虞なきを以て、近年倉庫の燻蒸に用ひらる。本劑は無色の重き液體にして、水にとけ難く、徐々に揮發す。其瓦斯は空氣よりも遙に重く、甚だ有毒にして、眼に觸るれば涙を催ふし、吸引すれば窒息を招くの虞あり。本劑を使用するには、氣温攝氏二十度以上の時に於てするを可とし、一〇〇〇立方尺の容積に對し、半封度乃至一封度の割合にて一二晝夜密閉燻蒸するものとす。

第十二章 花卉に於ける害菌の防除

害菌とは、植物に寄生して、之れが病を惹き起す所の有害なる微菌を云ふ。害菌は、其形細微にして、顕微鏡の力を藉るにあらすんば、之を認識すること能はざるが故に、比較的人の眼に止まること少く、植物が、爲めに甚だしく損害せらるゝに至らざれば、人の注意を惹かざるを常とす。

害菌は、其種類多く、隨て之れが防除も亦一様ならずと雖も、濕潤にして空氣の流通不良なる處に發生するを常とし、其胞子は、或は空中に浮游し、或は種苗に附着し、若くは土中に存在して、植物に寄生するものなり。而して、雑草の類も亦、害菌の傳播を助くること少からざるものとす。總じて、害菌によりて起る病は、傳染すること速にして、且つ廣きに互るがゆゑに、害菌の發生せる植物を發見せば、速に取除きて焼き棄つべく、又殺菌劑(Fungicide)を用ひて、之れが防除の法を施すべし。今殺菌劑の主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

(一)石灰ボルドー液 石灰ボルドー液は、普通に、ボルドー液(Bordeaux mixture)と

稱するものにして、硫酸銅百二十匁及び生石灰百二十匁を水に溶解せるものを云ふ。而して、其溶解に用ふる水の量二斗なるときは、之を二斗式ボルドー液と謂ひ、二斗五升なるときは二斗五升式ボルドー液、三斗なるときは三斗式ボルドー液と稱す。

元來、此殺菌劑は、西曆千八百八十三年、佛國ボルドーに於て、葡萄の病害防除のために、ミラーデ氏(Millardet)の試用したるに基づくものにして、殺菌の効著しく、且つ廉價に調製せらるゝの利あるを以て、現今各地に於て廣く用ふるに至れるものなり。

ボルドー液を調製するには、大小三箇の桶を準備すべく、其一箇は大なるものにして、液の全量(即ち二斗式なれば二斗、三斗式なれば三斗)を容るゝに足るべく、他の二箇は、液の半量(即ち二斗式なれば一斗、三斗式なれば一斗五升)を容るゝに足るものなるべし。今其一箇の小桶に熱湯二升を入れ、其中に百二十匁の硫酸銅(工業用のものにて可なり)を麻袋又は小箆に入れて吊るし置くとときは、硫酸銅は容易に溶解するを以て、此時、八升(二斗式の場合)又は一斗三升(三斗式の場合)の冷

水を加へて、全量を一斗又は一斗五升となす。又他の小桶に生石灰百二十匁を入れ、少量の水又は湯を加へて、生石灰を十分に溶解したる後、水を加へて、全量を一斗又は一斗五升となし、よく攪拌すべし。斯くて、硫酸銅及び生石灰の溶液を調製し終らば、大桶の上に、目の細き箆などを載せ、之を通じて、兩液を同時に大桶中に流入せしめ、よく攪拌して、混和すべし。此くして調製せるものは、即ちポルドー液にして、青色を呈し、稍、粘氣を帯び、調製後四五十分を経過するも、上澄を生ずることなく、青色試験紙を浸すも赤色に變ずることなく、且つ研立の小刀などにて攪拌するも刀面に銅鍍金の生ぜざるを要す。若し、是等の要件を缺くときは、更に石灰液を加へて、よく攪拌すべし。尙ほ、ポルドー液の石灰不足なるものは、黄血鹽 $\text{Fe}(\text{CN})_6$ を赤褐色 $(\text{C}_6\text{H}_5\text{Fe}(\text{CN})_6)$ に變ずるものなり。

ピッカリング氏 (Pickering) は、ポルドー液につきて化學的研究を行ひしが、其成績によれば、生石灰を硫酸銅に加ふるや、兩者の割合によりて、種々の鹽基性硫酸鹽を生ず、而して、是等硫酸鹽を植物に撒布するときは、分解して碳酸銅と硫酸銅とを生ず。



又石灰の過量なる場合には、硫酸銅と硫酸石灰との複鹽生ずるものゝ如く、其複鹽は、 $\text{Cu}_2\text{O} \cdot \text{SO}_3 \cdot 4\text{CaO} \cdot \text{SO}_3$ の成分を有すと云ふ。

ポルドー液は、調製後數時間を経ば、沈澱を生じて其効減少するが故に、使用の際に調製すべく、之れが撒布には噴霧器を用ふべし。此液の効能持續するは、約十日乃至二週間に過ぎざるを以て、其期に至らば再び撒布すべし。

ポルドー液は、害菌の空氣傳染によりて起る種々の病害を豫防するに有効なるものにして、發病期の約十日乃至二週間前より撒布し置くを可とす。尙ほ此藥液は、球根類の貯藏中に腐敗するを防ぐがため、貯藏の際、球根を消毒するに用ひ、又樹木の傷痕、切口などの消毒にも用ふ。其他、該藥液の施用上、注意すべきこと少からず。今其二三を擧ぐれば、次の如し。

い、ポルドー液は、之に砒酸鉛、煙草、越幾斯等の驅蟲劑を混じて撒布するときは、種々の病蟲害を同時に防除するを得べし。

(ろ) ボルドー液施用後、間もなく石油乳劑を撒布すれば、葉を損傷するの害あり。
 (は) 桃などの葉のよく展開したる後、ボルドー液を撒布すれば、落葉を促すの虞あり。

(二) 曹達ボルドー液 本液は、硫酸銅百二十匁、炭酸曹達百六十五匁(或は苛性曹達三十五匁)水三斗乃至四斗の割合にて調製するものにして、其法先づ硫酸銅と炭酸曹達とを別々に水に溶解したる後、同時に大なる桶に移してよく攪拌するにあり。尙本液に粘着力を加ふるがため、十匁許の生石灰を加ふることあり。本液は前者の如く植物を汚染することなきを以て、花卉などの害菌を防除するに可なり。

(三) アムモニアボルドー液 本液は、瑠璃液又は硫酸銅アムモニア液と稱し、硫酸銅百二十匁、水五斗、強アムモニア水二合乃至五合の割合にて調製するものにして、其製法は定量の水にて硫酸銅を溶かし置き、之にアムモニア水をば大半注加したる後、よく攪拌し、試験紙にて反應を検すべく、弱鹽基性を呈するを以て度とすべし。(硫酸銅を中和するの程度にアムモニア水を加ふ)本液は、植物を汚染す

ること最も少きものなれば、花卉などの害菌防除用として、頗る適當のものとする。

(四) 炭酸銅アムモニア液 本液は、炭酸銅三匁三分乃至五匁、水一斗乃至二斗、強アムモニア水八匁の割合にて調製するものにして、炭酸銅にアムモニア水を注ぎて溶解せしめたる後、水を加へて稀釋するものとす。本液は濃厚なる原液を製して、壇中に貯へ置き、使用の際稀釋し得るの便あり。其効用はアムモニアボルドー液に等し。

(五) 銅石鹼液 本液は、硫酸銅六匁乃至八匁、石鹼(硫酸銅の三倍乃至五倍)水一斗の割合にて調製するものなり。其製法は一ならざるも、先づ硫酸銅をば少許の湯にて溶解したる後、水を加へて九升となし、之に石鹼液(石鹼を一升の湯にて煮沸溶解せるもの)を加へ攪拌すれば可なり。尙ほ、オレイン酸曹達を多く含む石鹼なれば、煮沸せずして可なり。本液は粘氣ある淡青色半透明の液にして、其効用ボルドー液に類す。

(六) フォルマリン 本劑を用ひて苗床の土壤を消毒するには、本劑一封度を五升乃至二斗の水にて稀釋して撒布し、一晝夜間筵などを被ひ置きたる後、土壤を

よく攪拌して全く臭気なきに至らしむべく、球根などの消毒には、一乃至二%液に十分間浸せば可なり。

以上の外石灰・木灰・硫黄・二硫化炭素・クロールピクリン等も亦殺菌剤として用ひられ、焼土も亦殺菌の効あり。焼土は釜或は鐵板などを用ひ、土壤を加熱して殺菌するものにして、害虫を殺すの効をも兼有し、菊などを栽培する人の間に用ひらるゝことあり。

第十三章 花壇

第一節 花壇の種類及び縁植

花壇 (Flower Bed) とは、花卉特に花草などを植付けて、美観を發揮せんが爲め、適當に區劃したる地區にして、之に數種の別あり。今其主なるものを擧ぐれば、大約次の如し。

毛氈花壇 (Carpet Bed) 毛氈花壇とは、種々の色彩ある矮性の花卉を配合して植付け、以て花毛氈を敷きたるが如き、美観を發揮せしむるものにして、之には、芝生を利用するものと、否との二種あり。芝生を利用せる毛氈花壇は、芝生の中に種々の丈低き花草を植付けて、模様を顯はすものにして、之には、先づ模様を顯はす部分の芝を除き、良く耕起したる後、培養土を被ふて、之に花草を植付くるものとす。又芝生を利用することなく、全部花草を以て模様を顯はすものにありては、先づ花壇に當るべき地を良く耕起したる後、培養土を地上四五寸の高さに盛り上げ

●葉は紅、紫、黄等種々の色彩を有し、矮性なり。挿木によりて容易に蕃殖するも耐寒性弱きを缺點とす。

て、花壇の形状を適當に拵へたる後、其上に、種々の色彩ある矮性の花草を、適宜配合して、植付くるものとす。以上兩式中、芝生を利用するものは、花草を要するのと少く、且つ花色の配合に苦心すること比較的少きを得るの便あるを以て、通例行はるゝは、此種の方式なりとす。

尙ほ、毛氈花壇には、花の賞すべきものゝ外、アキラシタスなどの如く、葉の賞すべきものを用ふるを常とし、芝生と花草との間には、ハクテウグヒメツグ等を植ゑて、短く刈り込み置くを可とす。

境栽花壇 (Border Bed) 此花壇は、前者の如く、園地の中央に設くるものにあらずして、塙籬、建物、道路などに沿ふたる場處 (Border) に設くるものなり。此花壇に植付くべき花卉の色彩は、背景の奈何によりて大に影響せらるゝものにして、例へば、黒

圖九十三第



毛氈花壇

圖十四第



境栽花壇

塙の前には、濃紅色又は濃紫色の色彩ある花卉を避けて、白色のものを、用ふるの要あるが如し。尙ほ、境栽花壇に於ては、後方に丈高き花卉を配し、前方に向つて漸く丈低きものを植付くること肝要にして、花壇の後

方には、往々花木又は花灌木などを植付くることあり。**リボン花壇 (Ribbon Bed)** 園内の通路、池邊などに沿ふて細長く設けられたる花壇にして、直線的なるあり、又曲折して波状をなすものあり、従つて其植方にも、直線植、曲線植などの別あり。成るべく丈低き花草を用ひ、色彩の調和に注意して、美觀を發揮するを要す。此種の花壇は、一方より眺望する場合には、後方に高きも

の前方に低きものを配すべきこと、境栽花壇に於て述べたるが如くなるも、兩方より眺望し得るものにおいて、中央の線に沿ふて丈高きものを植ゑ、其兩側に、丈低きものを配すべし。

尙ほ、ピラミッド花壇とて、圓形に土を盛り上げて花壇となし、其中央に較、丈高きものを植ゑ、其周圍に順次丈低きものを配し、以てピラミッドの如き形をなさしむるものあり。又階段花壇とて、土を數段に盛り上げて、花壇となせるものあり。又、蝶其他種々のものに擬したる花壇もあり。要するに、花壇の形は、人によりて種工夫し得るものなれば、其種類名稱の多き、當然のこと、云ふべし。

尙ほ、花壇を季節によりて分類するとき、春花壇、夏花壇、秋花壇、冬花壇の四種となす。春花壇には春季に開花する諸種の花卉を用ひ、前年の秋より苗を仕立て、又は球根類を植付け置かざるべからず。開花終れば夏花壇に利用するを可とす。夏花壇は、春蒔の花草及び春植の球根類などによりて形成せられ、分株、挿木等によりて育成せる花卉を用ふることも亦少からず。此花壇に於ては、適宜剪定を施して秋まで觀賞し得るものあるのみならず、春花壇に採用せる花卉にして、開花

期間長きものは、其儘此花壇に繼續して觀賞することを得るものとす。秋花壇は春蒔の花草、春植の球根類、宿根草などによりて形成せらるゝものにして、夏花壇に採用せられたるもの、中、此花壇に繼續して觀賞せらるゝもの頗る多し。此花壇は花期長きのみならず、花色鮮明にして豊富なりとす。冬花壇は、常緑の小灌木を中心として、之に耐冬性の球根類、宿根草等を配するを常とし、花よりも寧ろ葉を觀賞するものとす。スノー、ドロップ、クロカス、支那水仙、寒菊、アルメリヤ、福壽草、寒木瓜、千両萬兩、南天、瑞香、躑躅類等は、冬花壇に用ひらる。尙ほ、春花壇、夏花壇、秋花壇に用ふる花卉につきては、花壇管理の節に述ぶる花草の開花期(二二四頁—二二六頁)を参照すべし。

花壇の縁植

花壇には、其縁植として種々の植物を用ふ。今縁植として適當なるもの二三を擧ぐれば、次の如し。

ハクテウゲ (*Serissa foetida*, Com.) 茜草科の矮性灌木にして白色の小花を開く、短く剪定し

第一十四圖



ハクテウゲ

置くときは花壇の縁植となして、頗る好適するものなり。蕃殖は挿木による。

ヒメツゲ (*Buxus sempervirens*, L. var. *microphylla*, Bl.)

黄楊科に属する常緑性小灌木にして、アサマツゲに類するも、葉稍、細小にして、其質柔軟なるを以て異なりとす。春、淡黄緑色の花を開く。短く剪定して、縁植となすに好適す。蕃殖は挿木による。

タチテンモンドウ (*Asparagus lucidus*, Lindl. var. *pygmaeus*, Makino.)

百合科の球根

植物にして、高さ六七寸に伸長し、草姿自ら圓錐状をなし、春より秋末に至るまで不斷緑色を呈して、花壇の縁植に適す。



ゲツメヒ

圖三十四第



ウドンモンテチダ

蕃殖は球根による。

リウノヒゲ (*Ophiopogon japonicus*, Ker.) 百合科の常緑性草本にして、一名ジャノ

ヒゲと稱し、花壇の縁植に適す。蕃殖は分株による。

シバ (*Zoisa pungens*, Willd.) 禾本科の草本にして、莖は地上を匍ひ、地に觸るゝ莖

節より根を發生して蔓延するが故に、花壇内の花卉も爲めに壓倒せらるゝことあり。されば、時々鎌などにて、莖の花壇内に侵入するを芟除するの要あり。又、シバの一種カウライシバは、其葉特に細く、且つ柔にして、縁植に好適す。

アルメリア (*Armeria maritima*, Willd.) 磯松科の宿根草にして、葉は稍、禾本科の草

本に類し、早春より晩秋に互り續々淡紅色の花を開く。性寒氣に強く、東京附近にては、其儘露地に殘し置くも能く越年す。蕃殖は分株によるを常とし、花壇の縁植として、頗る好適するものなり。

此外**タマスダレ**(白色花を開き矮性なり)**アキラダスニハゼキシャウ**(矮性にして淡紫色の花を開く)等、花壇の縁植となして用ひらるゝもの少からず。

第二節 花壇の管理

花壇には、花の絶へざるやう管理すべく、之がためには、花卉の種類と其開花期
 とに注意し、適宜、播種、挿木、分株等の諸法によりて、苗の育成に努むべきなり。開花
 期間の長さ、花草を植うるときは、屢、苗の育成、移植を行ふの煩勞なくして可なり
 と雖も、開花期間の短き花草も亦、適宜、之を選択配合するにあらずんば、花の絶へ
 ざるを期しがたきのみならず、美觀を十分に發揮すること能はざるべし。而して、
 奈何によく花壇の管理に注意するも、冬季は霜雪の犯す所となりて、開花を賞す
 べきもの甚だ少し。此故に、冬季花壇の荒廢を緩和するがために、花壇には、亦處々
 に、常緑の小灌木を配置すること既に述べたるが如し。

凡そ花草の開花期は、氣候によりて遅速あるは勿論、同一氣候の下にても、播種
 植付の期節異なるときは亦、自ら相異なるものとす。されど、今其大略を示せば、次
 の如し。

- (甲) 主として分株によりて蕃殖するもの フクジュサウ・ヒナギク・
アルメリア・サクラサウ・ムラサキツユクサ・サギゴケ等。
- (乙) 主として球根によりて蕃殖するもの クロカス・水仙・ヒヤシン

春開花
する花草

- (丙) 主として種子によりて蕃殖するもの サンシキスミレ・アラセ
イトウ・キンセンクワ・シネラリア・ヤグルマギク・ムギナデシコ・ネ
モフィラ・シレネ・ワスレナグサ・フロックス・ムシトリナデシコ・ヒ
エンサウ・アリッサム・カンヂタフト・ジブソフィラ・シザンサス・ル
ビナス・ベチユニア・クジャクサウ・スキートビー・キンギョサウ・ビ
ジョザクラ等。

夏開花
する花草

- (甲) 主として分株によりて蕃殖するもの ヒナギク・アルメリア・ラ
ダマキ・ハナシャウブ・ガーベラ・クサケフチクタウ等。
- (乙) 主として球根によりて蕃殖するもの グラヂオラス・モントブ
レチア・百合・カンナ・ダリア・タマスダレ等。
- (丙) 主として種子によりて蕃殖するもの キンセンクワ・ヤグルマ
ギク・ヒエンサウ・フロックス・スキートビー・ケシ・ヒナゲシ・ハナビ

秋開花する花草

シサウ・ベチュニア・ネメジア・クジャクサウ・ムシトリナデシコ・ト
レニア・マンジュギク・ビジョザクラ・ナデシコ・カーネーション(挿
木)・ムギワラギク・ノウゼンハレン・プロブリア・キンギョサウ・テン
ニンギク・ヒヤクニチサウ・センニチサウ・ホウセンクワ・ロベリア・
ハルシヤギク・キンケイギク・ペニバナサルギア・ルカウサウ・ケイ
トウ・マツバボタン・アサガホ・ツキミサウ・オシロイバナ等。

(甲) 主として分株によりて蕃殖するもの アルメリア・ガーベラ・ク
サケフチク・タウ・桔梗・シラン・菊等。

(乙) 主として球根によりて蕃殖するもの カンナ・ダリア・タマス
ダレ等。

(丙) 主として種子によりて蕃殖するもの クジャクサウ・ビジョザ
クラ・プロブリア・ペニバナサルギア(挿木)・オシロイバナ・ヒヤクニ
チサウ・センニチサウ・テンニンギク・キンギョサウ・トレニア・ルカ
ウサウ・ムギワラギク・マンジュギク・フロックス(春蒔)・ヒエンサウ

(春蒔)・ムギナデシコ(春蒔)・キンセンクワ(春蒔)・エゾギク(春蒔)・ノウゼ
ンハレン・ヒマハリ・ケイトウ・コスモス等。

【備考】 *の記號あるものは、前季より引き續き開花するものを示し、又春蒔と註せるは、春秋隨時
に播種し得るものにして、此場合特に春播種せるを示すものなり、尙ほ、挿木と註せるは、挿
木によりて蕃殖することも行はるゝを示すものとす。

開花期間の長短は、同一花草にありても、肥培の精粗などによりて一様ならざ
るも、今其大略を示せば次の如し、但し、茲に云ふ開花期間の長短は、同一の花の開
き居る期間の長短にあらずして、同一株に花の咲き始めてより咲き終るまでの
期間の長短を云ふなり、若し夫れ同一の花の開き居る期間の長短を以てせば、チ
ューリップの如きは、却て開花期間の長きものに屬するなり。

(イ) 開花期間の長きもの アルメリア・クジャクサウ・マンジュギク・トレニア・ブ
ロブリア・ペニバナサルギア・オシロイバナ・ヒヤクニチサウ・センニチサウ・ビ
ジョザクラ・ノウゼンハレン・キンギョサウ・ムギワラギク・テンニンギク・カン
ナ・ダリア・ゼラニウム・フクシア・マーガレット・ランタナ等。之等は、春又は

初夏の頃より晩秋又は初冬の頃まで開花す。

(ロ) 開花期間の中等なるもの ムシトリナデシコ・コスモス・牽牛花・ヒマワリ・ケイトウ・ベチュニア・フロックス・サンシキスミレ・ヒナギク・キンセンクワ等。

(ハ) 開花期間の短きもの クロカス・アネモネ・ラナンキュラス・水仙・ヒヤシンス・チューリップ・ジャガ・ハナシャウブ・グラデヲラス・モントブレチア等。

花草の高さは、肥培の精粗、日當りの良否、土質の奈何等によりて多少の相異なるも、花草の種類によりて相等しからざること、大約次の如し。

(イ) 草丈高きもの コスモス・タチアフヒシラン・ヒマハリ・ダーリア・カンナ等。之等は主として花壇の後方に植うるを可とす。但し、時には中央に植ゑ、其四圍に漸次低きものを植うることあり。

(ロ) 草丈中等なるもの 水仙・ヒヤシンス・チューリップ・アネモネ・ラナンキュラス・フロックス・クジャクサウ・キンギョサウ・ムギワラギク・ヒエンサウ・ヒヤクニチサウ・テンニンギク・キンケイギク・ハルシャギク・ムシトリナデシコ・アラセイトウ・ヒナゲシ・エゾギク・ナデシコ・ベニバナサルギア・プロバリア等。

(ハ) 草丈低きもの ヒナギク・アルメリア・シレネ・アリッサム・マツバボタン・ワスレナグサ・ニホヒスミレ・サンシキスミレ・キンセンクワ・クロカス・ムスカリ・トレニア・タマズダレ等。之等は多く花壇の縁植となすに宜しく、又花壇内處に適宜配合密植して模様を顯はすに可なり。

尚ほ花草中、スキートビー・アサガホルカウサウ等の如き蔓性のものは、すべて花園の入口、其他適宜の處に支柱を立て、之に纏はしむるに可なるものなり。

第三節 花色の配合

花壇に種々の花草を植ゑて美觀を發揮せしめんとするには、花草の色彩に注意し、其調和を圖るを肝要とす。されば、左に色彩に關する一般の事項を述べて、花色配合上の參考に供せんとす。

標準色及び原色 (Normal colour and primary colour) 三稜鏡により、太陽の光線を分解して生ずる處の色は、一定不變にして、色の標準となるべき最も純粹なるものなり。之れを標準色 (Normal colour) と稱す。人工的の色或は物體の色は、標準色の如

く單純なるものに非ず。標準色は、之れを綜合する時は、太陽の光線の如く無色なるも、人工的の色は、如何なる割合に綜合するも、全く無色となることなし、是れ不純なるがためなり。

標準色は、紫・紺・青・綠・黄・橙・赤の七色にして、更に正色と見るべきものは、青・黄・赤の三色なり。之れを原色(Primary colour)と云ふ。原色以外の諸種の色は、原色の種々なる割合の混合によりて生ず。之等の混合色を原色に對して複色(Secondary and tertiary colour)と稱す。

補色(Complementary colour) 原色より赤色を除去する際に残る青色と、黄色との混合せる色、即ち綠色は、赤色の補色にして、赤色は又同時に綠色の補色なり。之れと同様に、原色より黄色を除く際に残る青色と、赤色との混合せる色、即ち紫色と黄色とは、相互に補色にして、青色と橙色とは、亦同様に補色なり。更に、混合色に於ても、之れと同様に種々の準補色を生ずるものとす。補色相隣接するときは、其色彩は一般に鮮明となりて、吾人に美感を與ふるものなり。

色の調和(Harmony of colour) 美しき色彩を得んとせば、色の調和を計ること、最

も肝要なり。今數項に分つて、之れを説明すべし。

(一) 一般の通則として、補色は互に其色を鮮明にし、美感を與ふ。故に色を調和せしむるには、補色を選ばざるべからず。但し斯くの如き調和は、嚴正なる補色に限ることなく、補色に近き複色の場合に於ても、亦相當に美感を與へ、色の調和を缺くことなし。而して一般に補色を用ひて最も良き調和を得んとするには、更に色の濃淡の度即ち色の調子(Tone or Intensity of colour)等しきを得るを肝要とす。例へば、赤色と綠色との調子等しき時は、最も美しき調和をなすが如し。

(二) 補色にあらざる色を隣接せしむる場合に於て、左記三種の別あり。

- (イ) 相互の色を美しく見せる場合。
- (ロ) 一方の色は鮮明に美感を與へ、他方の色は褪せらるゝ場合。
- (ハ) 相互の色が褪せらるゝ場合。

青色と黄色の如きは、第一の場合に屬するものにして、此場合に於ては、他方の色が隣接することによりて鮮明となり、美感を與ふるものとす。又青色

と暉青色の如きは、第二の場合にして、青色は暉青色の内の紫の影響を受けて幾分緑色を加味し、暉青の色は青の影響を受けて一層鮮明の度を増し、美感を興ふべし。又紫色と青色の如きは、第三の場合に屬するものにして、青色は幾分緑色を加味し、紫の補色即ち黄色の影響を受けて、紫色は中和せられ、雙方共に褪色して見ゆるものなり。

(三) 白色は、色の調子に濃淡なし。故に白色と他の色と隣接する場合は、他の色の調子を高むるものなり。故に、一般に、白色が原色と隣接して良く調和す。例へば、白色と淡青色又は白色と淡紅色の如きは美感を興ふ。然れども、色の調子極めて強き場合、例へば暗赤色又は暗青色と白色と隣接するときは、其對照餘りに強きに過ぎ、反て惡感を生ずべし。

(四) 原色と補色以外の複色と隣接せしむるよりも、原色と原色とを隣接せしむる方美感あり。例へば、赤色と紫色とよりも、赤色と青色、黄色と青色とよりも黄色と赤色との調和良好なるが如し。

(五) 二色の配列せられたる中間に、白色を置くときは、一般に良く調和するもの

とす。

(六) 温き色(黄・橙・赤)と寒き色(青・紫・緑)と隣接する場合に、其中間に白色を入るゝときは良く調和す。例へば、赤色と青色、橙色と紫色、黄色と青色の中間に白色を挟む時は、美感を興へ、良く調和するが如し。

色彩の適當なる配列 (Proper arrangement of colour) 色の配列は、距離の遠近によりて顧慮せざるべからず。一般に目に近きものは相似の色を以て調和を謀り、或は淡き色の對稱を以て調和せしむるを可とす。目に近くして對稱の著しきものは、却て倦厭の感を興ふるものなり。然れども、相當の距離にあるものは、之れに反し、著しき對稱の色を配列して調和せしむるを適當とす。裝飾的に色を配列する一般の通則は、其配列せらるべき諸種の色の中、最も輕快なる弱き調子の色を以て、最も大なる面積を彩るにあり。若し、之れに反して寒き色を以て、大面積を彩るときは、如何に苦心するも、全體が陰鬱となり、不快の感を生ずるを免れず。更に部分的に一小區劃につき考ふるに、縁邊或は境界線に用ふべき色は、他の大部分に用ふる色よりも、一般に濃厚なるものを用ひ、且つ他に比し幅狭くするを以て適

當とす。又青緑の如き寒き色は、目より遠ざかるが如き感を興へ、赤黄・橙の如き、温
き色は浮出で、目に近よるが如き感を惹起するものなり。故に是等の現象は、色
彩の配列上常に注意し、全般の調和を缺かざるやう努めざるべからず。

第四節 花色による花卉の分類

花壇に於ける花色配合上の便に供せんがため、花卉を花色によりて分類する
こと、大略次の如し。

(一) 白色の花を開く花卉 雛菊・アラセイトウ・ヤグルマギク・チドリサウ(ヒエン
サウ)・シネラリア・ネモフィラ・カンデタフト・ジブソフィラ・スキート・アリッサム・ワ
スレナグサ・櫻草・フロックス・ベチュニア・スキート・ビー・ケシ・ヒナゲシ・ハナビシサ
ウル・ピナス・水仙翁・ラダマキ・百日草・マツバボタン・牽牛花・美女櫻・石竹・カーネーシ
ヨン・ニゲラ・マツムシサウ・ネメジア・エゾギク・金魚草・百日草・千日草・ロベリア・鳳仙
花・オシロイバナ・鶏冠・コスモス・シヤスタ・デージー・菊・ニホヒスミレ・ゼラニウム・
マーガレット・芍薬・桔梗・フクシア・ヘリオトロープ・ゼラニウム・水仙・シクラメン・ヒ

ヤシンヌス・ムスカリ・チューリップ・フリージア・鈴蘭・スノー・ドロップ・アネモネ・ラナ
ンキュラス・イキシア・オキザリス・花菖蒲・グラジオラス・百合・海芋・タマスダレ・ダー
リア・牡丹・薔薇・躑躅等。

(二) 黄色の花を開く花卉 福壽草・キンセンクワ・カーネーション・ムギワラギク・
櫻草・花菱草・金蓮花・ルピナス・金魚草・ニホヒアラセイトウ・ミムラス・ラダマキ・ネメ
ジア・鶏冠・向日葵・矢車・天人菊・百日草・マンジュギク・クジャクサウ・キンケイギク・ハ
ルシヤギク・マツバボタン・菊・クロカス・水仙・ヒヤシンヌス・チューリップ・ラナンキュ
ラス・フリージア・イキシア・オキザリス・モンドブレチア・アイリス(黄菖蒲)・グラデオ
ラス・球根ベゴニア・トリトマ・チグリデア・百合・カンナ・ダーリア・山吹・エニシダ・薔薇
等。

(三) 紅色の花を開く花卉 雛菊・アルメリア・アラセイトウ・ナデシコ・石竹・カーネ
ーション・櫻草・スキート・ビー・金魚草・ベチュニア・フロックス・カンデタフト・水仙翁・
ケシ・ヒナゲシ・エゾギク・美女櫻・オシロイバナ・鳳仙花・百日草・千日草・牽牛花・ルカウ
サウ・鶏冠・コスモス・マツバボタン・紅花サルギア・ケマンサウ・芍薬・菊・シクラメン・ヒ

ヤシンス・チューリップ・バビアナ・フリージア・イキシア・オキザリス・アネモネ・ラナ
ンキユラス・ペゴニア・アマリリス・モントブレチア・グラデオラス・グロキシニア・カ
ンナ・ダーリア・牡丹・薔薇・躑躅等。

(四) 青色の花を開く花卉 飛燕草・矢車菊・ネモフィラ・ルピナス・シネリア・ワス
レナグサ・スキート・ビー・スカビオザ・ニゲラ・プロリア・エゾギク・ラダマキ・花菖蒲
桔梗・カムバニユラ・ロベリア・アサガホ・美女櫻・ヒヤシンス・ムスカリア・アネモネ等。

(五) 紫色の花を開く花卉 矢車菊・シネリア・スキート・ビールピナス・ネモフィ
ラ・ケシ・トリカブト・デギタリス・フロックス・ベチュニア・百日草・マツバボタン・牽牛
花・トレニア・エゾギク・鳳仙花・櫻草・ラダマキ・美女櫻・千日草・菊・シラン・ニハセキシヨ
ウ・ニホヒスミレ・桔梗・フクシア・ヘリオトロープ・マツバギク・クロカス・ヒヤシンス・
アネモネ・バビアナ・アガパンサス・グロキシニア・グラデオラス・花菖蒲・アヤメ・ダー
リア・躑躅・薔薇・藤等。

第二篇 各論

第一類 球根類

球根類の範圍は、廣狹一ならずと雖も、廣義の解釋に於ては、鱗莖(Bulb)、球莖(Corm)、
塊莖(Tuber)の外、根莖(Rhizome)、塊根(Tuberous root)等を包含するものなり。

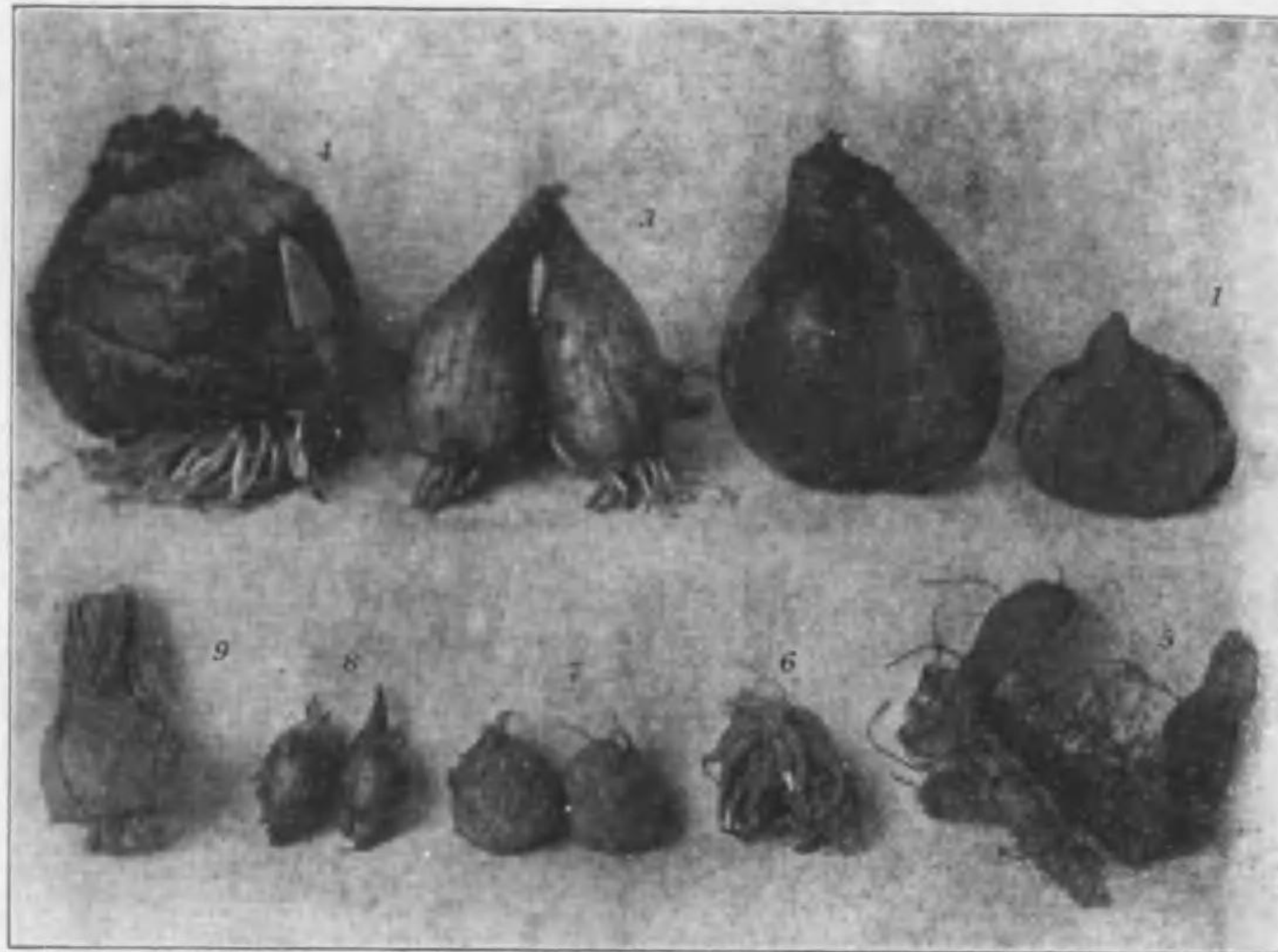
鱗莖とは、地下莖の變形したるものにして、其莖たる、甚だ短くして圓盤状を
呈し、其上部に鱗片状の葉を有す。此鱗片葉は、養分を蓄へて多肉なり。鱗莖の生長
を始むるや、圓盤状をなせる莖の下部より數多の根を發生し、又鱗莖の上部より

第四十四圖

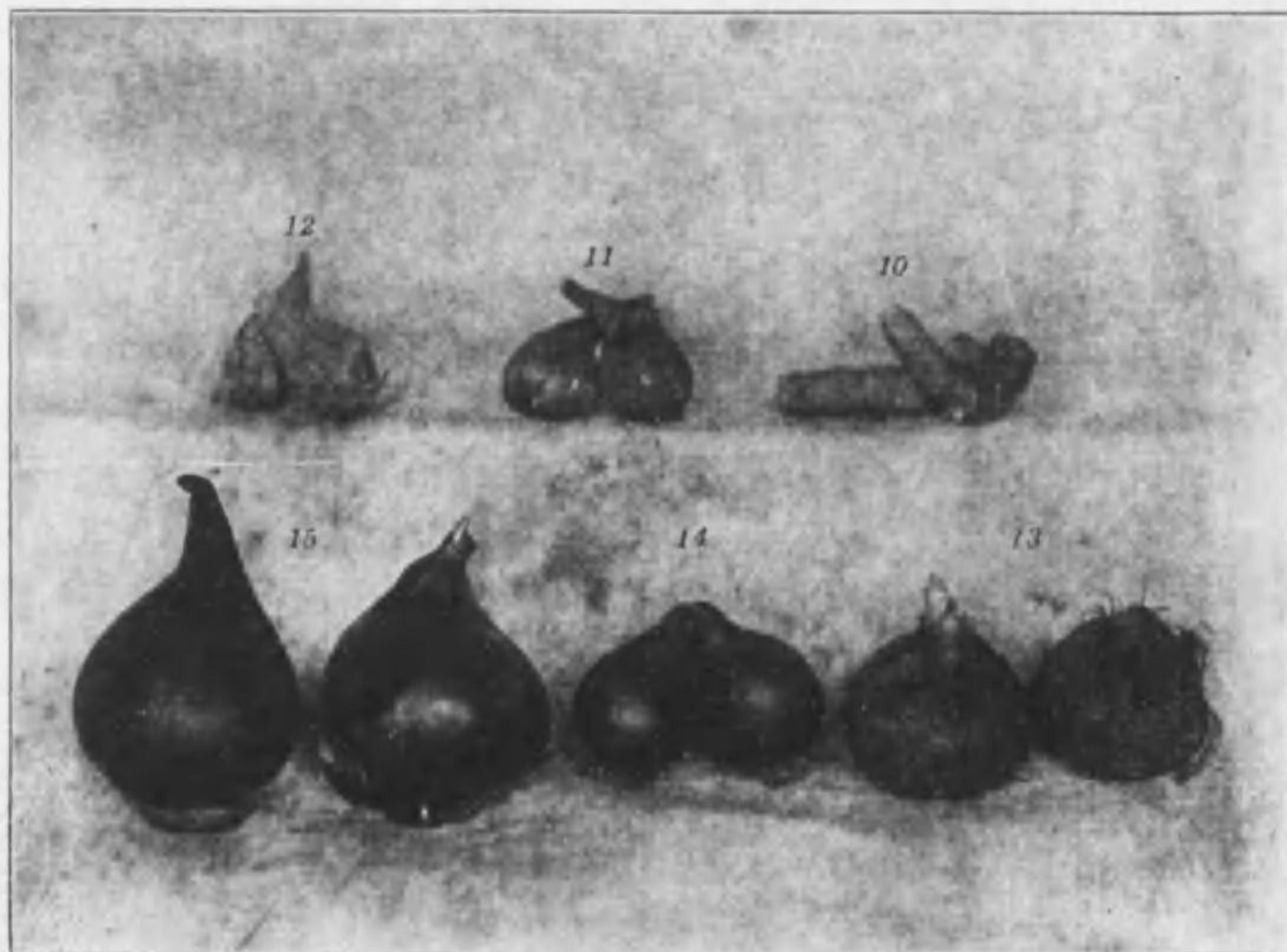


チューリップの鱗莖
イ、花莖にして古き
鱗莖の養分を吸
收せるもの
ロ、新しき鱗莖
ハ、子球

葉と花莖とを抽出す。花莖は、主ら鱗片
葉中に貯へられたる養分によりて養
はれ、やがて開花するものなり。
鱗莖を有する花草には、水仙・ヒヤシ
ンス・チューリップ・スノードロップ・百



スラオチラゲ(1) 仙水咲喇叭(2) 仙水紅口(3) スンシヤビ(4) ネモネア(5)
スルキナナラ(6) アニトリト(7) スリザキオ(8) アチレプトンモ(9)



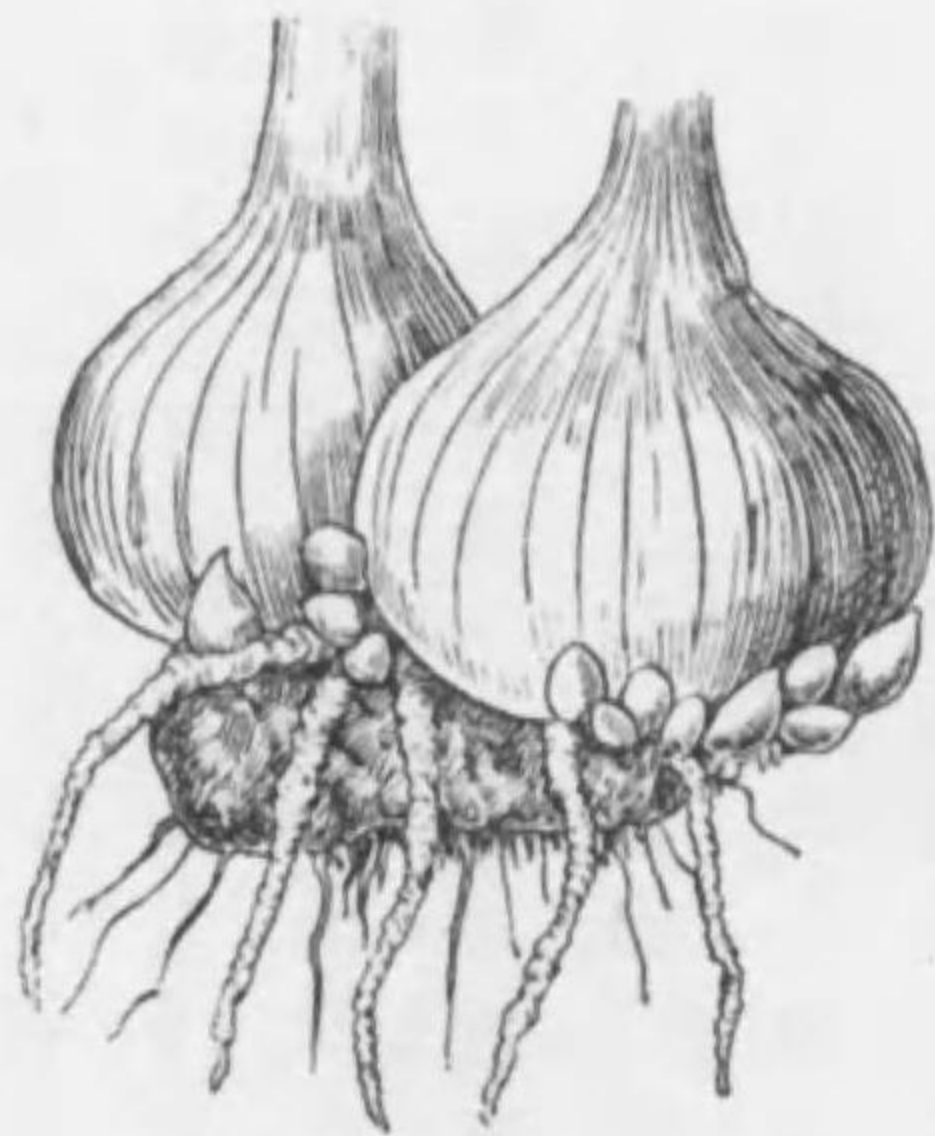
スネメキア(10) ナアビバ(11) アジーリフ(12)
スカロク(13) ブロードノス(14) ブリーユチ(15)

合等あり。之等の中、水仙・ヒヤシンス等多数の鱗莖は、數年間其生長を持續するも、チューリップなどの鱗莖に於ては、花莖の發育につれて、鱗莖中の養分は全然消費し盡さるゝを常とす。されば、落花後暫くして掘取る所のチューリップの鱗莖は、前年の秋に植付けたるものにあらずして、開花の前後、葉の同化作用によりて形成せられたる養分を以て新に造られたる鱗莖なりとす。

鱗莖に二種あり。其一是、水仙・ヒヤシンス・スノードロップ等に於て見るが如く、内部の鱗片葉は、肥厚にして、層狀に巻き重なり、外部は薄き膜質の物にて被はるるものにして、之を有皮鱗莖 (Tunicated bulb) と稱す。其二是、百合などに於て見るが如く、肥厚なる鱗片葉は、僅に下部に於て相重なり、且つ中軸の周圍に螺旋狀に配列し、外部には別に被膜なきものなり。之を無皮鱗莖 (Scaly or imbricated bulb) と稱す。

球莖 も亦、地下莖の變形したるものにして、外觀上、鱗莖に類似するも、縦斷面を比較するときは、能く兩者の相異を認むることを得べし。即ち、鱗莖にありては、盤狀莖 (Disc) は甚だ小にして、其上部に在る鱗片葉は、よく發育し、其中に養分を貯ふと雖も、球莖にありては、之に反して、盤狀莖は大にして、其中に養分を貯へ、鱗片

圖五十四第



グラデオラスの球莖にして、古き球莖の上に二箇の新球莖を生じ、且つ新球莖の基部に數多の小球 (Joints) 生ずるを示すものなり。尙ほ新しき球莖の基部より生ずる太き根は收縮根なり

葉の發育甚だ不良なり。クロカス・グラデオラス・イキシア・パピアナ・トリトニア等は皆球莖を有す。

球莖の發芽成長を始むるや、其貯藏養分は、花莖の發育に向つて全く消費せらるゝがゆゑに、落花後暫くして掘採するときは、舊球莖は乾燥

萎縮せる木質の塊に變じ、最早成長を持続すること能はず、新球莖の之に代りて

其上部に發育せるを見る

べし。此く球莖は、一年にし

て其貯藏養分を消費せら

れ、新球莖之に代りて次代

の成長を營む有様は、恰も

鱗莖中のチューリップに

圖六十四第

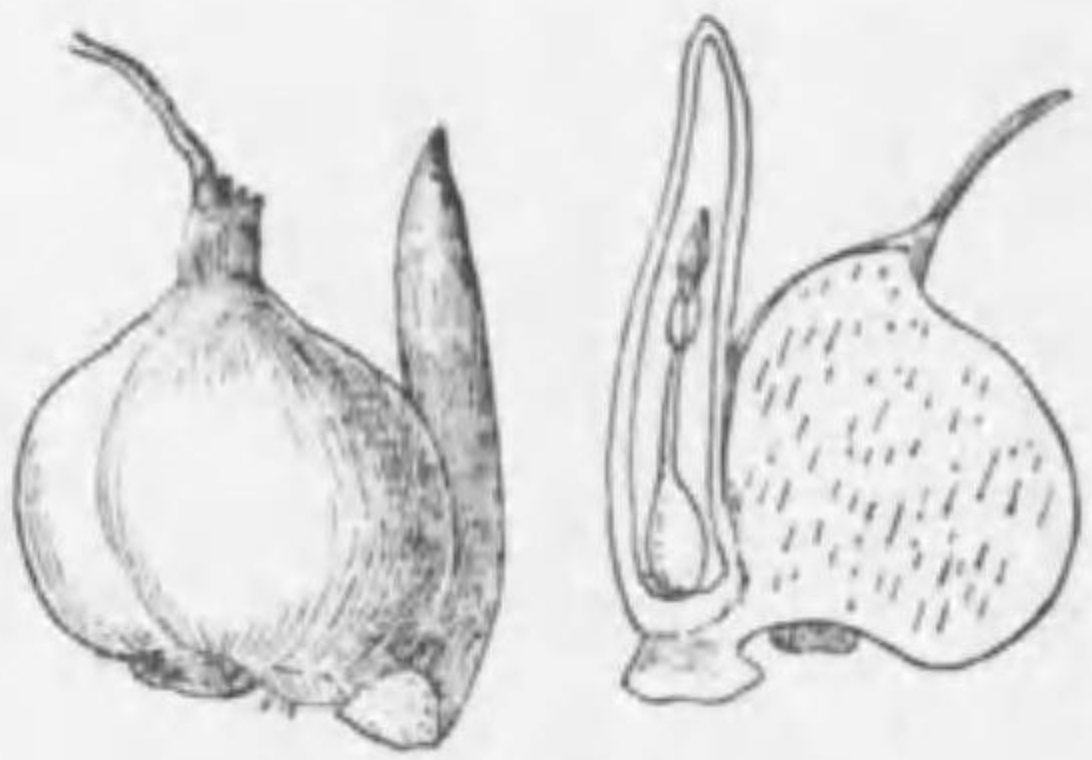


モントブレチアの球莖及び根莖 (球莖の上に出でたる根莖の上に更に球莖の生ずるを示す)

類す。而して、新球莖の年々古き球莖の上に生ずるは、一に葉によりて同化せられたる養分の下降し來りて、茲に貯藏せらるゝによるものにして、葉の枯凋するに及べば、球莖を掘り採りて貯藏するの理亦、自ら明かなるべし。

クロカス・グラデオラス・トリトニア等の如き花草は、舊き球莖の頂に新しき球莖を發生するの性あること右に述べたるが如し。之等の花草を自然のまゝに放置し、年々舊き球莖の上に新しき球莖の發生するにまかすときは、やがて、新生せる球莖は、地上に露出して、發芽を誤るの危険あるべきの理なるに、其實然らざる所以は、蓋し、此種の花草に收縮根(Contractile Root)の存在するによる(第四十五圖參照)。收縮根とは、太き根にして、新球莖の稍、發育するや、此收縮根は、舊球莖の位置よりも深く土中に伸入し、やがて、其固有の收縮力を逞ふして、新球莖を土中に引き込むの作用を營むものなり。此の如き特殊の根存在するがために、球莖の年々新生するあるも、地上に露出するの虞なきを得るものにして、此收縮根の外に、細き普通の根も亦存在するや勿論なりとす。此收縮根の收縮力は、垂直の方向に働くのみならず、又水平の方向に作用することあり。モントブレチア・グレーブ、ヒヤシ

圖七十四第



バルボコヂユムの球莖及び其切斷面にして、球莖の側面下部に新生長の始まれるを示す

を常とす。此くして、收縮根なきも、猶ほ能く新球莖の地上に露出して、發芽を誤るの危険なきを得るなり。

鱗莖及び球莖は、其構造及び成長の有様、互に相異なりと雖も、共に單子葉植物に屬するがゆゑに、何れも、葉脈は並行脈にして、花の部分は三又は六の數より成るを常とし、且つ種子の發芽するや、單一の子葉を發生するものとす。

塊莖

は、鱗莖球莖と等しく、地下莖の著しく肥厚せるものにして、其形一定せ

す、何れも多量の養分を貯藏す。塊莖上に存する目(Eye)は、即ち芽にして、翌年成長して苗となるものなり。而して、塊莖は鱗莖、球莖よりも更に一層著しく葉の退化せるを常とす。球根ベコニア・シクラメン・アネモネ・カラヂユム等は、塊莖を有する花草なり。又ダリアなどの有する塊根は、一見塊莖に類するも、其實全く根の肥厚せるものにして、芽を有せざるを以て異なりとす。ダリアなどの塊根を地中に埋むるも、發芽せざるは、其芽を有せざるによるものにして、之が蕃殖を圖らんとするには、塊根の上部即ち根冠にある芽を塊根に附着せしめたるまゝ土中に埋めざるべからず。

鱗莖及び球莖は、皆單子葉植物に屬するも、塊莖には、單子葉植物に屬するもの外、雙子葉植物に屬するものあり。雙子葉植物は、其葉網狀脈をなし、花の諸部(花冠・萼・雄蕊)は四又は五或は其倍數より成るを常とし、且つ其種子の發芽するや、二枚の子葉を發生す。但しシクラメンにありては、種子の發芽せる當初は、一枚の子葉を有するも、暫くして第二の子葉顯はれ出づるものとす。

根莖

は、多少水平的に發育する地下莖にして、其先端(又は莖節)に存在する芽

より、翌春、葉莖を抽出し、又根莖の下面より根を發生す。根莖の上面に殘留する印痕は、葉の年々脱落するがために生ずるものにして、根莖のみ獨りよく、越年して、翌春更に發芽成長するものとす。チャーマンアイリス・ソロモンズシール等の如きは、肥厚せる根莖を有し、リリー、オブゼ、パレーの如きは、肥厚せざる根莖を有する花草なり。

球根類と土質

球根類は、概ね、肥沃にして排水よき土質を好み、粘濕土を厭ふの性あり。各種の土壤中、最もよく球根類の栽培に適するは、蓋し、砂質壤土又は壤土にして、腐植に富むもの是なり。かゝる土質は、耕耨容易にして、排水よく、而かも猶ほよく適量の水を含有して、球根の發育甚だ佳なるものとす。和蘭に於ける球根栽培の秘訣は、砂質の土壤を利用して、巧みに牛糞を施用するにありと云ふ。されば、粘重土にては、排水の法を施すと共に、砂・腐植などの客入によりて、其土質を改良するを可とす。

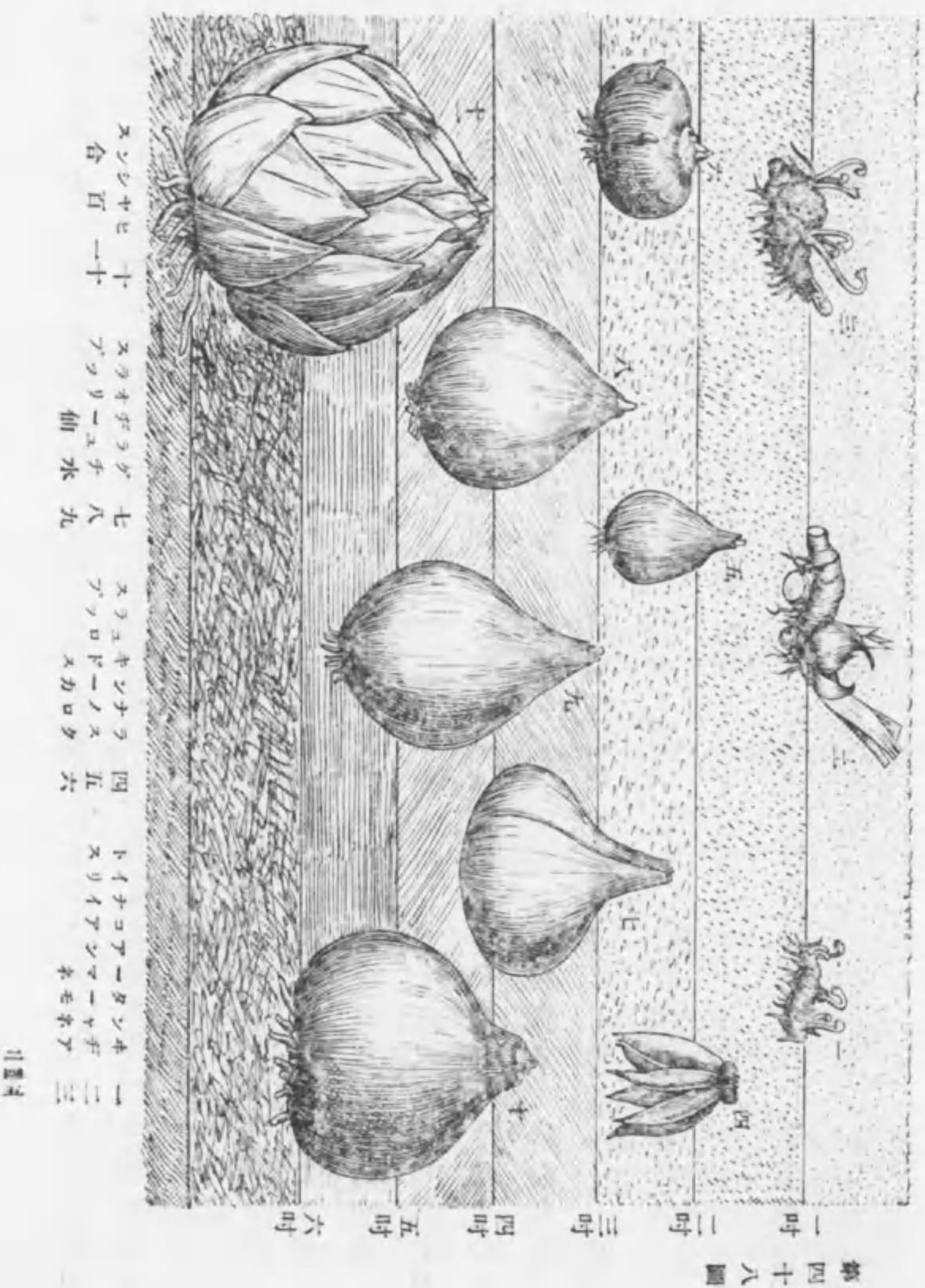
球根類と肥料

輕き土壤には牛糞の腐熟せるものを施し、重き土壤には馬糞の腐熟せるものを用ふるを可とす。何れにしても、之等の肥料は、穴を掘りて其底

に施すべく、其穴の深きは、小なる球根にありては五六寸、大なる球根にありては一尺位となすを可とし、其肥料の上に土を被ふたる後、球根の植付をなすべし。然るときは、球根より發生せる根は、當初、肥料に接觸することなしと雖も、やがて容易に之に觸れて、其養分を利用することを得べし。元來、球根類は、新鮮なる有機肥料を嫌ふものにして、特に斯る肥料の球根に接觸するが如きは、往々、後者の腐敗を惹起するの虞あるものとす。是れ、厩肥を地下五六寸乃至一尺位の深さに施して、球根との接觸を避けしむる所以なり。尙ほ、植穴の底に厩肥を施すの際、之に混するに、過磷酸石灰骨粉、灰の類を以てするを可とす。尙ほ、球根類には、右基肥の外、補肥として、液肥を適宜施すを可とし、其液肥としては、油粕、魚肥等を水に入れて腐熟せしめたる上澄又は下肥などを用ふ。但し、何れも濃厚に失することなく、且つ球に觸れざるやう注意して施さざるべからず。

球根の植付

球根植付の時期は、秋又は春を常とし、チューリップ、ヒヤシンス、アネモネ、ランキユラス等の如く、春開花するものは、秋に植付け、ダリア、アカンナ、グラチオラス等の如く、夏秋の候に開花するものは、春に於て植付くるを常と



第四十八圖

す。又球根によりては、春秋何れに於て植付くるも差支なきのみならず、同一球根も、地方によりて植付の時期を異にするの已むを得ざるものあり。例へば、秋植を常とする球根も、寒地にては春植となすが如し。秋植は、通例九月乃至十一月頃に行ひ、春植は三月乃至五月頃に行ふ。球根植付の深さは、其發育上に大關係あるものにして、深きに過ぐるも浅きに失するも、共に宜しからず。即ち、植付深きに過ぐるときは、綠葉地上に抽出するに困難なるべく、又浅きに失すれば、球根は發芽に要する水分を得るに困難なるのみならず、秋植のものにありては寒害に罹り易し。されば、須く球根の種類、大小、土質等によりて、適當の深さを定むべきなり。一般の法則としては、露地に於ける球根植付の深さ、球の頂より地面までの距離は、球の高さの約二倍となすにあり。但し、球根の形、球状をなさざるものによりては、適宜斟酌するを要す。今球根類の數種に付きて、其植付の深さを述べれば、チャーマン、アイリス、ウインターアコナイト等の如きは一寸内外、クロカス、ラナンキュラス、スノードロップ等の如きは二寸内外、グラデオラス、チューリップ、水仙等の如きは三寸内外を以て通常とするが如し。

球根を植付くるに當りては、健全なる球根を選択して植付けざるべからず。凡そ球根は、其底部より上方に向つて腐敗するを常とするがゆゑに、球根の選擇に當りては、特に能く球底を檢查せざるべからず。又母球に子球 (Offset) の附着し居るものは、其子球を取り去りたる後に植付くるを要す。子球の附着せるまゝに母球を植付くるときは、母球の養分は子球に吸收せられ、爲に母球より發生せる苗に開花せざるにあり。又假令開花するも、其花たる、矮小なるを免れざるものとす。

球根の掘採及び貯藏

球根類中、春開花するものは、六七月頃に至りて、莖葉枯凋するに至れば、之を掘り上げて、風通しよき場處に擴げ、二三日間乾燥したる後に貯藏すべく、夏秋の候に開花するものは、降霜前に掘り上げて、二三日間日光にさらして乾燥したる後、貯藏すべし。

貯藏法としては、椽下など、雨のかゝらぬ地を深く掘りて、埋め置くも可なるべく、高燥の地に埋藏するも亦可なり。要するに貯藏の場處は、乾燥にして、温度の變化少きを可とす。而して、秋植球根類よりも、春植球根類の方、貯藏、概して困難なる

●乾燥せる砂を箱に入れ、其砂の中に埋めて、室内に貯へ置くも可なり。

が如し。是れ、春植のものは、越年する間に、寒害にかゝりて腐敗するものあるによる。又球根類中、水仙などは、球根を掘上ぐることなく、其儘となし置くも、能く開花するものとす。

球根類は、概して發根後移植するを忌むものなり。是れ、球根類は容易に新根を發生することなきを以て、移植によりて、根を損すること多きときは、少からず榮養を害し、甚だしく衰弱するに至るがためなり。されば、球根類にありては、成るべく生育期間の移植を避くるやうにすべく、若し已むを得ずして、之を行ふ場合には、成るべく根を損傷せざるやう十分注意して掘り取らざるべからず。春咲球根を植付けたる地を、夏花壇として更に利用せんとするが如き場合には、球根の移植を行ふの已むを得ざることあり。此際には、落花後、十分注意して、土と共に掘り上げ、他の床地に假植し、莖葉の枯凋するを俟て掘り上げ、乾燥して貯藏すべし。

葉も亦、損傷せざるやう特に注意すること、多くの球根類にありて肝要のことたり。是れ、蓋し、チューリップ・ヒヤシンス等に於て見るが如く、其一生育期間に生すべき葉の數は、比較的少數にして、而かも大約一定し居るがゆゑに、之を損傷す

ること著しければ、球根の榮養を害すること多く、爲に球根の成熟を見ること能はざるに至るを以てなり。チューリップ・ヒヤシンス等に於て、花莖の基部に發生する葉は、翌年の開花に必要な養分を造り、之を球根中に貯藏するに大切なものとす。されば、之等球根類に於て、切花を採る場合には、成るべく花のみを切り取り、葉を残し置かざるべからず。尙ほ、球根を成るべく肥大ならしめ、以て翌年美大の花を開かしめんと欲せば、凋花後直に花を切り去りて、結實せしめざるを要するものとす。

球根類の蕃殖

球根類に行はるゝ蕃殖法には、種々のものあり。即ち接木・壓條の外、殆ど各種の蕃殖法は、球根類の蕃殖に於て採用せらるゝを見る。彼の天竺牡丹の如きは、時に塊根を砧木となして、之に蕃殖せんとする品種の莖を割接となすがゆゑに、接木法も亦全く球根類に行はれざるにあらずと雖も、多くの球根類にありては、接木を行ふことなし。今球根類の蕃殖法中、主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

(一) 子球による蕃殖 球根類の多數は、母球に着生する所の子球 (Child) を分離

して蕃殖を圖るを常とす。元來、子球の發生は、葉にて同化せる養分の過剰なるがため、母球内に藏めて、猶ほ餘裕あるものにして、畢竟、過剰の養分の利用に外ならざるなり。而して此子球は、漸く養分を得て發育するや、やがて又子球を生ずるに至るものにして、其關係は、恰も自己の母球に着生したると一般なりとす。此故に、二三の球根を植付けたる儘にて數年放置するときは、球根の數著しく増加し、植付當時に比して、遙に廣き地域を占有するに至るを見るべし。

子球は、其大きさに大小の差あり。従つて、其價值亦相等しからず。即ち、大なる子球にありては、養分既に充實して、花期に達せるものあるがゆゑに、之等は直に花壇・鉢などに植付けて、開花を賞するを得べく、之に反して中球・小球等は、先づ苗床に假植して、一二年培養し以て養分の充實を圖り、花期に達するを俟て、觀賞用に供せざるべからざるなり。

又グラデオラスなどの如き球根類にありては、子球の外にクローブ (Clove) 又はスポーン (Spaw) と稱する小球を數多發生するの性あり(第四十五圖參照)。此スポーンは、球底並びに其附近に發生するを常とし、其性、恰も天蓋百合などの葉腋

に生ずる珠芽に類似するものなり。スポーンは、母球より分離したる後、砂土に埋藏し、翌春に至り、苗床を設けて植付け、二三年培養するときは、花期に達するを以て、觀賞用の栽培に供す。

(二) 鱗片葉による蕃殖 百合類にありては、其多肉の鱗片葉を剝離して、砂土を盛れる苗床に、殆ど垂直に挿入するときは、葉片の基部に不定芽を發生し、やがて小球を生じ、三四ヶ年の後には、開花期に達するものとす。凡そ、百合類は、其鱗莖を掘採り又は植付くる際に、往々鱗片葉の剝離を見ることあるがゆゑに、かゝる鱗片葉を利用して新球の形成を圖るを可とす。簡便の方法としては、苗床の上にて之等の鱗片葉を撒布し、其上に、一二寸の厚さに砂土を被ふを以て足れりとす。

右の方法に稍、類似せる蕃殖法は、ヒヤシンスに於ても行はるゝことあり。即ち、ヒヤシンスの球根を採り、其底部に二三の切傷を施したる後、放置して、傷口を乾燥せしむるときは、其傷口よりして續々小球の發生を見るに至るべし。此に於て、其小球を母球より分離して、肥沃の砂土中に、一二寸深く植付くるときは、やがて新球根を得るものとす。

(三) 珠芽による蕃殖 天蓋百合の如く、葉腋に珠芽を生ずるものにおいて、其成熟するを俟て、之を採收し、種子の如く播下すべし。此方法によるときは、種子を播くよりも早く開花期に達するものとす。

(四) 分株による蕃殖 根莖塊莖を有する多數の球根類は、分割して蕃殖するを得るものにして、此際分割せられたる各部には、一二の芽を有するを肝要とす。此くして、根莖塊莖などを適宜分割せる後は、各其切口に、灰などを附着せしめて、其部分の乾燥を圖ると共に、病菌の侵入を防ぎたる後、植付くべし。之を分株(Dividing)と云ふ。塊莖根莖などを分割するには、或は手を以てし、又は小刀を用ふ。何れにしても、芽の損傷せざるを要す。

(五) 種子による蕃殖 球根類は、種子を播下して蕃殖を圖るときは、開花期に達する期間長きを以て、通例此法を用ふることなしと雖も、新品種を育成するがために、往々此法を用ふるものとす。播種期は、通例春秋二季なるも、温室内に於てするときは、其他の時期に於ても、隨時之を行ふを得べし。ペゴニア・ダーリア・グロキシニア・シクラメン等の如きは、播種後約一年にして開花するも、チューリップ・ヒ

ヤシンスの如きは、播種後五年内外にして開花するものとす。種子は、苗床又は鉢に播下するを常とし、腐植に乏しからざる砂土を用ふるを可とす。

以上の外、挿木(及び接木)による蕃殖法もあれども、甚だ罕に採用せらるゝのみ。蓋し、單子葉植物に屬する球根類、即ち眞の球根類は、其莖に形成層を有せざるがゆゑに、挿木又は接木によりて蕃殖を圖ること能はざるによる。但し、ダーリア・ペゴニアなどの如く、雙子葉植物に屬するものは、眞の球根類と異なりて、挿木によりて蕃殖せられ得るものとす。

球根類の鉢植

球根類は、花壇草地樹下等、種々の場處に植付らるゝ外、尙ほ鉢植となし觀賞せらるゝこと少からず。特に保温上、温室内にて栽培せらるゝもの如きは、鉢植となすを常とす。尙ほ、鉢植となすときは、處要の位置に鉢を運びて、觀賞するの便あるのみならず、鉢植せる儘、花壇などに埋め置くときは、凋花後、鉢のまゝ抜き取りて、他の花草を植付くるに便なるものとす。

鉢植となすには、先づ植付くべき球の大きさに相應したる大きさの素焼鉢を準備し、其鉢底には、排水を良くするがため、鉢の破片などを入れ、更に其上に粗粒の土

●粗大の土粒を除去し、更に甚だしく細微の土粒をも篩にかけて除去するときは、甚だ可なり。

二五四

壤を入れたる後、培養土を入れて球根を植込むなり。球根は、成るべく肥大充實して、健全なるを可とす。又培養土としては、砂質壤土に腐葉土を混じたるものを可とし、之を篩にかけて、粗大なる土粒を除き用ふべし。但し、此粗大の土粒は、徒に放棄することなく、排水をよくするがため、鉢の破片などの上に入る、粗粒土に利用するを便とす。鉢の大きさは、球の大小により、又一鉢に植込む球数の奈何によりて異なりと雖も、最も多く用ひらるゝは、直径五六寸内外のものとする。又球根植込の深さは、地植に於けるが如く深くすべからず。即ち球の頂端の隠るゝを度として土を被ふべく、シクラメンの如きは、球の頂が地上に露出するを可とするものなり。春咲球根の場合にありては、冬間、鉢の儘、土中に埋め、落葉等を以て其上を覆ひ、以て防寒の法を講ずるときは、開花を早むるの効あり。但し耐寒性の弱きものは、温室又は温床内に入れ置きて、越冬せしむるを要す。又鉢植は、地植に比して、灌水を要すること多きも、過度の灌水は亦却て害ありとす。尚ほ、鉢植となせるものは、球の發育不良にして、翌年再び鉢植とするも、開花せざることあり。此の如き場合に於ては、鉢植となせる球根を地植となして、一兩年培養したる後、再び鉢植

●水仙の水栽培には、水盤を用ふることを多し。

第九十四圖



となすを可とす。

温室内の鉢植には、鉢内に灌水する外、更にシンリンチ (Shinrinchi) と稱する一種の噴霧器にて、葉莖并に室内に撒水するを常とす。是れ温室内の空氣を濕潤にして、葉より水分の蒸散するを減ずるがために行ふものなれば、高温乾燥の室内ほど撒水の要多きものとす。尚ほ、此種の撒水は、葉上に堆積する塵芥を清掃して、氣孔の杜塞せらるゝを防ぐのみならず、塵芥によりて日光通徹の遮らるゝを防ぎて同化作用を完からしむるの効あるものなれば、露地の鉢植にも亦、之を行ふとあり。

球根類の水栽培

球根類中、クロカス・ヒヤシンス・チューリップ・水仙等には、又水栽培を行ふ。之を行ふには、先づ上部に縊れたる部分を有する硝子壘を準備し、其縊れたる部分まで水を充たし、其水の腐敗を防ぐがため、木炭の小片二三を入れたる後、球底の僅に水に觸接するやうに、球根をば、縊れたる部分に載せ置くべし。斯くて、當初は、暗き場處に置き、根の十分發生するを俟て、漸次に日光を受けし

●華氏六十度許を可とす。

●根の發育に十分なる間に芽を發生するは不可なり。

●耐寒性強きものは掘り出したる鉢を露地に置き、寒氣に會はしめたる後高温を與ふるを可とす。

め、且つ、成るべく温暖ならしむるときは、葉莖發育して、やがて開花するものなり。又壺中の水は、時々取換ゆるは勿論蒸發によりて失はるゝがゆゑに、之を補給して、常に球底に水の達するやうに注意すべし。

球根類に於ける開花の促進

球根類

の開花を促進するの法は、高温多濕の境遇に居らしむるにあり。但し、之に先だちて球根を鉢植又は箱植となし、球の頂端顯はるるほどに淺く土を被ふ場合あり、又單に土の上に球根を並ぶる場合もあり、其鉢をば陰蔽せる地に移し、厚く土藁の類を被ふか、又は土中に埋めて、數週間放置すべし。然るときは、根先づ十分に發生して、後に芽を生ずるを以て、此に於て其鉢を掘り出して、温室内に移し、十數日の間は室内を薄暗くして、溫度を華氏の五十度許に保ち、黄色を帯べる葉莖の綠色に變ずるを俟つて、溫度を七十度許に

第五十圖



球根の水栽培に用ふる壺
右、クロカス
左、ヒヤシン用

高め、漸次に日光の射照を大ならしめ、且つ時々撒水を行ふときは、日光不足のため、發生を促進せられたる花莖には、花蕾の膨大するを見るべく、やがて開花を賞し得るに至るものとす。開花中は溫度を稍、低くすべし。此くして、開花の促進せられたる球根は、通例二三年間地植となして、培養するにあらずんば、再び開花することなきを以て、往々促進後放棄せらるゝを見る。球根類中、開花促進の行はるるは、クロカス・フリージア・シクラメン・アマリス・水仙・チューリップ・ヒヤシンス・イキシア・百合・モンブレチア等にして、其促進法は種類によりて多少の相異なるものとす。

球根類と耐寒性

球根類は、耐寒性の強弱によりて、次の三種に區別せらる。

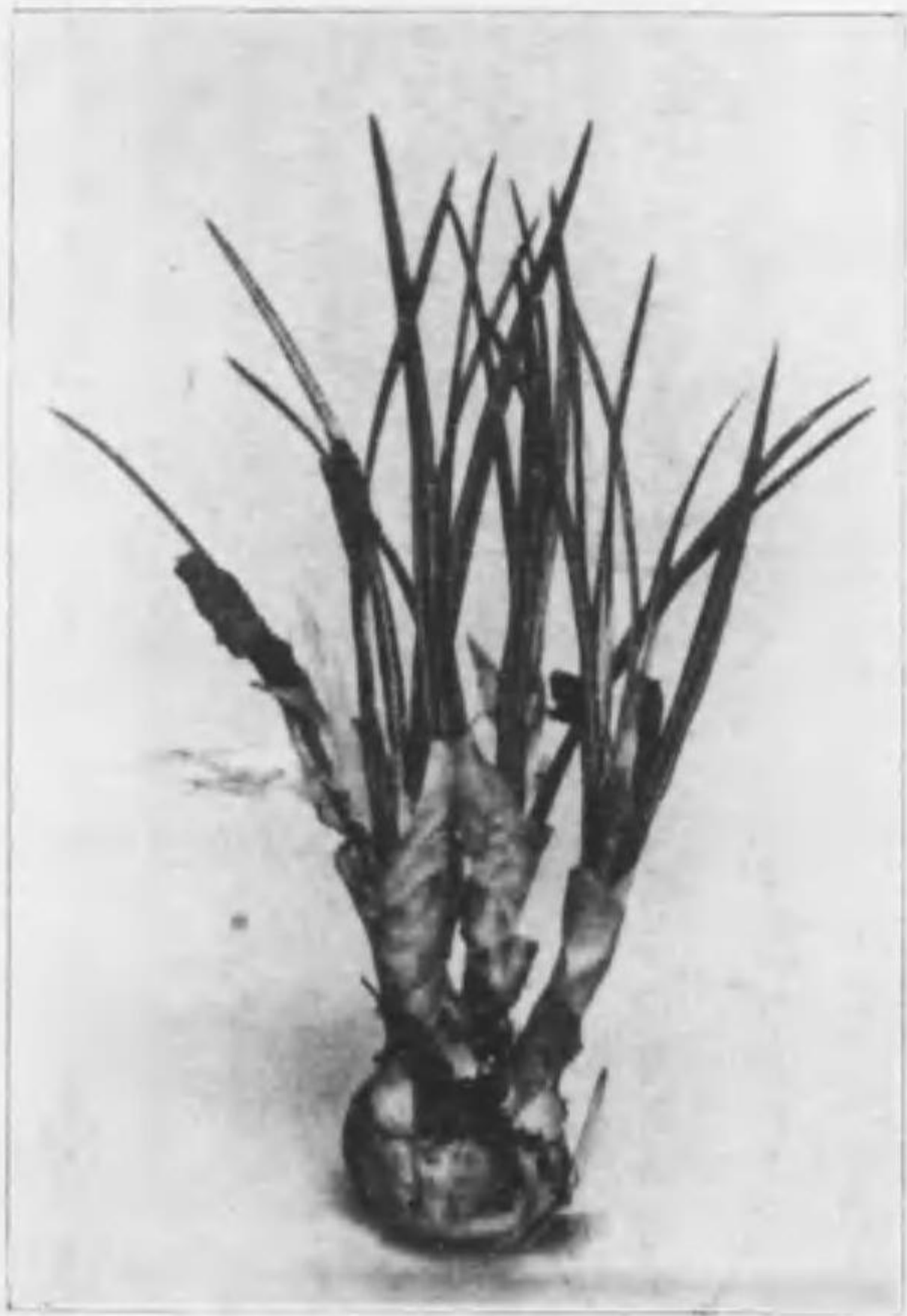
- 一、耐寒性球根 Hardy Bulbous and Tuberos Plants
- 二、半耐寒性球根 Half-hardy " " "
- 三、不耐寒性球根 Tender " " "

右の中(一)及び(二)は露地にて栽培し得べく、(三)は温室内にて栽培するものとす。此區別によるエザース氏の球根分類は、次の如し。

第一章 クロカス

クロカス (Crocus) は、鳶尾科クロカス属の球根植物にして、開花期によりて春咲種 (Spring-flowering Crocus) と秋咲種 (Autumn-flowering Crocus) との二種に大別することを得べし。彼の薬用サフラント稱し、秋季、紫色の花を開き、其花柱及び柱頭を薬用に供するものは、秋咲種に屬す。而して、春咲クロカスは、春サフラン又は花サフランと稱し、早春、他の花に先だちて開花するがために、地植・鉢植等となして、觀賞せらるゝこ

圖一十五第

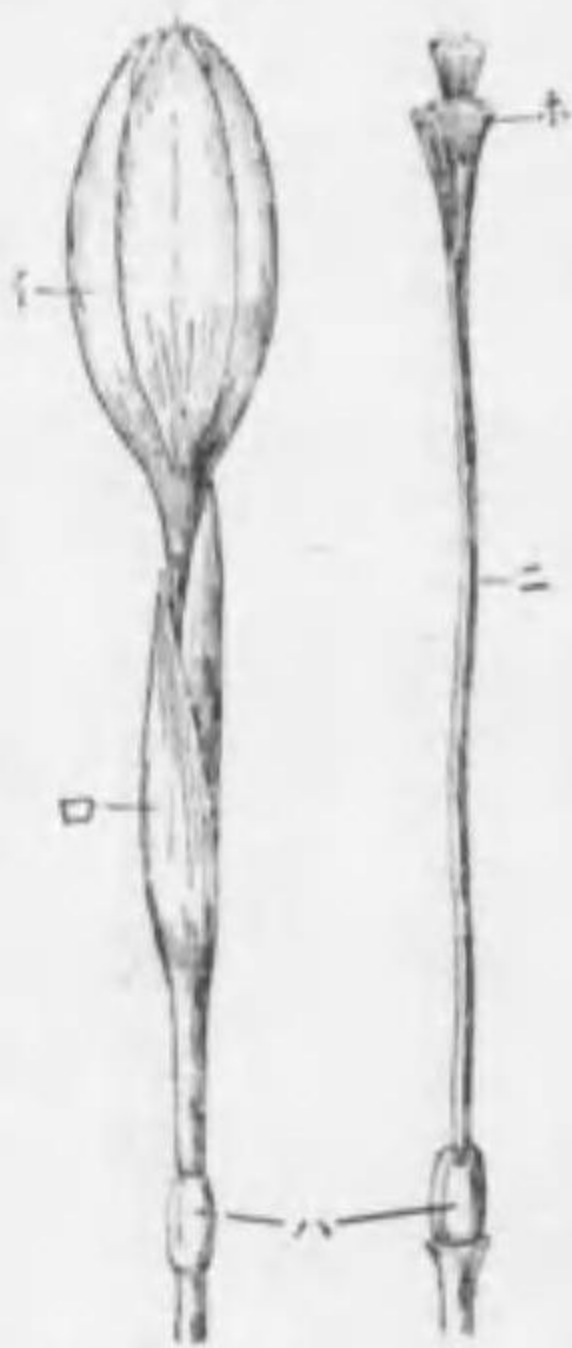


クロカスの圖 (落
花後直に撮影)
古き球根の上に
新球根を生じ右
方新球根の前方
左端より收縮根
を發生せるを示
す

に供するものは、秋咲種に屬す。而して、春咲クロカスは、春サフラン又は花サフランと稱し、早春、他の花に先だちて開花するがために、地植・鉢植等となして、觀賞せらるゝこ

と多く、通例、クロカスと云ふときは、春咲種を指すものとす。此花草は、極めて矮性なるを以て、花は殆ど地面より咲き出でたるが如き觀あり。且つ此花は日中に開き、夜間に閉づるものにして、花色には、紫、黄、白、縞等あり。

圖二十五第



クロカスの花
イ、花被(花蓋)
ロ、苞
ハ、子房
ニ、花柱
ホ、花柱の先端三分し更に細裂せる狀

性状原種

クロカスは、莖を地上に生ずることなく、地下に球莖を有す。球莖は、一般に纖維質の皮膜を以て被はれ、之より數箇の葉を地上に叢生す。葉は線狀をなし、暗綠色にして、中央に白き縦線あり。花は葉叢の間に數箇開き、其形漏斗狀をなして上向き、其基部に苞あり。花被即ち花蓋は六片より成り、其下部は長き管狀をなす。雄蕊は三箇ありて、花蓋の咽喉部に着生し、雌蕊は花柱甚だ長くして、先端三分し、更に細裂すること第五十二圖に示すが如し。子房は下位にして三室に分れ、多數の胚珠を有し、果實は蒴果なり。

クロカス属には七十餘種あるも、就中、春咲種の原種として注意せらるゝは、主

として次の數種なりとす。

(一) クロカス、エルヌス (*Crocus vernus*, All.) 此種は、ピレニア・アルプス及びカーバシャン山等に野生し、花は紫色より白色に至る種々の色彩を有するも、黄色を缺く。現今栽培せらるゝ春サフランは、多く之に由來す。

(二) クロカス、アウレウス (*Crocus aureus*, Sibth. and Smith.) 此種は、歐洲東南部の原産にして、黄色の花を開くを常とす。現今栽培せらるゝ黄色種は、之に由來するもの多し。クロカス、メシアクス (*Crocus moesiacus*, Ker.) は、之と同種にして、和蘭クロカス (*Dutch Crocus*) の稱あり。

● 花蓋の外片の裏面。

(三) クロカス、スシヤヌス (*Crocus susianus*, Ker.) 此種は、英名をクロッス、オブ、ゴールド、クロカス (*Cloth of Gold Crocus*) と稱し、クリメアの原産なり。花は橙黄色にして前種に類するも、外方の花瓣の裏面(外側)には紫褐色羽毛狀の條斑(多くは三條)あるを以て異なりとす。

(四) クロカス、イムペラチ (*Crocus imperati*, Tenore) 此種は、英名をアーリー、クロカス (*Early Crocus*) と稱し、南伊太利の原産なり。花は淡紫色にして、外方の花瓣の裏面

(外側)には、紫褐色羽毛狀の條斑(三箇)あり。

(五) クロカス、シーベリ (*Crocus Sieberi*) 此種は、希臘の原産にして、花は淡紫色なるも、基部黄色を呈す。其變種エルシヨロール (*Versicolor*) は、白色より紫色に至る種々の花色を有し、白及び紫の縞あるも、基部は常に黄色を呈す。

品種

春サフランの主なる品種は次の如し。

ダギッド、リッチオ (*David Rizzio*) 紫色。

エルフライド (*Elfride*) 白色、大輪。

エムプレッス (*Empress*) 堇菜色(縞あり)。

フリュードール (*Fleur d'Or*) 黄金色。

グランド、エルロー (*Grand yellow*) 黄金色、大輪。

ハービンゲル、オブ、スプリング (*Harbinger of Spring*) 暗紫色、甚早咲。

キング、オブ、ゼ、ホワイト (*King of the White*) 純白、大輪。

ジョン、ブライト (*John Bright*) 暗紫色、大輪、早咲。

キング、オブ、ゼ、ブルー (*King of the Blue*) 暗紫色、美大。

ロテア (Lothair) 白縞ある暗紫色、美大。
 マーゴット (Margot) 淡青色、美大。
 マリー、スチュアート (Mary Stuart) 純白、美。
 モンブラン (Mont Blanc) 白色、美にして丈高し。
 プリンセス、アルバート (Princess Albert) 莖菜色、美。
 プリンセス、アレキサンドラ (Princess Alexandra) 白色に莖菜色。
 プルブレア、グランジフロラ (Purpurea Grandiflora) 暗紫色、大輪。
 アルビオン (Albion) 青縞ある紫色。
 アルグス (Argus) 白地に莖菜色の縞。
 バロン、バンブルノー (Baron van Bruhow) 暗紫色(内側淡色)。
 ビコロア (Bicolor) 紫に白。
 ブライド、オブ、ラムマームーア (Bride of Iammermoor) 紫に白。
 クキン、オブ、シェバ (Queen of Sheba) 黄色、大輪。
 サイ、ウォルター、スコット (Sir Walter Scott) 白地に藤色の縞、大輪。

マキシミアン (Maximilian) 淡青色、大輪。
 ジュリア、カルプ (Julia Culp) 紫青色、晚咲。
 オーレウス、サルフェレウス、コンコロール (Aureus sulphureus concolor) 黄色。
 パラス (Pallas) 白地に藤色の縞を有し、雄蓋橙色を呈し、甚だ美なり。

栽培法

春サフランを栽培するには、九十月頃、球莖を二寸位の深さに植付け、相互の間隔を二寸許となすを可とす。此花草は、性強健にして耐寒力強く、通例、防寒の準備を要せずと雖も、寒氣凛烈の地にありては、地面に藁稈の類を被ひ置くを可とす。肥料としては、球莖植付の際に、植穴の底に堆肥、油粕、藁灰の類を施して、其上に被土したる後、植付くるを可とし、更に開花前一二回、稀薄の液肥を施すをよしとす。未熟の有機肥料及び濃厚なる液肥の球莖に接觸するときは、動もすれば球莖を腐敗せしむるの虞あれば、よく注意すべし。又春サフランを鉢植となすには、直径五寸の鉢に五六球を植えて可なり。鉢植に用ふる培養土は、肥沃にして且つ排水よきものを可とし、且つ当初は鉢を暗處に置きて充分に發根せしめ、芽の出づる頃、明處に移すを可とす。

春サフランは、開花期間短しと雖も、早春花壇を飾るに宜しく、特に其高さ僅に數寸にして、甚だ低きを以て花壇の縁植となし、且つ花色の異なるものを適宜排列して、花壇に種々の模様を顯はすに宜しとす。

春サフランは、五月頃葉の枯凋するに至れば、掘り採りて乾燥したる後、秋季の植付時まで貯へ置くも、三年許其儘となし置きて可なり。蓋し此花草は、古き球莖の上に新しき球莖を生じ、漸次地上に露出せんとするも、收縮根の作用によりて新球莖を土中に引き込むものとす。但し球莖淺きに失するときは、適宜被土をなすを可とす。

種子によりて蕃殖するには、種子の成熟するを待ち、之を採收して鉢又は箱などに播下すべく、之には肥沃の砂質土を用ふるを可とす。種子は多く翌春に至りて發芽す。斯くて手入宜しきを得ば、二年目には球莖を生じ、三年目に開花するも發育不良のものは、開花までに更に多くの年數を要するものなり。播種は新品種育成の目的を以て行ふを常とす。

シクラメン

普通水仙

ラッパサキスネセン

クロカス

星咲水仙

(ナルシツサス、
インコンバラピリス)

ナルシツサス、
リージー

キズネセン

口紅水仙

八重咲水仙



千代草

（千代草、千代草、
星突水蘭）

口珠水蘭

千代草

八重突水蘭

普通水蘭

千代草

千代草

千代草

第二章 水仙

性状 水仙は、石蒜科ナルシッサス (*Narcissus*) 屬の球根植物にして、早春葉叢の間より花莖を抽出して、開花す。葉は鱗莖より生じ、全邊にして細長く、並行脈を有す。花は兩性にして、花莖の頂に單生するか、又は數個繖形花序をなして生じ、孰れも、當初膜質の苞にて包まる。花蓋は、通例、黄色又は白色を呈し、六片より成り、内外

二層に排列し、其下部は結合して筒狀(花筒)をなす。其花筒の入口に、副花冠 (Crown or Corona) あり。六箇の雄蕊は花筒に着生す。子房は下位にして三室に分れ、多數の胚珠を有す。果實は蒴果なり。

水盤栽培の支那水仙
(水盤より取出して撮影せるもの)



圖三十五第

水仙は、古くより我邦に栽培せられたるも、副花冠突出して、喇叭状をなす所の喇叭咲水仙は、近年に至りて多く栽培せらるゝに至れるものとす。花色は黄と白との二種なるも、一重咲と八重咲とあり。花形亦種類によりて一ならず。此花草は、花壇其他に栽培する外、鉢植又は切花として観賞するに可なるのみならず、水盤内にて栽培するにも用ひらる。

類別原種及び品種

ナルシッサスは、歐亞の原産にして、支那及び我邦にも野生す。従て其原種亦少からず。且つ栽培によりて數多の變種を生じ、品種甚だ多し。ペーカー氏 (J. G. Baker) は、西暦千八百八十八年に於て、副花冠の形狀大きに基き、ナルシッサス屬を次の三類に大別せり。

第一類 長副冠類 (Magni-coronati) 此類の副花冠は、喇叭状をなし、花蓋と同長なるか又は之よりも長し。ナルシッサス、バルボコヂュム (*Narcissus Bulbocodium*)、ナルシッサス、シウドナルシッサス (*Narcissus Pseudo-narcissus*) 即ち喇叭咲水仙 (*Trumpet Daffodil*) 等は之に屬す。

第二類 中副冠類 (Medio-coronati) 此の類の副花冠は、喇叭状又はコップ状を

なし、花蓋の約半分位の長さを有す。ナルシッサス、トリアンドルス (*Narcissus triandrus*)、ナルシッサス、インコムバラピリス (*Narcissus incomparabilis*) 等之に屬す。

第三類 短副冠類 (Parvi-coronati) 此類の副花冠は、淺く盞状をなし、其長さ花蓋の半分以下なり。此類に屬するものは、ナルシッサス、タゼッタ (*Narcissus Tazetta*)、ナルシッサス、ジョンクイラ (*Narcissus jonquilla*)、ナルシッサス、ボエチクス (*Narcissus poeticus*) 等の諸種なり。即ち我邦普通の水仙を始め、長壽花、口紅水仙類は、皆之に屬す。今先づ前記の諸種につき、其一斑を示せば、次の如し。

- (一) **ナルシッサス、バルボコヂュム** (*Narcissus Bulbocodium*, L.) 此種は、副冠の形狀繻にて張り擴げたる往時の女袴(西洋人の女袴)に似たる所あるを以て、**フープド、ベチコート、ダツフォデイル** (*Hooped Peticoat Daffodil*) と稱し、又副冠著しく大にして突出し、稍喇叭状をなすを以て、メヂューサ、トラムベット、ダツフォデイル (*Medusa Trumpet Daffodil*) と稱し、廣義に於ける喇叭咲水仙

圖四十五第



スサシルナ
ムチコボルバ

の一種なりとす。

此種は、南歐洲及び北亞弗利加の原産なり。鱗莖の直径約六分内外にして、之より二三の葉を發生し、其葉叢の間に花莖を抽出し、其頂に唯一輪の花を生ず。葉は丸味を帯びて長く、其表面に縦溝あり。花は鮮黄色を呈し、花蓋は狭小なるも、副花冠は漏斗状をなして甚だ大なり。花莖は丸くして、其長さ約三四寸乃至七八寸あり。三四月頃開花す。變種に白色の花を開くものあり。鉢植に宜し。

(二)ナルシッサス、シュードナルシッサス (*Narcissus Pseudo-narcissus*, L.)。此種は、英名をコムモン、ダッフオデイル (*Common Daffodil*)、トラムベット、ダッフオデイル (*Trumpet Daffodil*) 又はレント、リッシー (*Tent Lily*) と稱し、副花冠喇叭状をなして突出するが故に、我邦にては喇叭咲水仙と稱す。

此種は、英國其他の原産にして、鱗莖の直径約一寸餘あり。之より發生する葉は、殆ど扁平にして狭く、粉綠色(帶白綠色)を呈し、其數五六箇あり。花莖は葉叢の間より生じ、其高さ約一尺餘にして、其頂に唯一箇の花を着く。花蓋は、長橢圓形にして、通例淡黄色を呈し、一寸餘の長さあり。副花冠は、通例深黄色にして、花蓋と其長さ

を等しくし、且つ其口径約一寸許あり。花期は三四月頃とす。

此種に由來せる喇叭咲水仙は、品種甚だ多し。今其主なるものを擧ぐれば、次の如し。

- (一) 花蓋・副冠共に黄色を呈するもの (Yellow Trumpet)
- エムペロア (*Emperor*) 花蓋淡黄色、副冠黄金色、大輪。
 - グローリー、オブ、ライデン (*Glory of Leyden*) 花蓋鮮黄色、副冠黄金色、甚大輪。
 - ゴールドン、スパー (*Golden Spur*) 花蓋・副冠共に黄金色、早咲。
 - ヘンリー、アーキング (*Henry Irving*) 花蓋廣く副冠大にして、共に黄色。
 - キング、アルフレッド (*King Alfred*) 花蓋・副冠共に深黄色、大輪。
 - マジョーア (*Major*) 花蓋・副冠共に黄金色。
 - マキシムス (*Maximus*) 花蓋・副冠共に深黄色、美大。
 - サー、ワットキン (*Sir Watkin*) 花蓋硫黄色、副冠黄金色、大輪、早咲。
- (二) 花蓋・副冠共に白色を呈するもの (White Trumpet)
- モシヤタス (*Moschatus*) 花蓋・副冠共に白色、矮性、鉢植に適す。

マダム、ド、グラーフ (Madame de Graaf) 花蓋乳白色、副冠白色、大輪、強勢。
ミセス、トムソン (Mrs Thompson) 純白、大輪、早咲。
プリンセス、アイダ (Princess Ida) 乳白色、早咲。

(三) 花蓋白色にして、副冠黄色を呈するもの (Bicolor Trumpet)

エムプレッサ (Empress) 花蓋白色、副冠黄色、美大、強勢。
グランデー (Grande) 花蓋白色、副冠黄色、晚咲。
ホースフィールド (Horsfield) 花蓋白色、副冠黄色、早咲、大輪。
デューク、オブ、ベッドフォード (Duke of Bedford) 花蓋白色、副冠鮮黄色、大輪。
マダム、ブラムプ (Madame Plump) 花蓋白色、副冠黄色、大輪。
シルバー、スパ (Silver Spur) 花蓋殆ど白く、副冠黄色、早咲。
ギクトリア (Victoria) 花蓋乳白色、副冠黄色、芳香あり。
エアデール、バーフェクション (Wardale Perfection) 花蓋白色、副冠黄色、美大。
イエロー、トラムベット (Yellow Trumpet) 花蓋白色、副冠黄色。

(三) ナルシッサス、トリアンドルス (Narcissus triandrus, L.) 此種は、西班牙、葡萄牙

第五十五圖



、ニサツシルナ
スルドンアリト

等の原産にして、鱗莖の直径、多くは五分以下にして、大なるも八九分を超へず。葉は蘭の如く甚だ細くして、一箇の花莖は三四箇の葉の間より生ず。花は四月頃花莖の頂に數箇發生し、其色白くして下方に向つて開き、花蓋は上方に反卷し、其狀恰もシクラメンの花に類するを以て、シクラメン咲水仙 (Cyclamen-flowered Narcissus) の稱あり、變種多し。彼のナルシッサス、シクラミネウス (N. cyclamineus, Baker.) は、花形之に類するも、副冠の長さ花蓋と同長なるを以て、長副冠類に屬するものとす。

(四) ナルシッサス、インコムパラビリス (N. incomparabilis, Mill.) 此種は、星咲水仙 (Star Daffodil) と稱し、中央及び西南歐洲の原産なり。葉は細長扁平にして粉綠色を呈し、花は、花莖の頂に單生し、花蓋は長橢圓形にして略、水平に展開し、其色通例、淡黄色にして、直径二寸内外あり。副花冠は、花蓋の約二分の一許の長さを有し、喇叭狀をなして突出し、通例橙黄色を呈す。尙ほ本種につきては、シェードナーシッサ

スとポエチクスとの交雑によりて成れるものならんとの説をなすものありとす。

ナルシッサス属の研究に努力せるバービッチ(F. W. Burbidge)氏は同属中、シュード、ナーシッサス、バルボコチユム、トリアドルス、タゼッタ、ポエチクス、ジョンクイラの六種を以て水仙の原種となし、之等は相互に交雑すること容易なるを以て、数多の雑種を生じたるものにして、前記六種以外の種は、右六種の天然雑種又は自然變種に過ぎずとなせり。

又此種は、従來雑種の用に供せられたること多く、ナルシッサス、バーリー(N. Barri)、ナルシッサス、バービッチ(N. Burbidge)、ナルシッサス、リージー(N. Leeds)等は、皆本種と他種との交雑によりて生せるものなりと稱せらる。即ち左の如し。

N. Barri = N. Incomparabilis × N. poeticus.

N. Burbidgei = N. Incomparabilis × N. poeticus.

N. Leeds = N. Incomparabilis × N. poculiformis.

以上三雑種中、リージー及びバーリーは、副冠稍、長くして中副冠類に屬すべきも、バービッチの如きは、副冠甚だ短くして、寧ろ短副冠類に屬すべきものとす。今インコムバラビリスに屬する品種の主なるものを擧ぐれば、次の如し。

- アルバート、ビクトル(Albert victor) 花蓋黄白色、副冠深黄色。
 アンニー、バーデン(Annie Baden) 花蓋黄白色、副冠白色に黄赤色を裝ふ。
 オートクラット(Autorat) 花蓋淡黄色、副冠黄色にして展開す。
 ビューティー(Beauty) 花蓋淡黄色、副冠黄色にして縁邊に稍、紅色を帶ぶ。
 ベルティー(Bertie) 花蓋乳白色、副冠黄色にして周縁に稍、紅色を帶ぶ。
 シー、ジャー、バックハウス(C. J. Backhouse) 花蓋黄色、副冠紅色。
 シノシュア(Cynsure) 花蓋淡黄色、副冠黄色にして稍、紅色を帶ぶ。
 エドワード、ハート(Edward Hart) 花蓋、副冠共に深黄色。
 ファイガロー(Figaro) 花蓋黄色、副冠大にして橙色。
 フランク、マイルス(Frank Miles) 花蓋、副冠共に黄色、美大。
 デョーデ、ニコルソン(George Nicholson) 花蓋純白、副冠鮮黄。
 グローリア、ムンデー(Gloria Mundi) 花蓋黄色、扁平、副冠大にして開き、黄赤色を帶ぶ。
 ゴライアス(Goliath) 花蓋大にして白地に黄色の棒縞、副冠大にして黄色。

ルルウォース (Lilworth) 花蓋純白、副冠黄赤色。
 マリー、アンダーソン (Mary Anderson) 花蓋純白、副冠黄赤色。
 プリンセス、マリーリー (Princesses Mary) 花蓋は乳白色を呈し、廣くして展開し、副冠は大にして開き、橙色を帯ぶ。
 クキン、ベッス (Queen Bees) 花蓋乳白色、副冠大にして淡黄色、早咲。
 ステラ (Stella) 花蓋乳白色、副冠黄色。
 サイ、ワットキン (Sir Watkin) 花蓋黄色、副冠橙黄色、美大。
 レッド、スター (Red Star) 花蓋乳白色、副冠紅色を帯ぶ。
 スブレンデンス (Splendens) 花蓋淡黄色、副冠の周縁橙紅色。
 バター、エンド、エッグス (Butter and Eggs) 黄色にして中心深橙色、重瓣、大輪。
 サルフアー、フェニックス (Sulphur phoenix) 純白、中心淡黄色、重瓣。
 オレンジ、フェニックス (Orange phoenix) 白色、中心橙色、重瓣。
 キル、スカーレット (Will Scarlet) 花蓋白色にして副冠は往々赤色を帯ぶ。
 次にリージーに屬する品種の主なるものを擧ぐれば、左の如し。

アマビリス (Amabilis) 花蓋純白、副冠長くして黄白又白。
 ビアトリクス (Patrice) 白色、稍、垂下して開く。
 ダッチェス、オブ、ブラバント (Duchess of Brabant) 花蓋白色、副冠淡黄又白。
 ダッチェス、オブ、エストミンスター (Duchess of Westminster) 花蓋純白、副冠黄色にして長し。
 カザリン、スパーレル (Katherine Spurrell) 花蓋廣くして乳白色、副冠小にして黄色。
 ブライヅ、メード (Bridesmaid) 花蓋純白、副冠白くして微黄色を帯び、裝あり、美大。
 マダム、マグダランド、ド、グラーフ (M. Magdaline de Graaf) 花蓋白くして開展し、其裂片稍、尖り、副冠黄色。通例一花莖に二花を生ず。
 ミセス、ラングトリイ (Mrs. Langtry) 花蓋乳白色、副冠も亦乳白色にして周縁に黄色を帯ぶ。
 クキン、オブ、イングラント (Queen of England) 花蓋白色、副冠亦白色にして大。

ホワイト、レデー (White Lady) 花蓋白色、副冠微黄色を帯ぶ、強勢美大。
 キルヘルミナ (Wilhelmina) 花蓋白色、副冠鮮黄色、美大。

次にパトリに属する品種の主なるものを擧ぐれば、左の如し。

アルバ、トロックス (Albatross) 花蓋白色、副冠黄色。

コンスピキユアス (Conspicuous) 花蓋黄色、副冠往々赤色を帯ぶ。

ドクトル、フェル (Dr. Fell) 花蓋白色、副冠橙赤色。

フローラ、キルソン (Flora Wilson) 花蓋純白、副冠黄色にして周縁紅色を帯ぶ。

モーリス、ギルモラン (Maurice Vilmorin) 花蓋淡黄色、副冠大にして黄赤色、晚

咲。

センセーション (Sensation) 花蓋純白、副冠鮮黄色にして周縁橙赤色を帯ぶ。

又パビジに属する二三の品種を示せば、次の如し。

ファルスタッフ (Falstaff) 花蓋純白、副冠黄色にして周縁橙赤色を帯ぶ。

ジョン、ペーン (John Bain) 花蓋白色、副冠黄色。

エルレンバー (Ellen Barr) 花蓋雪白、副冠黄色に橙赤色を帯ぶ。

(五) ナルシッサス、タゼッタ (Narcissus tazetta, L.) 此種は、ポリアンサス、ナーシッ

サス (Polyanthus Narcissus) 即ち、房咲水仙と稱し、一花莖の上に數花を生ずるの性あり。此種は廣く歐亞に野生するものにして、本邦及び支那にも其自生を見る。此く諸處に分布するを以て、形質に多少の相異なるも、鱗莖の直径約一二寸にして、之より四乃至六箇許の葉を發生し、花莖其間に抽出して、四箇乃至八箇の花を着く。葉は扁平狭長にして粉綠色を呈し、花蓋は白くして、淺き盞狀の副花冠は橙黄色を呈す。花期は三月頃なり。此種の栽培せらるゝものは、花色によりて次の三類に大別せらる。

(一) 花蓋白くして、副花冠黄色又は橙黄色を呈するもの。

パーゼルマン、マジョーア (Bazelman Major) 早咲。

グレート、ブルスト (Groot Voorst) 大輪。

クロロンヌ、ブランシエ (Couronne Blanche)

グロリオサ (Gloriosa)

グラン、モナーク (Grand Monarque)

- グランプリモ (Grand Primo)
 ハー・マジエスチー (Her Majesty) 矮性。
 ルナ (Luna)
 メーストロ (Maestro) 矮性。
 クキン、オブ、ネザーランド (Queen of Netherland)
 シリー、ホワイト (Silly White)
 スターレン、ゲネラル (Staten General)
 ホワイト、パーフェクション (White Perfection)
 (二) 花蓋、副冠共に白色を呈するもの。
 アーリー、スノーフレーキ (Early Snowflake)
 ペーパー、ホワイト (Paper White)
 (三) 花蓋、副花冠共に黄色を呈するもの。
 オーレウス (Aureus)
 アポロ (Apollo)

- ベルトリニ (Bertolini)
 バサースト (Bathurst)
 チャーレス、ヂッケンス (Charles Dickens)
 ロード、カンニング (Lord Canning)
 クブラリス (Cupularis)

本邦及び支那に産する水仙は、此種の變種にして、其學名を *N. tazetta*, *L.* var. *chinensis*, Koem と稱し、花蓋白く、副冠黄色を呈す。又支那水仙 (*Chinese Sacred Lily*) は、水盤中に小石などを入れ、水を注ぎて養ふこと、人の知る所なり。

(六) ナルシッサス、ジヨンクキラ (*Narcissus jonquilla*, *L.*) 此種は、ジヨンクイル (*Jonquill*) と稱し、南歐及びアルゼリアの原産にして、我邦にて長壽花^{キズナセン}と稱するものは之に屬す。此種の葉は、深綠色にして、細長く、稍、半圓柱をなす。花莖に對する葉數は二箇許を常とす。花は鮮黄色にして、芳香に富み、副花冠は淺く蓋狀をなす。一花莖に二乃至六箇の花を生ず。花莖は殆ど圓くして細し。花期は四月頃にして、品種多く、重瓣種もありとす。

●二箇生ずるものはピフロラスと稱する品種なり。

(七)ナルシッサス、ポエチクス(Narcissus poeticus, L.) 此種は、英名をポエッツ、ナーシッサス又はフェザンツ、アイ、ナーシッサス(Poet's Narcissus or Pheasant's Eye Narcissus)と稱し、南歐の原産なり。葉は扁平にして粉綠色を帯び、一花莖に對する葉數は三四箇を常とし、花は花莖の頂に單生す。花蓋は、白色にして、よく開張し、副花冠は甚だ淺くして、其周縁多くは紅色を呈するを以て、我邦に於ては、之を口紅水仙と稱す。花期は四五月頃にして、品種少からず。今此種に屬する二三の品種を擧ぐれば、次の如し。

アルバトロックス(Albatross) 花蓋白く、副花冠橙黄色にして口縁(周縁)橙赤色を呈す。

アルミラ(Amirra) エドワード七世の別名あり。花蓋雪白色を呈し、副花冠は黄色にして口縁赤色を呈す。

ピフロラス(Biflorus) 花蓋白色、副花冠淡黄色、一花莖に二花を生ず。

グローリー(Glory) 花蓋白色にして廣く、副冠の口縁は橙赤色を呈す。強勢。

オルナータス(Ornatus) 花蓋は、純白にして廣く、副冠の口縁は紅色なり。早咲

にして芳香あり。

グランデフロルス(Grandiflorus) 花蓋は、オルナータスよりも大にして、副

冠は著しく赤色を帯ぶ。

アルバ、ブレナ、オドラタ(Alba plena odorata) 純白の八重咲にして芳香あり、晚咲とす。

此種は、花莖を抽出するも、開花せざることあり。此弊を防ぐには、年々球根を新しき地に移植するを可とす。但し、其地は、排水よく且つ肥沃なる壤土をよしとす。

前述の諸種には、單瓣の外、更に重瓣のものあり。即ちダブル、ヴァンシヨン(Double Van Sion)は、重瓣の喇叭咲水仙にして、ダブル、ドゥブロン(Doubleloon)は、重瓣の星咲水仙に屬す。其他長壽花、口紅水仙等にも亦重瓣のものあり。

栽培法

水仙を栽培するには、球根(鱗莖)を植付くるを常とし、播種は新品種育成の目的を以て行ふに過ぎず。水仙の球根を植付くる期節は、地方によりて異なるも、通例九十月頃を適當とし、其植付の深さは、球根の大小、土質、品種などによりて多少異なるも、約三寸許と見ば大差なかるべく、球根間の距離は四五寸許を常

とす。斯くて球根を植付くるには、深さ六七寸の穴を掘り、其穴の底に、良く腐熟せる堆肥并に油粕灰などを入れ、其上に土を被ふて球根を据へ、以て球根の肥料に接觸することなからしめたる後、土を被ふて穴を埋むべし。

水仙も亦、クロカスの如く、寒氣に堪ふる力強きを以て、通例防寒の準備を要せざるも、寒氣烈しき地方にては、球根を植付けたる上に、葉落葉などを被ひ置くことあり。肥料としては、前述の如く、球根植付の際、植穴の底に、基肥を施す外、補肥として、油粕を水に投じて腐熟せしめたる上澄などを稀釋して、開花前一二回施用するを可とす。濃厚なる液肥の球根に觸るゝが如きは、却て害をなすものなれば注意せざるべからず。

水仙は、花を賞したる後は、花莖のまゝ切り去りて、結實せしめざるやうにすべく、やがて莖葉の枯凋するを見れば、球根を掘り採りて、乾燥貯藏すべし。但し球根を其儘土中に残し置くも不可なし。

第三章 シクラメン

性状

シクラメン (Cyclamen) は、櫻草科シクラメン属の球根植物にして、英名をソウブレッド (Sowbread) 邦名をブタノマンデウと稱す。學名のシクラメンは、希臘語のキクリコス (Kyklikos) 即ち圓形又は回轉に由來するものにして、此植物の花莖は、往々開花後、螺旋狀に撚曲し、且つ其塊莖及び葉の通例圓形なるによりて、



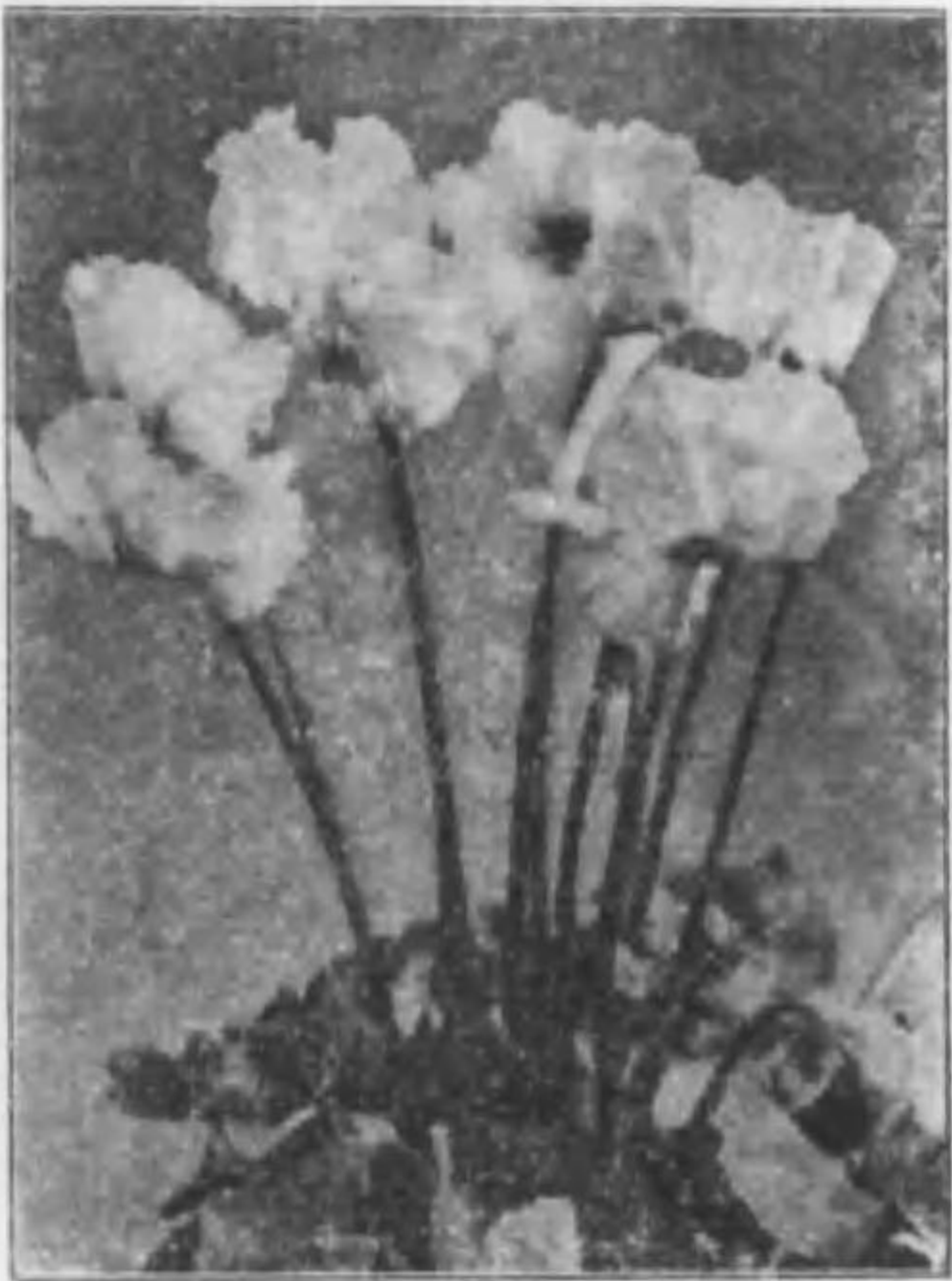
圖六十五第

シクラメン

此く命名せられたるものなりとす。又英名ソウブレッドは、豚麩麩の義にして、蓋し此植物の塊莖は、シシリ並に地中海沿岸地方に於て、野猪の爲に貪食せらるるに基くと云ふ。而して、邦名ブタノマンデウは、英名ソウブレッドに基因せるものならん。

シクラメンは、南歐羅巴・北亞弗利加西

圖七十五第



シクラメン (のしるあと皺) 縁に線と齒と

● 裂片の縁邊に褶皺と齒のあり。

亞細亞等に野生し、其塊莖は大抵扁圓多肉にして、球莖の如き觀あり。葉は、多く心臟圓形をなして、葉柄長く、花莖は、細長にして、其頂に唯一箇の花を着生す。花は垂下して開き、其色には紅・白・紫等あり。花莖は、往々開花後螺旋狀に燃曲して、果實を地面に壓しつゝるが如き傾向あり。花冠は、深く五裂して、筒狀部淺く、其各裂片は上方に反曲し、萼亦五裂す。雄蕊は五箇ありて、花冠筒狀部の基部に着生し、子房は上位、球狀にして、種子多し。

原種及び品種

シクラメン屬には、十數種あり。之を區別するに當りて注意すべき要件の二三を示せば、次の如し。

- (イ) 塊莖の形狀並に發根の状態。
- (ロ) 葉の形狀・色彩。

(ハ) 花の色彩。

(ニ) 開花期。

(ホ) 葉は花と同時に發生するや否や。

(ヘ) 耐寒性の強弱等。

シクラメンは、開花期によりて春咲種と秋咲種との二類に大別することを得べし。今此兩類に屬する主なる種及び品種を擧ぐれば、次の如し

- (一) シクラメン、アトキンシー (C. Atkinsi, Hort.) 此種は、ベインスキックのアトキンス氏がシクラメン、イベリクム (C. Ibericum, Goldie) と稱するコーカサス原産の春咲シクラメンを播種して育成したるものなりと云ふ。塊莖は球狀をなし、根は其底部より叢生す。葉は花と同時に顯はれ、其形卵圓にして白斑あり。花期は冬より早春の頃とす。耐寒性甚だ強し。此種に屬する品種には、左の數種あり。
- アルBUM (Album) 白色(底に紫色の斑點あり)。
- ロゼウム (Roseum) 薔薇色。
- ルブルム (Rubrum) 紅色(底に紫色あり)。

(二) シクラメン・コーム (*C. Coum*, Mill.) 此種は、コーカサス・小亞細亞・希臘・土耳其等の産にして、塊莖は扁圓形をなし、根は其底部より叢生す。葉は濃綠色にして、白斑を有することなきも、裏面紫色を呈し、葉柄短きを常とす。花は、他種よりも小にして、早春葉と同時に顯はるるを常とす。花色は深紅色にして、花冠裂片の基部に、更に濃色の斑點あるも、品種によりて色彩を異にす。耐寒性强し。

アルBUM (Album) 白色。

カーネUM (Carnaeum) 薔薇色。

(三) シクラメン・ペルシクム (*C. persicum*, Mill.) 此種は、一名シクラメン・ラチフォリウム (*C. latifolium*, Sibth. and Sm.) と稱し、希臘・小亞細亞等に野生し、特にパレスタインに多しと云ふ。耐寒性弱し。塊莖は、大にして扁圓形をなし、其下側の處々より根を發生す。葉は、卵圓心臟形にして、周縁に鋸齒あり、且つ葉の表面に白色の斑紋を有す。花は早春葉と同時に顯はれ、花形の大なること、他種に冠たり。而して、其色彩は白色なるも、花冠裂片の基部に紅斑あるを常とす。但し、品種によりて、花の色彩一ならざること、左に示すが如し。

アルBUM (Album) 純白、花・葉共に美大。

ビコロール (Bicolor) 白色、底部深紅色、大輪。

ローゼUM (Roseum) 薔薇色、美。

ルブルム (Rubrum) 深紅色。

サルモネUM (Salmonaeum) 帶黄淡紅色、甚美。

(四) シクラメン・アフリカヌム (*C. africanum*, Boiss. and Reut.) 此種は、アルゼリア・チユニス等の原産なり。塊莖は大にして、處々より根を發生す。葉は、大なる心臟圓形にして、葉面に白斑を有し、裏面紫色を帯び、葉縁に鋸齒あり。葉柄長し。花は、十月頃、葉に先ちて顯はれ、其色は、濃淡種々なる薔薇色にして、花冠裂片の基部に紫色の斑點を有す。

(五) シクラメン・ユーロペウム (*C. europaeum*, L.) 此種は、中央及び南部歐羅巴の山地に自生す。塊莖は、扁圓にして、其下半部處々より根を發生す。葉は、心臟形をなし、表面綠色にして、白斑を有し、裏面紫色を帯び、花と同時に發生す。花は、夏秋の間に開き、紫赤色にして、芳香あり。耐寒性强し。

●砂質の礫林などに自生す。

(六) シクラメン、ヘデレフォリウム (C. Hederifolium, Ait.) 此種は、一名シクラメン、ネアポリタヌム (C. neapolitanum, Ten.) と稱し、南歐の原産なり。塊莖は大にして、根は殆ど其全面より發生す。葉は心臟形にして、表面に白斑を有し、裏面紫色を帯ぶ。花は夏秋の間に開き、葉に先だちて顯はる。花は稍、芳香を有し、紅色又は白色を呈するも、花冠裂片の基部に紫色の斑點あり、耐寒性强し。

以上の諸種中、廣く栽培せらるゝものは、シクラメン、ベルシクムなり。此種は最も美大の花を開くと雖も、耐寒性弱きを以て、鉢植となし、冬より春に至るの間、温室にて開花せしむるを常とす。

栽培法 堪寒性强きシクラメンは、排水佳良の蔭地に植付け、其儘となし置き、花葉を賞するに宜しく、特に樹下などに植付け置くときは、夏は樹木の枝葉によりて強光を遮ぎり、冬は落葉によりて防寒するを得るの便あり。又此植物は、一般に砂質又は石灰質の土壤に自生し、其塊莖を地上に露出するの性あるがゆゑに、之が植付に用ゆる土壤は、排水よき壤土に、腐葉土並に多少の石灰砂を混和したるものを可とし、且つ塊莖の上部は地上に露出するやう、淺く植付くべし。但し、

シクラメン、ユーロペウムのみは、稍、深く埋む。植付の時期は、五六月より十一月頃までの間にして、要は開花期の春なると秋なるとによりて、植付に早晚の差あるものとす。何れにしても、冬の初に至らば、古葉又は良く腐熟せる堆肥などを撒布して、防寒の料となし、兼ねて肥料の用に供するをよしとす。

堪寒性强きシクラメンは、又其種子の成熟するを待つて、肥沃の砂質土を盛れる鉢に播下し、加温装置なきフレームなどに入れ置くべし。然るときは容易に發芽するものにして、母株の下に、自然に落下せる種子の往々發芽することは、吾人の屢、目撃する所なり。已にして種子發芽し、苗の移植し得るに至れば、丁寧に一本づつ、小鉢に移植して培養し、其漸く長するを待つて、露地に植付くべし。尙ほ、塊莖を分割して、各片に少くとも一芽を附して、數片となし、斷面に灰などを塗りて植付くるも亦、之が蕃殖の一法とす。其他、葉の下部に球根の小片を附して切り取りたる後、挿して蕃殖することもありとす。

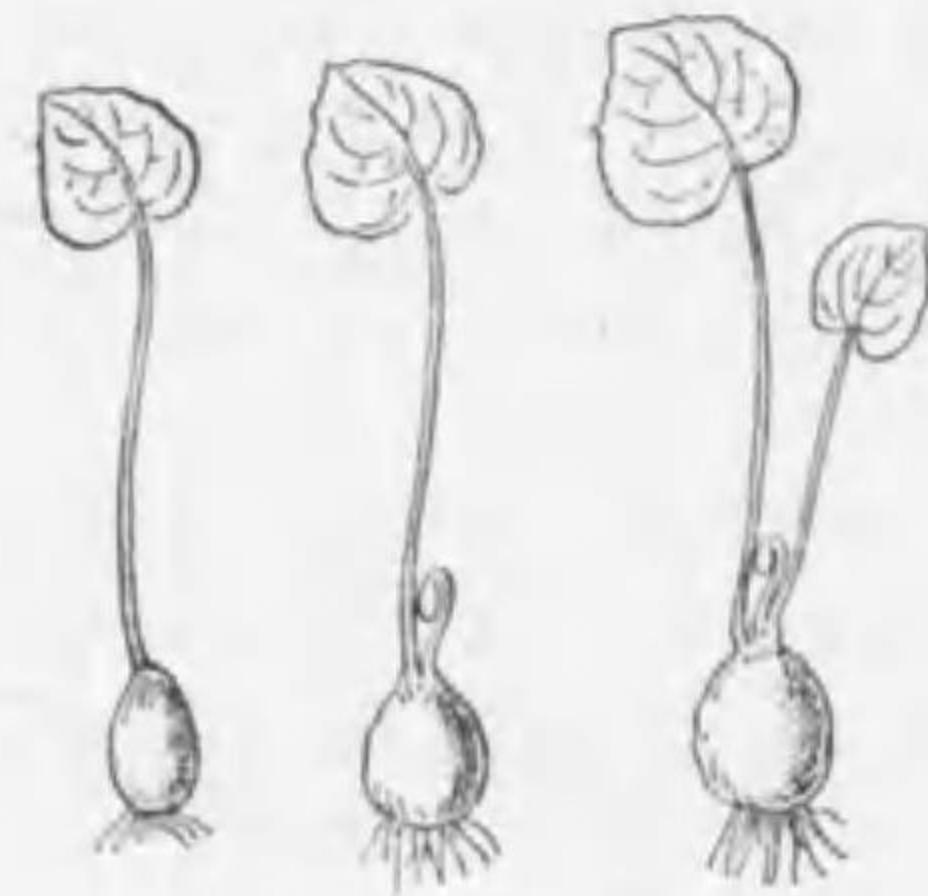
次にシクラメン、ベルシクムの栽培法につきて述べん。此植物は、元來、球根類なるも、近年は、播種法によりて苗を育成するを常とす。是れ、近年の改良種は、播種後

●種子を軟にし、発芽作用を催さしむるには、かかる低温にて足れり。

一年許(從來は十五ヶ月乃至十八ヶ月を要せり)にして、開花せしめ得るを以てなり。されど、亦往々、同一塊莖を數年間、連續栽培して、花を開かしむることあり。此植物は、獨り花の美麗なるのみならず、葉も亦觀賞に値するを以て、冬春の間、温室其他の裝飾として貴重せらるゝものなり。播種するには、先づ平鉢又は平箱などを取り、其底に鉢の破片などを布き並べて排水を圖りたる後、其上に、排水よき肥沃の壤土に、略、等量の腐葉土(よく腐熟せるもの)と少量の川砂とを混和して、篩に通したるものを、七八分目に盛り、其表面を壓へつゝ均らして、播種す。播種し終れば、其種子の上に、甚だ薄く、前の篩土を被ひ、細目の如露にて、徐に灌水したる後、硝子板、新聞紙などを被ふて、低温の温室(又は木框)内に安置す。元來、シクラメン、ベルシクムの種子は、發芽甚だ不規則にして、發芽の早きものと遅きものとの間に數週間を算すべし。されば、發芽遅しとて、妄りに棄つべきにあらず。尙ほシクラメンは、取播を可とするも、開花期を種々にせんがため、十月十一月頃に播種するもの、一月二月頃に播種するもの等あり。十月十一月頃に播種せるものは、先づ最低温華氏四十五度許の木框に入れ、二三週間の後、華氏五十五度許の温室に移して發芽せ

●冬春の候にありては、播種せる鉢又は箱をば、温室の天井の硝子に近接せる場所に移して、充分に日光をを受けしむるの要あり。

●第五十八圖



生實のンメラクシ

しむべく、一二月頃に播種するものは、直に華氏六十度許の温室に入れ置くべし。而して、夏季取播となすものは、冷涼なる木框又は温室に入れ置き、日光の直射を防ぐこと肝要なり。

已にして、嫩葉地上に發現せば、硝子板、新聞紙などを除きて、漸次日光を受けしめ、以て苗をして強健なる發育を遂げしむべし。其他、灌水に注意して、土壤及び空氣の乾燥に過ぐるることなからしむべく、空氣乾燥に失せば、赤壁蝨アカカキの害にかゝり易し。又換氣に注意し、温暖なる日和には、内外空氣の交換を圖るべし。但し、之がために、寒風に觸れしむるが如きは、最も忌むべきこととす。やがて、苗漸く長じて、地下莖稍、球狀をなし、二枚の子葉を發生するに至れば、苗を掘り取りて、徑二寸の鉢に一本づゝ植付くるか、又は徑四五寸の鉢に數本を植付くべし。此際、鉢に入るゝ所の土壤は、前きに播種の際に用ひたるものと等しかるべく、且つ其植付は、淺くして、塊莖の頂は地面と等

●強光を忌む。

しきを可とす。爾後、灌水・日照・換氣等に注意するときには、苗は漸く成長して、根は鉢を充たすに至るを以て、此に於て、更に徑三寸の鉢に一本づゝ移し、遂に徑五寸許の鉢に移して開花せしむるものとす。此最後の移植の際、鉢内に入るゝ所の土壤は、前きに用ひたるものと同一にて不可なきも、川砂の量を少くして、腐熟せる堆肥の少量を混和し、且つ過燐酸石灰の微量を撒布攪拌したるものを用ふべく、植付の深さは、一二回目よりも更に浅きを要し、球の三分一許を露出せしむるを可とす。尙ほ、すべて移植したる當時は、薄暗くするを要するも、苗の勢力恢復するに至れば、日光の射照をよくし、又灌水・換氣に注意すべし。但し、夏間の強き日光に直射せしむることは、甚だ忌むべきことなるを以て、夏季は屋根硝子の上に簾を被ふべく、且つ鉢を安置する場處には、小石・粗砂などを布きて、鉢底を其中に埋め、小石又は粗砂には、時々灌水して、不斷濕潤ならしめ置くを可とす。而して、室内の鬱蒸を避くるがため、日中窓を開放することは、夏季の管理として甚だ肝要のこととす。蓋し、夏間の蒸熱は、塊莖の腐敗を招き易きものにして、シクラメンの栽培上、最も困難とするは、實に此點に存するを以てなり。已にして晩秋に至れば、倒置せ

●球大なるも、古きものは花の數少く且つ腐敗し易ければ、若き球を用ふる方かなり。

る鉢の上に、シクラメンの鉢を載せ、以て成るべく天井の硝子板に接近せしめて、日射をよくすることは、葉柄を強剛ならしむるに肝要のこととす。斯くして、秋播種するときには、翌年の冬より春に互りて開花するものにして、開花數週前より、時々薄き液肥を施すときは、美大の花を開かしむるの効あり。又冬間開花中は、夜間四十五度、晝間五十五度位の温度たらしめ、高温を避くるときは、數週間開花せしむるを得べし。

●又同一塊莖(球)を利用して、再三開花せしめんとせば、落花後、葉漸く枯凋するがゆゑに、其儘となし置きて休眠せしむべし。即ち、シクラメンの鉢を取りて、寒害なき範圍に於て冷涼なるフレーム内に保存するか、又は鉢の上に椰子の果實の纖維(Coconut Fibre)などを厚く被ふたる後、北方牆壁の下などに置くべし。斯くて、夏季は早害にかゝらぬ程度に於て灌水し、已にして、新芽發生せば、此に於て、古き土壤を除き、新しき培養土を以て植付を行ふべく、其培養土は、前に五寸鉢に入れたるものと同一なりとす。爾後に於ける灌水・換氣・液肥施用等の手入は、前きに述べたる所と異なることなし。

第四章 ムスカリ

ムスカリ (*Muscari*) は百合科の球根植物にして、英名をグレープ、ヒヤシンス (*Grape Hyacinth*) と稱し、三四月頃、花莖を抽出して、之に數多の小花を着く。其色青又は白を常とす。矮性可憐の花草なるを以て、花壇の縁植となし、又は花壇内に密植して模様を顯はすなどに適し、又岩間草地などに植うるに宜しく、鉢植となして、温室、フレームなどに入れ置くときは、冬春の間に觀賞するを得べし。我邦にては、近年多少之を栽培するも、英國にては、既に三百餘年前より、之が栽培をなしたりと云ふ。

性狀・原種及び品種

ムスカリとは、拉丁語の *Musculus* 即ち麝香に因める名稱にして、蓋し、此屬の植物には、往々花に芳香を有するものあるを以て、此く命名せられたるものなるが如し。

ムスカリ屬は、約四十五種を有し、其原産地は、歐洲の地中海沿岸地、アルゼリア、小亞細亞等なり。此屬の植物は、一般に堪寒性強く、鱗莖を有し、之より發生する葉

圖九十五第



リカスム

は狭長なり。花莖は葉叢の間に顯はれ、其長さ四五寸乃至八九寸にして、小形の壺狀花は、總狀をなして、之に着生す。花被は壺狀をなすも、其口部は通例六箇に分裂して、三花瓣・三萼片の癒着せるを示し、六雄蕊・一雌蕊あるも、花外より見ること能はざるを常とす。子房は三室より成り、種子は殆ど球形をなし、黒くして光澤あり。本屬中、最も主要なる種は、次の如し。

(一) ムスカリ、ボトリオイデス (*M. botryoides*, Mill.) 此種は、英名をコムモン、グレープ、ヒヤシンス (*Common Grape Hyacinth*) 邦名をルリムスカリと稱し、歐洲の原産にして、六七寸餘の高さに伸長す。葉は狭長肉質にして、並行脈を有す。花は壺狀をなして、香氣なく、十二箇乃至二十箇許總狀に着生し、其狀宛かも葡萄の房に彷彿たるものあり。花は三四月頃に開き、深青色にして、口部白色を呈するを常とするも、白色の花、淡青色の花等を開くものあり。今其品種一二を擧ぐれば、左の如し。

ボトリオイデス、アルバム (Botryoides album) 純白。
 ボトリオイデス、カンデダム (Botryoides candidum) 白色に薔薇色を装ふ。
 ボトリオイデス、パリダム (Botryoides pallidum) 淡青色。

(二) **ムスカリ、コニカム** (M. conicum, Baker.) 此種は、トレビゾンド (Trebizond) の産にして、花は三四月頃に開き、前種よりも美なる青色を呈し、佳香あり。切花に適す。英名ヘヴンリー、ブルー (Heavenly Blue) と稱するものは、此種に屬す。

(三) **ムスカリ、ラセモサム** (Muscari racemosum, Mill.) 此種は、地中海沿岸地及びコーカサス地方の原産にして、葉は殆ど圓筒形をなし、五六寸の長さあり。花莖は葉叢の間に生じ、四寸餘の長さを有す。花は暗青色なるを以て、**クロムスカリ**と稱す。

(四) **ムスカリ、ヘルドライヒ** (M. Heldreichii, Boiss.) 此種は、ギリキ、グレート、ピヤシンス (Greek Grape Hyacinth) と稱し、希臘の原産にして、花は青色を呈し、花形ボトリオイデスに類するも、之よりも遙に大にして、且つ開花期較、遅きの差あり。

(五) **ムスカリ、モシャタム** (M. moschatum, Willd.) 此種は、英名をマスク、ピヤシンス (Musk Hyacinth) と稱し、小亞細亞の原産にして、芳香最も強し。花は小にして、紫色を

● 上部の花は下部のものとは異なりて結實せず。

呈するも、後縁黄色に變ず。

(六) **ムスカリ、コモサム** (M. comosum, Mill.) 此種は、南歐の原産にして、長き疎なる總狀花序をなし、花色は上部と下部とによりて異なり、即ち前者は青色又は紫色を呈するも、後者はオリヅ色にして、褐色を帯ぶ。此種の變種たるモンストロサム (var. monstrosum, Hort.) は、花の奇形なるを以て賞せらる。モンストロサムは、英名をフェザード、ピヤシンス (Feathered Hyacinth) と稱し、一尺内外の高さに達す。葉は狭長にして並行脈あり。花は細裂して絲狀となり、撚曲して羽毛狀をなし、紫青色を呈す。

第十六圖



ムサーロトスンモ

栽培法

ムスカリは、甚だ強健なる花草にして、殆ど奈何なる土質にても栽培するを得べし。されど、其最も好む所は、排水佳良にして、肥沃なる砂質壤土なりとす。此花草は、又位置を選ぶこと少きがゆゑに、花壇は勿論、岩間、草地等、種々の場處

に植付くるに宜しく、且つ、一旦球根を植付けたる後は、二三年間掘り取ることもなく、其儘に放置して可なり。蕃殖の方法としては、播種するも可なりと雖も、二三年毎に、秋季球根を掘り採る際に、母球に着生する子球を分離して、植付くるを便とす。球根の植付は、九十月頃を常とす。

此花草を鉢植となすには、他の球根に於けると同様の土壌を用ひ、九十月頃に球根を植付け、温室又はフリュームなどに入れ置くべし。然るときは、冬春の間、其開花を賞するを得べし。

第五章 オキザリス

オキザリス (*Oxalis*) は、酢漿草科オキザリス属の植物にして、英名をウッド・ソール (Wood Sorrel) と稱し、花を賞するがために栽培する一種のカタバミなるを以て、花カタバミの稱あり。花色は紅、紫、白、黄等にして、花期亦一ならざるも、球根性のものは、多く秋鉢植となし、温室に入れて、冬春の間に其花を賞するを得べし。

性状及び原種 オキザリス属には二百餘種あるも、多くは南亞弗利加及び南亞米利加の原産にして、少數の矮性灌木を除けば、他は皆草本に屬し、且つ多くは多年生にして、鱗莖、塊莖の如き地下莖を有す。葉は通例三裂し、花

第十六圖



オキザリス

は萼花冠共に五箇ありて、日照時間のみ、よく開花す。雄蓋は十箇ありて、五箇は長く、五箇は短し。又雌蓋は、柱頭五箇に分れ、子房五室より成る。果實の熟するや、多くは強く裂開して、種子を散ずるの性あり。

オキザリス屬の草本中、園藝上最も主要なるもの數種を擧ぐれば、大略次の如し。

(一) オキザリス、バリアピリス (*O. variabilis*, Jacq.) 此種は、南亞弗利加の原産にして、鱗莖は多く紡錘狀を呈す。葉は三小葉より成り、大形且つ稍、多肉にして、花は、花莖の頂に、單生す。花形大にして紫赤白等、種々の色彩を有す。オキザリス、ブルブレア (*O. purpurea*, Jacq.) は之と同種なるべし。

(二) オキザリス、テトラファイラ (*O. tetraphylla*, Cav.) 此種は、一名オキザリス、デッペイ (*O. Deppelii*, Tode.) と稱し、メキシコの原産にして、鱗莖卵圓形をなす。葉は、四箇、罕に三箇のことあり、の小葉より成り、之に紫色の斑紋あるを以て、モンカタバミと稱す。花は、花莖の頂に數多簇生し、紅色又は紫色を呈す。此種の根部は、食用に供せらるることあるを以て、オキザリス、エスキュレンタ (*O. esculenta*) とも稱せらる。

(三) オキザリス、ラシアンドラ (*O. lasiandra*, Zucc.) 此種も亦、前種と等しく、メキシコの原産にして、鱗莖の形狀亦前種に類するも、葉は、所謂車葉と稱して、五乃至十箇の小葉、放射狀に排列するを異なりとす。花は花莖の頂に數多簇生し、紅色を呈す。

(四) オキザリス、フロリブندا (*O. floribunda*, Tchin.) 此種は、一名オキザリス、マルチアナ (*O. martiana*, Zucc.) と稱し、南米の原産にして、鱗莖は多數の小葉より成り、葉は三箇の小葉より成る。花は莖の頂に數多簇生し、薔薇色又は白色を呈す。

(五) オキザリス、セルヌア (*O. cernua*, Thunb.) 此種は、南亞弗利加の原産にして、鱗莖は稍、紡錘狀をなし、葉は三箇の小葉より成り、花は、黄色の大輪にして、花莖の頂に數多簇生す。

(六) オキザリス、ボキイ (*O. Bowiei*, Herbert.) 此種も亦、前種と等しく、南亞弗利加の原産にして、鱗莖の形狀亦前種に類す。葉は稍、心臟形をなせる三箇の小葉より成り、大形肉質にして、深綠色を呈し、葉裏に多少の絨毛あり。花は大にして、莖頭に數多簇生し、薔薇色を呈す。

(七) オキザリス、ヒルタ (*O. hirta*, L.) 此種は、一名オキザリス、ロザセア (*O. rosea*, Jacq.) と稱し、南亞弗利加の原産にして、鱗莖の形状前兩種に類す。葉は殆ど無柄にして、三箇の篋状をなせる狭長なる小葉より成りて、莖上に互生す。花は單生にして紅色を呈す。

(八) オキザリス、エルシコロ (*O. versicolor*) 此種は、一名オキザリス、エロンガタ (*O. elongata*, Jacq.) と稱し、南亞弗利加の原産なり。葉及び花梗は莖頭に簇生し、葉は三箇の線状楔形をなせる小葉より成り、葉柄長きを常とし、花は白地紅覆輪にして、花梗の頂に單生す。

栽培法

オキザリスは、矮性にして、よく繁茂し、紅、白、紫、黄等の美花を多く開くのみならず、葉も亦愛すべきものなるを以て、鉢植となして觀賞するに適するのみならず、花壇の寄植、縁植等となすに宜し。之れが蕃殖の法は、子球を分離栽植するを常とするも、種子によりて亦蕃殖するを得べし。土質は、排水よき肥沃の砂質壤土を以て第一とするも、其他の土質にても亦、甚しく粘濕ならざる限りは、皆以て之が栽培をなすを得べく、位置としては日當りよき地を選ぶを可とす。植付の

期節は、種類によりて多少異なるも、冬春の候、温室又はフレームにて開花せしめんとするものは、秋に鉢植となすべく、又春、植付けて初夏に開花せしむるもあれば、秋に開花せしむべく植付くることもありとす。植付は深きに失せざるやう注意すべく、成長中は灌水に注意し、且つ數回液肥を施すときは、美花を多く開かしむるを得べし。其他の管理は、一般の球根類に準すべく、栽培極めて容易なる花卉なりとす。

第六章 プロヂエーア

性状 プロヂエーア (*Brodiaea*) は、百合科プロヂエーア属の草本植物にして、此属には耐冬性及び半耐冬性の球根植物(鱗莖又は球莖を有する植物)約三十種を包含す。此属は、其葉細長く花莖は葉叢の間に抽出して、其頂に花を簇生するを常とす。但し、プロヂエーア、ユニフローラ (*Brodiaea uniflora*, Baker) などの如く、花莖の頂に一輪の花を生ずるものあり。花蓋は、六片より成り、漏斗状又は鐘状をなすも、基部狭く上部展開す。雄蕊は六箇あるも、三箇退化して鱗状をなすものあり。往時トリテレーア (*Triteleia*)・ヘスベロコルダム (*Hesperoocordum*)・カルリプローラ (*Calliprona*) 等の名稱の下に分離せる諸属も、今は皆プロヂエーア属の中に包含せらるゝに至れり。

プロヂエーアは、多くは北米カリフォルニア州の原産なるも、ブラジル、アルゼンチン等、南米地方の原産にかゝるものあり。就中、本邦に於て、近年稍、多く栽培せらるゝ。プロヂエーア、ユニフローラは、アルゼンチン國ベノスアイレス附近の原

イキシア

フリージア

プロヂエーア、
ユニフローラ

オキザリス



アガリス

アガリス
アガリス

アガリス

アガリス

産なりとす。

プロチエーア、ユニフローラは、一名トリテレーア、ユニフローラ (*Triteleia uniflora*, Linell.) と稱し、英名をスプリング、スターフラワー (*Spring Starflower*) 又はトリプレット、トリリー (*Triplet Lily*) と云ふ。葉は、地下の鱗莖より數箇發生し、其形稍、菫に似たるを以て**ハナニラ**の稱あり。花莖は、春季葉叢の間に抽出し、花莖の數は一定せず、其頂に唯一箇の花を生ず。花蓋は六片より成り、星形をなして開くも、其基部は狹窄して筒狀をなす。花は殆ど白色を呈するも、微に紫色を帯び、特に筒狀部は著しく紫褐色を呈するを常とす。雄蕊は六箇ありて、筒狀部の内方に着生し、其中三箇は他の三箇より較、長し。

栽培法

ハナニラは、他の多くの球根類よりも、栽培し易きものなり。性向陽の地を好み、排水佳良にして肥沃なる輕土は、最もよく之が栽培に適す。蕃殖の方法としては、子球をば、母球より分離して、植付くるを便とするも、播種法によるも亦可なり。播種するには、砂質土に於てするを可とし、種子の熟するを待つて、直に之を行ふべく、播種後三四年にして、始めて開花するを常とす。

球根植付の時期は、九十月頃を常とするも、早春に於てするも可なり。而して、一旦球根を植付けたる後は、數年間其儘となし置き、子球の増殖によりて過密の状態となるを待つて、分離栽植するを可とす。其間の手入としては、時々雜草を除き、且つ秋季腐熟せる堆肥を地表に撒布し置くを以て足れりとす。但し、後作の關係上、掘採るの必要あるときは、落花後に於て掘採り、乾燥して植付期まで貯ふべきこと、他の球根類に於けると異なるなし。又此花卉は、鉢植となして、フレイム又は温室に入れ置くときは、冬春の間に觀賞するを得べし。尙ほ、地植としては、花壇の外、草地、樹下など皆不可なし。

第七章 ヒヤシンス

ヒヤシンス (Hyacinth) は、百合科の球根植物にして、早春葉叢の間より花莖を抽出し、之に數多の花を着く。花の色には紫、赤、白、黄等種々あり。又一重咲と八重咲との別あり。花壇に栽培する外、鉢植となして觀賞するに適し、又水栽培を行ふに可なり。近年最も廣く栽培せらるゝ球根植物の一なり。

ヒヤシンスは、往々和蘭ヒヤシンス (Dutch Hyacinth) と稱せらる。是れ、和蘭の原産なるがためにあらずして、同國に於て商品として多く栽培せられ、外國に輸出すること盛なるによるなり。同國ライデンよりハーレムに至る間の土地は、特にヒヤシンスの栽培に宜しく、即ち之等地方は、砂質の土壤よりなるも、其下層には泥炭層ありて多くの水を含み、之をば上層の砂質土に供給して、其濕度を適當ならしむと云ふ。

性状・原種 ヒヤシンスは、ヒヤシントス (Hyacinthus) 屬の多年生植物にして、地下に鱗莖を有し、細長の葉數箇之より發生し、花莖其間に抽出す。花は、總狀花序を

圖二十六第



ヒヤシンス

又咽喉部に着生し、花柱は短し。

ヒヤシンス屬には三十餘種ありて、南亞弗利加・地中海沿岸地・東洋等に自生するも、現今普通に栽培せらるるヒヤシンス即ち和蘭ヒヤシンスは、ヒヤシンス、オリエンタリス (*Hyacinthus orientalis*, L.) に由来するものなり。

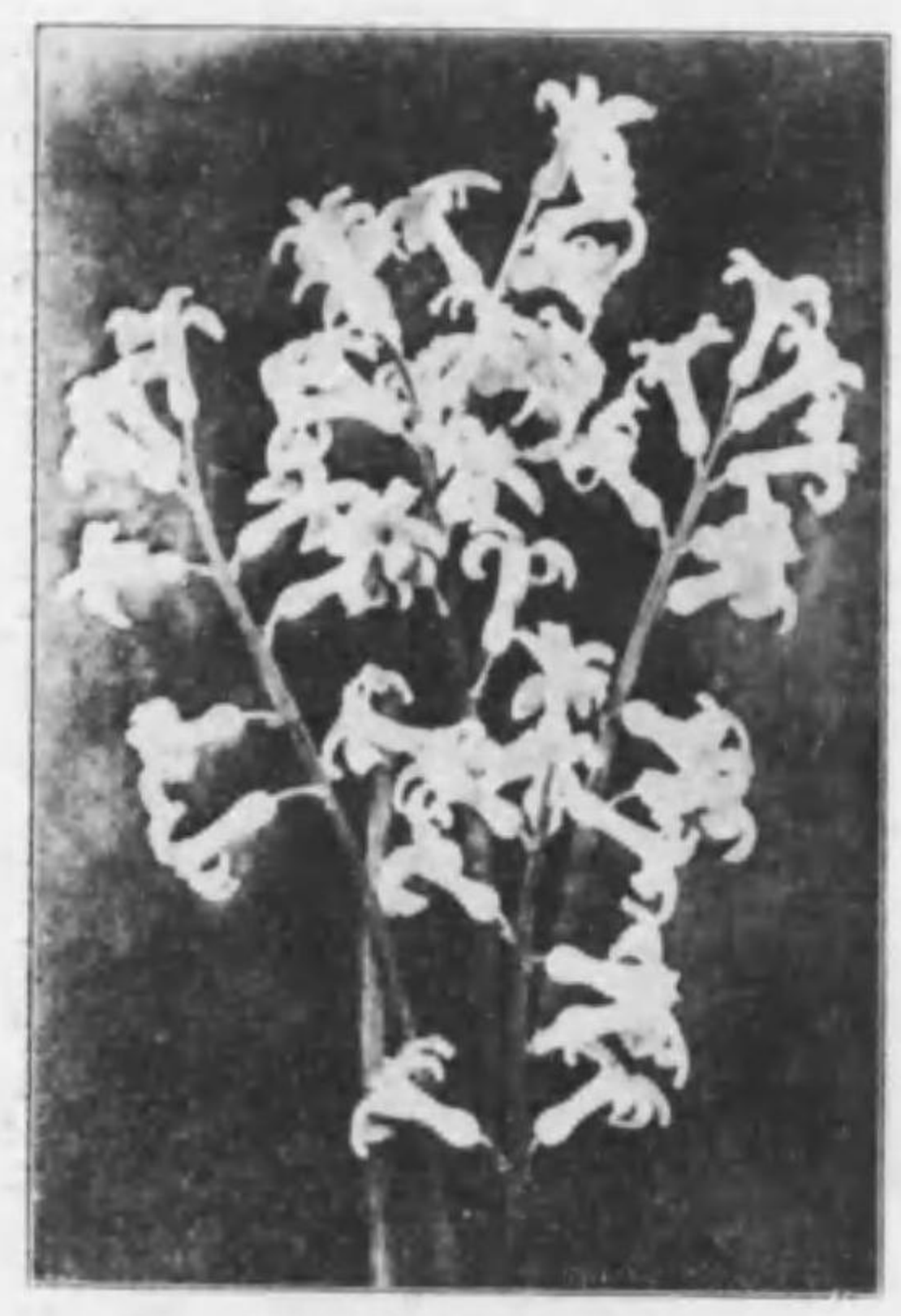
(一) ヒヤシンス、オリエンタリス (*H. orientalis*, L.) は、シリヤ・小亞細亞・希臘・ダルマナヤ等に野生するものにして、四乃至八箇の細長き緑葉は鱗莖より生じ、花莖の

三二

なして、花莖の上方に着生す。花蓋は殆ど同大の六片より成り、漏斗状又は鐘状をなす。花蓋の基部は合して筒状をなし、其分裂せる部分は、筒状部よりも短きか、又は之よりも著しく長からざるを常とす。又雄蕊は六箇ありて、花筒

● 開花を促進
してクリス
マスの用に
供す。

圖三十六第



スニシヤヒ

長さは一尺内外にして、之に青色の花を總狀に着生す。花蓋の分裂部は筒状部と同長にして、筒状部は通例膨大す。此種に由来する品種には、青色の外、赤・黄・白等、種の花色あり、又八重咲もあること、前きに述べたるが如し。花期は四月頃とす。

此種の變種に、アルブルス (*H. orientalis*, L. var. *albulus*, Baker) と稱するものあり。此

變種は、南フランスの原産にして、園藝家の間にローマン・ヒヤシンス (*Bourman Hyacinth*) と稱せらる。花は白色にして、其形小に、且つ花莖に着生する狀、亦較・疎なるも、花期早きを以て賞せらる。尙ほ、ローマン・ヒヤシンスには青色の花を開くものあり、花期は白色のものより稍、遅し。

右の外、ヒヤシンス、アメシスチヌス (*H. anecllystinus*, L.)、ヒヤシンス、アズレウス (*H. azureus*, Baker) 等も亦、稀に栽培せらる。

三二

(二) ヒヤシンタス、アメシスチヌス (H. amethystinus, L.) 此種は、西班牙ヒヤシンタス (Spanish Hyacinth) と稱せらるゝものにして、西班牙、佛蘭西等の原産なり。花は青色鐘状の小花にして、垂下して開き、花莖は其高さ多く四五寸餘にして、四乃至十二箇の花、總状をなして、之に着生す。其變種に、白色の花を開くものあり。花期は四月頃とす。

(三) ヒヤシンタス、アツレウス (H. azureus, Baker) 此種は、地中海沿岸地又は小亞細亞地方の原産なりと稱せらる。花は、青色にして鐘状をなし、垂下して開くこと

前種に類するも、花莖に着生する状は、前種よりも密にして、稍、圓錐状をなし、且つ花期は、前種よりも早くして、多くは二月頃に開花す。又此種の花は、ムスカリに類するも、花蓋の裂片はムスカリの如く内曲することなく、却て開張することによりて、容易に區別するを

圖四十六第



スウレツア、スタンシヤヒ

得べし。

品種 普通ヒヤシンタス即ち和蘭ヒヤシンタス (Dutch Hyacinth) の主なる品種は次の如し。(I、II、III、IV、V、VIは花期の早晚を表はすものにして、Iは最も早く、IVは最も遅きものとす。)

- (イ) 一重咲にして白色花を開くものには、次の數種あり。
- アルバーチン (Albertine) 純白、I
- パロニス、ファン、トキル (Baroness van Thuyll) 純白、美大、I
- モンブラン (Mont Blanc) 雪白、IV
- グランド、ブランシュ (Grande Blanche) 乳白色、I
- ランノサンス (L. Innocence) 純白、美大、III
- ラ、フランシス (La Franchise) 乳白色、美大、III
- アンゼヌス、クリスチナ (Aureus Christina) 純白、美大、
- アンナ (Anna) 純白、美大、
- マダム、ファン、デル、フープ (Madame van der Hoop) 純白、美大、III
- グランデュール、ア、メル、エー、ユ (Grandeur a Merveille) 白地に淡紅色、美大、II

- ラ、グランデ (La Grandesse) 純白、美大、III
 ペー、ド、リュートローブ (Pai de l'Europe) 純白、
 アルプス、マキシムス (Albus Maximus) 純白、美大、II
 キング、オブ、ホワイト (King of Whites) 雪白、甚美、II
 スノー、ボール (Snow Ball) 雪白、III
 ヴォルテア (Voltaire) 白色に淡紅色を装ふ、III
 ゼネラル、エッター (General Vetter) 白色に淡紅色を装ふ、I
 グラン、エンキュール (Grand Vainqueur) 純白、美大、II
 (ロ) 八重咲にして、白色花を開くもの。
 フレボ (Flevo) 純白、
 ラ、ツール、ド、エルニユ (La Tour d' Auvergne) 純白、美大、I
 イサベラ (Isabella) 白色に淡紅色を装ふ、美大
 プリンス、オブ、ウォーターロー (Prince of Waterloo) 純白、III
 マダム、アンチンク (Mad. Antinck) 白色に微紅を装ふ、

- ブケー、ロイヤル (Bouquet Royal) 同名のものに薔薇色底暗色のものあり。
 エヂソン (Edison) 白色に紅色を装ふ。
 プリンセス、アリス (Princess Alice) 純白、
 (ハ) 一重咲にして、紅色花を開くもの。
 ガリバルディー (Garibaldi) 深紅色、美大、I
 アミー (Amy) 深紅色、II
 レディー、デル、ビー (Lady Derby) 淡紅色、II
 カウンテス、オブ、ローズベリー (Countess of Rosebery) 深紅色、III
 ロード、パーシー (Lord Percy) 淡紅色、II
 ロード、マコーレー (Lord Macaulay) 紅色、美大、III
 マリア、コルネリア (Maria Cornelia) 淡紅色、甚美、I
 ロトゼウス、マキシムス (Roseus Maximus) 薔薇色、大輪、IV
 ロージー、モーン (Rosy Morn) 薔薇色、II
 カトヂナル、ワイズマン (Cardinal Wiseman) 淡紅色、IV

- ロバート、スタイガー (Robert Steiger) 深紅色。III
 マリア、カザリナ (Maria Catharina) 前者と同物異名。
 エトナ (Etna) 薔薇色に深紅色の縞。
 ローザ、メル、エーユ (Rose à Merveille) 薔薇色、大輪。IV
 ファビオラ (Fabiola) 淡紅色に紅色の縞。IV
 フローレンス、ナイチンゲール (Florence Nightingale) 前者と同物異名。
 ゲルトルード (Gertrude) 薔薇色、大輪。III
 コスモス (Cosmos) 薔薇色。III
 ギガンテア (Gigantea) 薔薇色、大輪。
 ノルマ (Norma) 薔薇色、大輪。II
 モレノ (Moreno) 薔薇色、大輪。II
 ロア、デ、ベルシユ (Roi des Belges) 深紅色。IV
 ゼネラル、ブリッシー (General Palisier) 深紅色、美大。I
- (ニ) 八重咲にして、紅色の花を開くもの。

- ブーケ、テンドル (Bouquet Tender) 暗紅色。
 ノーブル、パール、メリット (Noble par Merite) 紅色、美大。
 ルーズヴェルト (Roosevelt) 薔薇色、美大。
 プリンセス、ロヤール (Princesse Royal) 深紅色。
 プリンセス、アレキサンドリナ (Princess Alexandra) 紅色、底紫。
 グルト、フォルスト (Groot vorst) 淡紅色、美大。
 デンタイ、メード (Dainty Maid) 淡紅色、大輪。III
 コイノア (Koh-i-noor) 紅色、半八重。IV
- (ホ) 一重咲にして、黄色花を開くもの。
- バード、オブ、バラダイス (Bird of Paradise) 鮮黄色。III
 キング、オブ、ゼ、イエロース (King of the Yellows) 深黄色、美大、晚咲。IV
 デーライト (Daylight) 橙黄色に少しく紅を装ふ。III
 オベリスク (Obelisque) 純黄、美大。III
 イエロー、ハムマー (Yellow Hammer) 鮮黄色、美大。

- マク、マホン (Mac Malou) 鮮黄色。
 ヘルマン (Hermann) 橙黄色。
 プリムローズ、バーフェクシオン (Primrose Perfection) 純黄、美大。III
 シチー、オブ、ハーレム (City of Harlem) 純黄、美大。
 アイダー (Ida) 黄色。III
 (ハ) 八重咲にして、黄色花を開くもの。
 ゲーテ (Goethe) 淡黄色。
 ソゼレオン (Sovereign) 黄色、底紅。
 サンフラワー (Sunflower) 暗黄色。
 ギクトリア (Victoria) 鮮黄色。
 (ト) 一重咲にして、青色又は紫色の花を開くもの。
 バロン、ファン、トウイル (Baron van Thuyll) 紫色、美大。I
 キング、オブ、ゼ、ブリュース (King of the Blues) 暗青色、美大。IV
 クキン、オブ、ゼ、ブリュース (Queen of the Blues) 淡青色、美大。IV

- マリー (Marie) 暗紫色、美大。II
 レオニダス (Leonidas) 淡青色、美大。II
 メネリク (Menelik) 黒色、美大。
 チャーレス、ディッケンズ (Charles Dickens) 青色に紫色を帯ぶ。II
 ザール、ペーター (Zar Peter) 淡青色、美大。III
 ブロンデン (Blondin) 淡青色、美大。III
 グラン、マートル (Grand Maitre) 青色、美大。II
 キャプテン、ボイトン (Captain Boyton) 紫青色、美大。II
 ゼネラル、ハヅロック (General Havlock) 暗紫、美大。III
 エンチャントレッズ (Enchantress) 淡青色、美大。II
 グラン、リラ (Grand Lilas) 青色、美大。II
 ロード、デルビー (Lord Derby) 淡青色、美大。III
 ビーネマン (Pienemann) 淡青色、美大。II
 ショーテル (Shotel) 淡青色、美大。II

(チ) 八重咲にして、花色青きもの。

ゲネラル、ケーラー (General Köhler) 青色、美大。

ファン、スバイク (Van Speijk) 紫青色、美大。

プリンス、アルバート (Prince Albert) 暗青色。

プリンス、オブ、ザクセワイター (Prince of Saxe-Weimar) 暗青色、美大。

ゼネラル、アンチンク (General Antink) 鮮青色。

デリカタ (Delicata) 淡青色、美大。

ブロックスベルグ (Blokberg) 淡青色。

ガリック (Garrick) 紫青色。

栽培法

ヒヤシンスをして美大の花を開かしめんと欲せば、先づ其根の發育を盛ならしめざるべからず。而して、ヒヤシンスは、秋に於て其根十分に發生し、翌春に至りて芽を地上に抽出するを可とするが故に、秋に於ける球根植付の時期は遅れざるを肝要とす。即ち、東京附近に於ける花壇への植付期は、十月頃を以て最も適當とするが如し。球根を植付くべき土地は、日當りよく、且つ肥沃にして排

水よきを肝要とし、植付の方法は水仙に準ず。球根植付の間隔は五寸内外にして、球根植付の深さ即ち被土の厚さは三四寸を適當とす。此際注意すべきは、球根植付の深さに不同なきこと是なり。植付の深さ不同なるときは、各株の發育亦不同にして、開花に遅速を來たし、花壇の美觀を殺ぐの虞あり。已にして、冬期に入らば、寒氣烈しき地方にては、球根を植付けたる地面に藁などを被ひ置くこと肝要なるも、元來、耐寒性强き花草なるを以て、東京附近にては、通例、防寒の法を施すの要なきが如し。やがて春に至り、芽地上に出でなば、藁を蔽ひたるものは、之を除くべく、開花前二三回、稀薄の液肥を施すを可とす。

花開き終らば、花莖をば其基部より切り取るべく、此くして結實の作用を妨ぐるときは、鱗莖肥大して翌年の開花に利あるものなり。已にして六七月頃に至り葉枯凋せば、球根を掘り取り、乾燥貯藏すること、他の球根と同様なるべく、後作植付の都合によりては、成るべく根を傷めぬやう廣く掘取りて、他へ移植すべきこと、亦他の球根に於けると異なるなし。

鉢植法 ヒヤシンスを鉢植となし、其開花を促進せんとするには、よく充實せ

る肥大の球根を選びて、五寸鉢に一本植となすべく、培養土としては、肥沃の壤土に腐葉土細砂などをよく混和したるものを用ふるを可とす。先づ鉢の底に、鉢の破片などを入れて底孔を塞ぎ、其上に、右の培養土を篩ひたる際に篩の上に残りたる粗粒土を少しく入れたる後、更に篩の目を通れる細粒土を入れて、鉢の八分目程を充たすべし。次に其培養土中に球根を挿植して、球根の頭が僅に地上に露はるゝやうにし、土中數寸の深さに其鉢を埋め置くこと七八週間に及べば、根は十分に發生し、芽も亦、少しく伸長するを以て、此に於て鉢を掘り出して、温室内に入れ、薄暗くして温度を華氏五十度位に保つべし。然るときは、芽は、やがて緑色を呈して、強勢を示すがゆゑに、此に於て、漸次日光に曝らし、温度を六七十度に保つべし。七十度以上の高温は、過度の成長を促し、且つ花の色澤を損するの虞あれば、避くべし。やがて花莖抽出せば、朝夕の二回、シリンドラ (Syndra) にて水を葉上に散布すべく、且つ稀薄の液肥を與ふべし。乾燥せる空氣と根部に於ける水の不足とは、開花を遲滞せしむるが故に、避くべし。ヒヤシンスの開花促進に於て、往々失敗することあるは、根の十分に發生せざるに先だちて、温熱を加ふるにあり。されば、

前述の如く、先づ鉢植せる球根を鉢のまゝ土中に埋むるか、鉢を戶外に置き、其上に椰子の纖維 (Coconut fibre) の如きものを五六寸も被ひ置きて、十分に發根せしめたる後、温室に入るべく、且つ當初は、苗を薄暗くすべし。之がためには、鉢を倒にして被ひ置くを便とす。又一重咲のヒヤシンスは、八重咲よりも開花促進に適す。水栽培 ヒヤシンスの水栽培は、前きに球根類の汎論に於て述べたる所と異なるなきを以て之を略し、茲には單に之に適する品種名のみを掲ぐべし。

紅色の花を開くもの

ファビオラ。レデー、デルビー、モレノ、ローゼウス、マキシムス、ローザ、メルゴエユ、ガリバルデー、ロバート、スタイガー、ロア、デ、ベルジュ等、

青紫色の花を開くもの。

ブロンデン、ザール、ベーター、エンチャントレックス、ロード、デルビー、ビーネマン、シヨータル、チャーレス、チックケンス、キング、オブ、ゼ、ブリュース、マリー、プリンス、オブ、エールス等、

白色の花を開くもの。

パロン、ファン、トウイル。ラ、グランデ。ランノサンス。マダム、ファンデル
フープ。スノーボール。ゼネラル、エッター。グランデュール、ア、メルエー
ユ。ラフランス。ホルテージャ等。

黄色の花を開くもの。

パード、オブ、バラダイス。デライト。アイーダ。キング、オブ、ゼ、イエロー
ス。プリムローズ。パーフェクション等。

ヒヤシンス

アネモネ

パイロット、チューリップ

レムブランド、チューリップ

ラナンキュラス



コチツソク

ハローヤ、カエロウ

アヒルソク、カエロウ

アホ子木

カネンキ、カエロウ

第八章 チューリップ

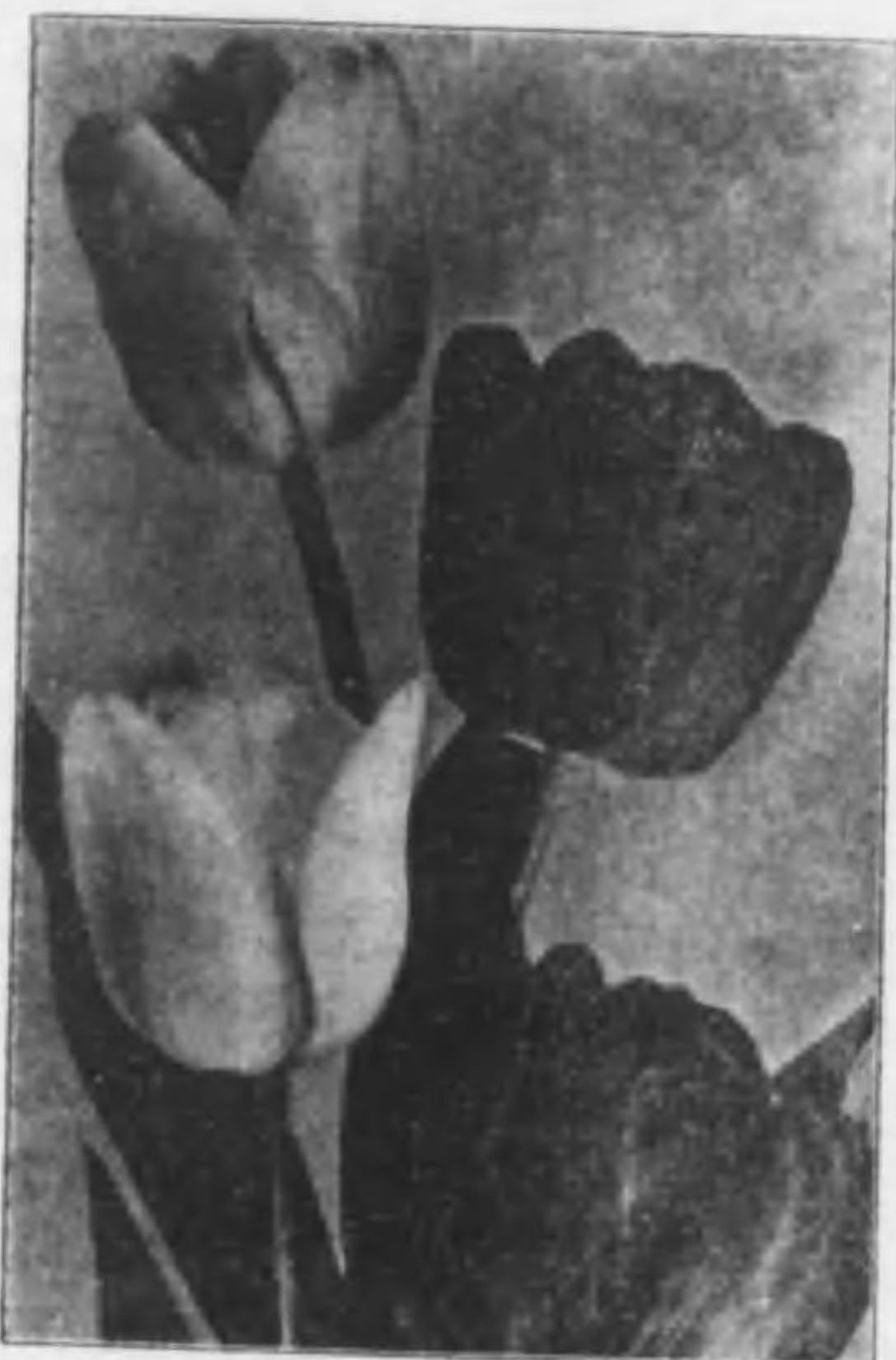
チューリップ (Tulip) は鬱金香と稱し、百合科に屬する球根植物にして、一重咲八重咲、並に早咲、晚咲などの別あり。花色亦種々ありて、花の艶麗なること、春咲球根類中之が右に出づるものなしと云ふも、敢て過言にあらざるべし。近年本邦に輸入せられたる花卉なるも、ヒヤシンスと共に、廣く各地に於て栽培せられ、地植鉢植として觀賞せらるゝのみならず、切花として多く需要せらる。古來和蘭は、チューリップを栽培すること甚だ盛にして、同國産の球根は、多く海外に輸出せられ、我邦も亦之が供給を仰ぐこと少からざりしが、近年新潟縣中蒲原郡は、チューリップの栽培盛にして、縣外に球根を移出すること漸く増加するに至れり。

性状及び原種

チューリップは、チュリパ (Tulipa) 屬の耐冬性多年生植物にして、歐亞の原産なりとす。而して Tulipa は、ベルシア語の Thonlybun 又は Tulipan 及び土耳其語の Tulband 即ち頭巾より出でたりと云ふ。鱗莖は膜質の皮を以て包まれ、其皮膜の裏面には往々毛を有す。此毛の硬軟、分布の状態等は種によりて等しか

●主として亞細亞産にして、
●細亞産にして、
●歐洲産にして、
●スアエオレ
●ンスの一種
●なり。
●褐色の皮膜
●を以て包まれ、
●す。

圖五十六第



アッリ-ユチ

六箇ありて、花蓋の基部に着生して雌蕊を圍み、其長さ花蓋よりも短し。子房は、上位にして、多くは三角形をなす。種子多し。

チュリバ属には八十餘種あり、之等の諸種を鑑別するに當り、注意すべき要件を擧ぐれば、凡そ次の如し。

一、鱗莖皮膜の内面に於ける毛の有無並に其毛の質及び分布状態。チュリバ、フラグランサス (T. fragrans) チュリバ、ハーゲリ (T. hageri) の如き種は、鱗莖皮膜の内面に毛を有することなきも、其他は多く毛を有す。而して、其毛は、皮膜内面一圓に分布するもあれば、又頂部にのみ多く存するあり、又基部にのみ多く存するあるなど、種によりて一ならず。

二、莖に於ける短柔毛の有無。チュリバ、スアエオレンス (T. suaveolens) の莖には短き柔毛あるも、チュリバ、ゲスネリアナ (T. Gesneriana) の莖には之なし。故に此點に注意することは、兩者の鑑別上、肝要とす。

三、葉に於ける斑點の有無。例へば、チュリバ、グライギ (T. Greigi) の葉には褐色の斑紋あるも、チュリバ、アイヒレリ (T. Eichleri) には斑點なきを以て、兩者を鑑別し得べきが如し。

四、花絲の基部に於ける鱗の有無。例へば、チュリバ、アイヒレリ (T. Eichleri) は花絲の基部に鱗あるも、チュリバ、グライギ (T. Greigi) には之なきを以て、兩者を鑑別し得るが如し。

五、花蓋の基部に於ける斑紋の有無並に其色彩。例へば、チュリバ、ゲスネリアナ (T. Gesneriana) には著しき斑紋なきを常とするも、チュリバ、アイヒレリ (T. Eichleri) には黄色にて圍まれたる黒斑あるを以て、兩者を鑑別し得べきが如し。

以上の外、莖の長短、葉の形状、大小、色彩、花の大小、形状、色彩、鱗莖の大小等も亦、皆種々の鑑別上、注意すべき事項なりとす。

チュリバ属中、比較的多く栽培せらるるは、次の二種並に其變種なりとす。

(一) チュリバ、スアエオレンス (T. suaveolens, Roth) 此種は、南ロシアの原産にして、早咲種の原種と稱せらる。莖は、其高さ六寸位に達し、短柔毛を以て被はる。葉は、三四枚ありて舌狀披針形をなし、主に莖の基部に生ず。花蓋は、上向して開き、其形鐘狀にして、花蓋の先端尖鋭なり。花色は、赤色、黄色等にして、花に芳香あり。葯は、黄色にして、花絲の基部に鱗なし。子房は、三角形をなし、柱頭甚大なり。花期は、三四月頃に

して此種の栽培せられたるものには八重咲あり。

(二) チュリパ、ゲスネリアナ (T. Gesneriana, L.) 此種は小亞細亞の原産にして、現今栽培せらるゝチュリパは、此種に出づるもの多し、莖は其高さ六寸乃至一尺餘にして、透かに前種よりも高く、且つ莖に短柔毛なし、葉は舌状又は廣披針状をなして三乃至五箇許あり、花は鐘状をなし、上向して開くこと前種と異なることなしと雖も、花蓋の先端鈍圓にして、種々の色彩を有す、花期は四五月頃とす、彼のダーキン、チュリリップ (Darwin Tulip)、レムブランド、チュリリップ (Rembrandt Tulip)、パロット、チュリリップ (Parrot Tulip) 等之に屬す(本章品種の部を参照すべし)。

以上二種の外、チュリパ屬にて栽培せらるゝもの二三種を擧ぐれば次の如し。

(三) チュリパ、オキユルスツリス (T. oculus-solis, St. Aman.) 此種は佛の南部、伊太利、瑞西等の原産にして、鱗莖皮膜の内面は、一面に柔毛を以て被はる、莖は平滑にして、其高さ一尺乃至一尺四五寸あり、葉は幅狭くして、先端尖り、葉數三四箇あり、花は、大にして先端尖り、通例紅色を呈し、花蓋の基部に黄色を以て圍まれたる黒斑あり、花期は四月頃とす。

(四) チュリパ、グライギー (T. Graeji, Regel.) 此種は、ターキスタンの原産にして、鱗莖皮膜の内面には、頂部に向つて多少の毛あり、莖は、其高さ八九寸に達して、柔毛を被むり、葉は粉綠色にして紫褐色の斑紋を有す、之によりて容易に他種と區別するを得べし、花は、鐘状をなして、中央部より漸く開張し、徑五寸許あり、花は火の如き紅色にして、其中心は黄色にて圍まれたる黒色を呈す、花期は三四月頃とす。

(五) チュリパ、クルシアナ (T. chusiana, Vent.) 此種は、齒齒牙より希臘、波斯に亙る一帯の地に産す、鱗莖は頗る小にして、其皮膜の内面は、一面に柔毛を以て被はる、莖は平滑にして、其高さ一尺乃至一尺四五

寸あり、葉は四五枚ありて、其形狭くして長し、花は小にして先端鋭く、花色は通例白くして、外側に紅色を帯び、其中心は紫黑色を呈す、花期は五六月頃とす、彼のレデー、チュリリップ (Lady Tulip) と稱するものは之に屬す。

(六) チュリパ、アイヒレリ (T. Eichleri, Regel.) 此種は、コカサスの産にして、ゲスネリアナ種に類するも、莖には柔毛を有し、且つ花は緋色にして、其中心に黄色にて圍まれたる黒斑あるを以て異なりとす、花期は四五月頃とす。

(七) チュリパ、エレガンス (T. elegans, Hort.) 莖には僅に柔毛あり、花は鮮紅色にして、中心黄色を呈し、先端著しく尖れり、蓋し、スアエオレンヌ種とアクミナタ種との雜種なるべし、花期は四五月頃とす。

(八) チュリパ、アクミナタ (T. acuminata, Vahl.) 此種は、其由来不明なるも、其花蓋の裂片、狭長にして、先端甚しく尖れるを以て、容易に他種と區別するを得、花色は、黄赤、並に斑入等とす。

(九) チュリパ、ピフロラ (T. biflora, L.) 此種は、コカサスの原産にして、莖の高さ二三寸乃至五六寸あり、花は、他種の如く、莖の頂に單生することなく、二乃至五箇を生じ、其色乳白にして、中心黄色を呈し、且つ外側に綠色を帯ぶ。

類別品種

チュリリップには、永き年月の間、交雜實生等によりて作成せられたる品種甚だ多し、今之等品種の主要なるものを記載するに先だち、其分類につきて述べん。

チューリップは、開花期により大別して、早咲種と晩咲種との二部となすことを得べく、早咲種は更に分つて、一重咲及び八重咲の二類となすを得べし、而して晩咲種には、パロット、チューリップ (Parrot Tulip)、ダーキン、チューリップ (Darwin Tulip)、レムブランド、チューリップ (Rembrandt Tulip)、コッターヂ、チューリップ (Cottage Tulip)、フロリスツ、チューリップ (Florist's Tulip) 等の別あり。

(一) パロット、チューリップは、一名ドラゴン、チューリップ (Dragon Tulip) と稱し、花蓋、即ち所謂、花瓣の縁邊には、大小種々の切れ込みあるを特徴とし、且つ其花美大にして直徑六七寸に及ぶ、花期は四五月頃にして、花色は種々あるも、黄赤并に兩者の混淆したものを以て、最も普通となす。

(二) ダーキン、チューリップは、種々の色彩ある無地の花(單色花)を開き(但し花心にのみ、地色と異なる色彩を有するものあり)、其花形は、普通の一重咲の如く、全開せずして、稍、壺状を呈するを常とす。花莖長くして二尺餘に達し、且つ水揚良好なるを以て、切花として需要甚だ多し。

(三) レムブランド、チューリップは、ダーキン種の改良種とも云ふべきものにし

て、花形較、大なり、花色は、ダーキン種の如く單色ならずして、一花に二種以上の色彩(縞、縁取等)あるを特徴とす。

(四) コッターヂ、チューリップは、一名五月咲チューリップ (May-flowering Tulip) と稱し、早咲種の開花を終れる頃より咲き出づるものにして、花蓋の先端尖りて、外方に反轉するを常とし、花莖亦長くして切花に適す。

(五) フロリスツ、チューリップとは、ビザール、チューリップ (Bizarre Tulip)、ビブレメン、チューリップ (Bybloemen Tulip)、ローズ、チューリップ (Rose Tulip) の總稱にして、ビザール、チューリップとは、黄色地に緋色、黒色、褐色等の縞、縁取などを有するものを云ひ、ビブレメン、チューリップとは、白地に紫色、黒色、褐色等の縞、縁取などを有するもの、ローズ、チューリップとは、白地に種々の赤色の縞、縁取などを有するものを云ふ。

尙ほ、フロリスツ、チューリップを細別せば、次の如し。

(甲) 花の地色白色を呈するもの。(White Ground)

〔フェザード、ローズ (Feathered Rose)〕

ローズ、チューリップ

花白くして、其周縁のみ、種々の赤色にて羽毛状に彩られたるもの。
フレイムド、ローズ (Flamed Rose)
花白くして、周縁赤く羽毛状に彩らるゝのみならず、花面に種々の赤色の縞其
他の模様あるもの。

ビブレメン、チューリップ

フェザード、ビブレメン (Feathered Bybloemen)
花白くして、其周縁のみ葉菜色・紫色・褐色・黒色等にて羽毛状に彩られたるもの。
フレイムド、ビブレメン (Flamed Bybloemen)
花白くして、其周縁の葉菜色・紫色・褐色・黒色等にて羽毛状に彩らるゝのみならず、花面にも亦同様の色彩を以て縞其他の模様を顯はすもの。

(乙) 花の地色黄色を呈するもの。(Yellow Ground)

ビザール、チューリップ

フェザード、ビザール (Feathered Bizarre)
花は黄色にして、其周縁のみ緋色・黒色・褐色等にて羽毛状に彩られたるもの。
フレイムド、ビザール (Flamed Bizarre)
花は黄色にして、其周縁の外、花面上にも緋色・黒色・褐色等の配色あるもの。

凡そ、チューリップは、其種子を播くときは、播種後五年内外にして開花す。當初の花は、常に無地(單色)にして、之をブリーダー、チューリップ (Breeder Tulip) と稱す。而して、此無地の花を開く實生、チューリップを培養するときは、若干年の後、遂に

四年乃至七年。

無地の花變じて、縞、縁取、羽毛状等の色彩を顯はすに至る。此くして、無地のもの變じて、色彩複雑となれるときは、其チューリップを名づけて、レクタファイド、チューリップ (Rectified Tulip) と稱す。前記のビブレメン、チューリップ・ローズ、チューリップ・ビザール、チューリップは、此レクタファイド、チューリップにして、花色の異なるによりて區別せらるゝものなり。又彼のダーキン、チューリップは、花色無地なるを以て、ブリーダー、チューリップの一種と見做すことを得べく、レムブラン、ド、チューリップ (Rembrandt Tulip) は、レクタファイド、チューリップ (Rectified Tulip) に相當すと云ふを得べし。

以上の分類に基づき、チューリップの品種の主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

- (天) 早咲種に属するもの(三四月頃開花するもの)。
- (一) 一重咲に属するもの。(I II III IV V は花期の早晚を表はすものにして、I は最も早く、V は最も遅し)。
- アルタス (Artus) 深紅色。II
- ピンク、ビューティー (Pink Beauty) 淡紅色。V

- クリソロラ (Chrysolora) 鮮黄色、大輪。I
 カナリー、バード (Canary Bird) 黄色。I
 コッターヂ、メイド (Cottage Maid) 薔薇色にして白色を装ふ。葉に黄色の覆輪あり。III
 クーリオール、カーヂナル (Coulcur Cardinal) 深紅色。IV
 カイゼルスクローン (Kaiserskroon) 深紅色にして黄色の覆輪。I
 クーリオール、ボンシオー (Coulcur Ponceau) 淡紅色にして、外側に白色を装ふ。葉に黄色の覆輪あり。II
 ローズ、グリドラン (Rose Gris de lin) 淡紅色、葉に黄色の覆輪あり。III
 アメリカン、ラック (American Lac) 薔薇色にして真鍮色を装ふ。V
 ロード、デルビー (Lord Derby) 純白大輪にして、大輪早咲種中開花最も早し。
 ヴァミリオン、ブリリアント (Vermillion Brilliant) 美紅色。I
 ダサルト (Dusart) 深紅色。II
 ヨスト、ファン、フォンデル (Jost van Vondel) 紅色に白色を装ふ、大輪。II

- ベル、アリアンス (Belle Alliance) 深紅色。II
 マース (Maas) 緋色、大輪、甚美。I
 オフィル、ドル (Ophir dor) 黄金色を呈し、黄色單瓣種中最も大輪にして且つ最も美なり。II
 クリムソン、キング (Crimson King) 深紅色にして、香氣あり。II
 ブライド、オブ、ハーレム (Bride of Harlem) 紅色にして白覆輪のものと、紅色にして黄覆輪のものとあり。III
 ロイヤル、スタンダード (Royal Standard) 白色と紅色、葉に銀色の覆輪あり。
 トーマス、ムール (Thomas Moore) 橙黄色。
 カリフォルニア (California) 黄色。
 ゴルデン、クェーン (Golden Queen) 黄色、大輪。I
 キング、オブ、ゼ、エルローズ (King of the Yellows) 黄色。II
 エルロー、プリンス (Yellow Prince) 黄色。II
 ホアイト、スワン (White Swan) 白色、大輪。III

- ラレーヌ (La Reine) 白色にして淡紅色を帯ぶ。II
 ホッタバツケル、ビュリア、エルロー (Pottbakker Pure Yellow) 純黄色、頗美。I
 ホッタバツケル、ビュリア、ホワイト (Pottbakker Pure White) 純白、大輪。I
 プリンセス、オブ、オーストリア (Princess of Austria) 黄赤色、香氣あり。III
 プロサーピン (Proserpine) 薔薇色、大輪、甚美。I
 クキン、オブ、ネザール、クィーン (Queen of Netherlands) 薔薇色にして白色を装ふ、美大。II
 ファン、デル、ネール (Van der Neer) 紫色、大輪、甚美。II
 デューク、ド、ベルラン (Duc de Barlin) 深紅色に黄色の覆輪、大輪。I
 デュセス、ド、バルマ (Duchesse de Parma) 紅色に黄色。III
 (二) 八重咲に屬するもの。
 イムペラートル、ルプロラム (Imperator Rubrorum) 深紅色。II
 ル、マタドル (Le Matador) 深紅色。III
 レックスマ、ルプロラム (Rex Rubrorum) 深紅色、葉に赤色の縞と銀色の覆輪と

あり。

- ルブラ、マキシマ (Rubra maxima) 深紅色、美大。II
 プランシユ、アチーズ (Blanche Hativo) 白色、大輪にして開花早し。
 ラ、カンデオール (La Candeur) 白色、葉に銀色の覆輪あり。IV
 ミュリロ (Murillo) 薔薇色に白色を装ふ。III
 ゴルデン、ビュリティー (Golden Beauty) 黄金色、甚大輪。IV
 グロリア、ソリス (Gloria Solis) 紅色に黄色の縞を顯はし、開花早し。
 トールネソル (Tournesol) 深紅色に黄色の深覆輪、大輪。II
 レオ十三世 (Leo XIII) 深紅色にして中心黄色、甚大輪にして美。I
 プリンセス、オブ、エールス (Princess of Wales) 黄色、美大。III
 クーロンヌドル (Couronne d'Or) 黄色、美大。II
 プリンセス、オブ、オレンジ (Princess of Orange) 黄色にして中心黄金色。III
 ファイア、ドーム (Fire Dome) 黄色を帯ぶる深紅色、美大。II
 サフラノ (Saffrano) 紅黄色。III

サルバトル、ローザ (Salvator Rosa) 薔薇色にして白色を装ふ。II

キルヘルム三世 (Wilhelm III) 深紅色、甚大輪。II

ブリュート、フラッグ (Blue Flag) 青紫色、美大。IV

(地) 晚咲種に屬するもの(四五月に開花するもの)。

(一) ダーキン、チューリップ。に屬するもの。

ホワイト、クイン (White Queen) 乳白色にして雄蕊黒、球狀の大輪。II

ツル (Zulu) 紫黑色にして中心稍、白し、球狀。III

ゼ、サルタン (チュエリッック) (The Sultan) (Black Tulip) 海老茶色を帯べる黑色、球

狀。II

クララ、バット (Clara Butt) 薔薇色。IV

マーガレット (Marguerite) 淡紅色、甚美。III

グロウ (Glow) 朱紅色、中心は白色にて縁取られたる暗青色。I

(二) レムブランド、チューリップ。に屬するもの。

ロージー、ゼム (Rosy Gem) 白地に淡紅色及び紅色の縞。IV

クリムソン、ビューティー (Crimson Beauty) 深紅色にして白及び黒の縞あり。IV

ラ、コケット (La Coquette) ライラック色に黒き縞あり。

マルコ、スパド (Marco Spado) 白地に紅色の縞。III

ビューティー (Purity) 白地に紅紫色の覆輪と縞。IV

ゼメレ (Denela) 白地に薔薇色及び暗紅色の縞。アムステルダムにて一等賞

を受けたり。IV

クアシモド (Quasimodo) 紫紅色の地に白の縞、アムステルダムにて一等賞を

得たり。IV

(三) パーロット、チューリップ。に屬するもの。

アドミラル、ファン、コンスタンチノーベル (Admiral van Constantinopel) 紅色。

オーランチャカム (Aurantiacum) 橙黄色。

カフェ、プールのプレ (Café Pourpre) 暗褐赤色。

クローリールド、カフェ (Couleur de Café) 褐色に深黄色。

クリムソン、ビューティー (Crimson Beauty) 深赤色に黒斑、甚美大。

プレシオザ (Preciosa) 赤色に黄色の覆輪及び縞。

ルテア、マジョア (Lutea major) 美黄色。

パーフェクタ (Perfecta) 黄色に赤色の斑點。

ルブラ、マジョア (Rubra major) 暗赤色。

マルクグラーフ (Markgraf) 黄色に赤色。

栽培法

チューリップには、早咲種と晩咲種とありて、各自開花の期を異にするのみならず、一般に早咲種は、晩咲種よりも草丈低きを常とし、花の色彩、亦品種によりて各相等しからざるものなり。されば、チューリップを花壇に栽培するには、開花期と花色の調和とに注意して、品種の選擇をなさざるべからず。

チューリップは、腐植に乏しからざる肥沃の砂質壤土に最もよく適するも、排水よき土壤は、皆以て之が栽培を行ふを得べく、特に之に、よく腐熟せる厩肥などを適當に混加するときは甚だ可なり。但し、腐熟せざる厩肥は、却て球根を害するがゆゑに、之を避くべし。又排水を佳良ならしめんがためには、花壇を高く設くべく、且つ深耕するをよしとす。尙ほ、チューリップは、強風の襲來なき向陽の地を好

むものにして、低き常緑樹の下、塙壁の下などの如き蔭地にては、美大の花を開かざるものとす。

チューリップの球根を植付くる期節は、地方によりて異なれども、通例ヒヤシンスと等しく、十月頃を適當とし、其植付の方法も亦、ヒヤシンスに等し。又植付の深さは、ヒヤシンスよりも較、淺きを可とし、球根間の距離は五寸内外にて可なり。チューリップは、ヒヤシンスと等しく、耐寒性强き花卉なるも、寒地にては、冬間、藁などを被ひ置くを可とし、施肥も亦、ヒヤシンスに準ずべし。

チューリップは、品種によりて、早きは三月頃より開花し、遅きは五月頃に及ぶ。花の色彩、多種多様にして、花の觀賞に佳なるは勿論、品種によりては、葉に覆輪縞などありて、葉の賞すべきものあり。かくて、花を賞し了らば、花莖を切り去りて、結實せしめざるやうにし、以て球根の發育を圖るべし。已にして、六七月頃に至り、葉黄變枯凋するに至らば、球根を掘り上げ、乾燥して、土砂などを除きたる後、秋の植付期まで、乾燥清涼の場處に貯藏すべし。此際、球根の側面に着生せる子球は、必ず之を分離し、別に貯へ置きて、秋苗床に植付け、二三年培養したる後、開花せしむる

を可とす。子球の附着せるまゝにて、球根を植付くるときは、開花に要すべき球根中の養分は、子球の發育に向つて消費せられ、爲に翌春の開花に害あるものなれば、注意せざるべからず。尙ほ、チューリップは、ヒヤシンスなどと異なりて、秋に植付けたる球根中の養分は、葉・花・新球根等の發育に向つて消費し盡さるゝを以て、翌年落花後に至りて掘り上げる所の球根は、前年の秋に植付けたるものにあらずして、其實、全く新に形成せられたる球根なりとす。而して、此新球根は、翌春開花せしむるに可なるも、發育の不良なるものは、苗床にて培養するを可とす。

チューリップを蕃殖するには、子球を用ふる外、播種法による。此法を行ふには、種子の熟するや、直に採收して、苗床に播下すべし。而して、發芽せる苗は、通例、便宜上、開花するまで、苗床に残し置くものにして、大抵播種後五年内外にして開花す。チューリップの實生は、前きに述べたるが如く、當初は必ず單色の花を開くものにして、數年の後に至り、始めて複色の花を開くことは珍らしき事實なりとす。要するに、實生は、開花に數年を要するも、其法、容易にして、且つ甚だ趣味ある蕃殖法なりとす。

チューリップは、花壇其他の露地に栽培せらるゝのみならず、又鉢植となす。其法、ヒヤシンスに於けると異なるなし。尙ほ、最初より一箇づゝ鉢に植付くることなく、淺き箱の類に多數の球根を植付け置き、開花に近づきて、一々鉢植することあり。箱内に入るゝ土壤は、腐植に富める砂土を用ひ、移植の際に根を傷つけざるやう注意するを要す。

其他チューリップの水栽培並に開花促進法は、すべてヒヤシンスに準ず

アネモネ (*Anemone*) は、チューリップ・ヒヤシンス・水仙等と共に春咲球根類に属す。此花卉は、露地にては、通例四五月頃、高さ一尺許の花莖の頂に開花し、其花容は、罌粟又は菊などに類し、一重咲八重咲の別あり。色彩亦豊富にして、艶麗なるを以て、鉢植・地植として觀賞するに適し、又切花となすも可なり。英語にて、此花卉を風の花 (*Wind Flower*) と稱するは、希臘語のアネモス (*Anemos*) 即ち風に由來するものにして、此花卉の風によりて飛散し易きがため、斯く命名せられたるものなりと云ふ。

アネモネの本邦に於て栽培せらるゝに至りしは近年のことなるも、歐洲にては古くより之を栽培し、リビエラ (*Riviera*) 地方は特に多く之を産す。

性状・原種及び品種

植物學上、アネモネと稱するものは、毛茛科アネモネ (*Anemone*) 屬の植物にして、此屬には、約八十五種ありと稱せらる。何れも、耐寒性强き多年生草本にして、主に北部温帯地方に自生す。莖は、通例直立し、其高さは種により

第六十六圖



アネモネ

て頗る相異あり。即ち秋牡丹 (*A. japonica*, Sieb. et Zucc.) の如く二三尺の高さに伸長するもあれば、又雪割草アネモネ、ランタンキュロイデス (*A. Ranunculoides*, L.) などの如く僅に數寸の高さを有するに過ぎざるものあり。葉は、根生葉にして、種によりて種々の程度に分裂す。花は、總苞を有する花莖又は枝の頂に生ず。花瓣は之を缺くも、萼片は花瓣状をなして色彩に富み、其數種によりて相異あり。雄蕊は多數にして、萼片より短く、且つ、其雄蕊中、外方に位するものは、時に稍、花瓣の形をなすことあり。雌蕊は花托の上

に數多密集し、果實は瘦果より成る。花期は多く春なるも、其他の季節に開花するものあり、例へば、秋牡丹の九十月頃に開花するが如し。

せば、次の如し。

- 一、球根(塊莖)の有無。
 - 二、總苞に於ける柄の有無。
 - 三、總苞分裂の状態。
 - 四、花托の形狀。雌蕊の數多密生する花托は種によりて圓柱狀・球狀等をなす
 - 五、莖に於ける分枝の有無。秋牡丹の如く莖の分枝せるもあれば、又アネモネ、コロナリアなどの如く莖の分枝せざるもあり。
 - 六、根生葉分裂の状態。
 - 七、莖の高さ。
 - 八、花の大きさ、色彩及び花期。
- アネモネ屬中、園藝上注目すべきものは、次の數種なりとす。
- (一) **アネモネ、コロナリア**(*A. coronaria*, L.) 此種は、南歐の原産にして、地下に塊莖を有し、莖の高さは約一尺許あり。根生葉は細かに分裂し、總苞は無柄にして三四箇に深裂し、各裂片は更に淺く不規則に細裂す。花は大にして徑二寸餘に及び、花

形稍、罌粟の花に類するを以て、罌粟咲アネモネ(Poppy Anemone)と稱せらる。萼片は、其數六(乃至八)箇にして、萼片の先端稍、丸味を帶ぶ。雄蕊は青色を呈し、果實は瘦果にして絨毛あり。花期は四月頃とす。

此種は、英國に於ては今を去ること三百餘年の古より既に栽培せられたるものにして、品種頗る多く、一重咲の外、半八重咲・八重咲などあり。花の色は、紅・紫・藍・白等とす。又此種の變種に菊咲アネモネ(*Thrysanthemiflora*)と稱するものあり。菊に似たる花姿を有し、美麗なるものなり。

アネモネ、コロナリアに由來する諸品種中、主要なるもの數種を擧ぐれば、次の如し。

- (イ) 一重咲に屬するもの。
- ゼ、ブライド(The Bride) 白色。
- ブラーマ(Brahma) 白色にして中心紫。
- キング、オブ、スカレット(King of Scarlets) 緋色。
- イースタン、クェーン(Eastern Queen) 紅色にして乳白色と黒色とを混す。シリ

アの産とす。

ヒス、エキセレンシー (His Excellency) 緋色、底暗色。

ギクトリア、チャイアント (Victoria Giant) カーン、アネモネ (Queen A.) にして
色彩種々あり。

レッドドラゴン (Red Dragon) 深紅色と白色。

アードライ (Ard Righ) 紅紫色。

オリダ (Orida) 淡紅色。

マダム、ドムブレン (Madame Dombraïn) 紫色。

セントブリジッド (St. Bridgid) 色彩種々なるも、底は黒色を呈す、半八重咲な
り。

(ロ) 八重咲に屬するもの。

ブリュール、ヘアード (Blue Beard) 紫藍色。

ブラッシュ、ビューチー (Blush Beauty) 白色にして淡紅色を裝ふ。

シャポード、カーヂナル (Chapeau de Cardinal) 紅色。

ファイア、キング (Fire King) 深紅色。

ローズ、ド、ニース (Rose de Nice) 淡紅色に紅縞、菊咲。

ローズ、ミグノン (Rose Mignon) 紅色。

サー、ジョセフ、バックストン (Sir Joseph Paxton) 白色にして、中心は莖菜色。

スカーレット、キング (Scarlet King) 深紅色。

スノーボール (Snowball) 雪白色、菊咲。

(二) アネモネ、ホルテンシス (*A. hortensis*, L.) 此種も亦、南歐の原産にして、莖の高
さ一尺許に達し、分枝することなし。前種の如く、古くより栽培せられたるものな
り。花形、前種に比し、細長くして尖り、且つ較、展開して咲き、星形をなすを以て、**星咲**
アネモネ (Star Anemone) 又は**リビエラの星咲** **キンドフラワー**の稱あり。葉も亦、前
種に比して廣く、且つ裂け方疎なるを以て、廣葉のアネモネ (Broad-leaved Garden
Anemone) の名あり。花は前種よりも、較、小なるを常とし、紅、紫、白等、品種によりて種
種の色彩を呈す。花期は四五月頃とす。寒風に當らざる暖處に存する輕き排水よ
き土壤は、最もよく之が栽培に適す。此種も亦、塊莖を有す。

此種に由來する品種には、次の如きものあり。

ジュエル (Jewel) 紅紫色、底白。
 スカーレット・ゼム (Scarlet Gem) 紅色、底白。
 ホワイト・ゼム (White Gem) 白色、底青。
 ダブル・パープル (Double Purple) 紫色。

(三) アネモネ・フルゲンス (A. fulgens, Gray.) 此種は、佛國の原産にして、前種の一變種を以て目する人あるが如く、頗るよく、前種に類するも、花形較、大にして、花色も亦緋色アネモネ (Scarlet Anemone) の稱あるが如く、美なる緋色を呈し、黒色の雄蕊と反映して、一層の美觀を呈す。花期は五月頃とす。此種も亦塊莖を有す。此種に由來する品種には、次の如きものあり。

アルドボロヘンシス (Aldorohensis) 緋色にして、心は藁色を呈し、黒斑あり。
 マルチペタラ (Multipetala) 緋色にして、心に黒斑あり。瓣多數。
 グレーカ (Graeca) 希臘の産にして、緋色なるも心黒く、又時に心に乳白色の輪紋もあることあり。

アンニユラタ (Annulata) 緋色にして、心に乳白色の輪紋と黒斑とあり。

マルモラータ (Marmorata) 緋色にして、多少白斑あり。

カルミネア (Carminea) 紅紫色。

サウザン・スター (Southern Star) 緋色、底白。

フロレブレノ (Flore-pleno) 深紅色、重瓣。

以上三種は、何れも球根を有し、春咲アネモネ中、最も主要なるものにして、之に次ぐは、次の數種なりとす。

(四) アネモネ・ヘパチカ (A. Hepatica, L.) 此種は、スハマサウ又はミスミサウと稱し、別に雪割草の名あり。本邦山地に自生する宿根草にして、支那及び歐米にも産し、球根を有せず。葉は掌狀に三裂し、葉柄長くして毛あり。花莖は數箇ありて、早春葉叢の間に抽出し、每莖其頂に一花を着く。花莖は、其高さ四五寸にして、毛を被むり、總苞は萼狀をなして花の下に存す。花は花冠を缺くも、萼片瓣狀をなして、紅紫・白等の色彩を呈し、其數六乃至八箇あり。落花後、新葉出でて、舊葉に代る。葉は、其裂片の先端に於ける銳鈍を異にし、之によりてミスミサウとスハマサウとに分た